

---

# 嵐を呼ぶ園児&ネコ型ロボット&ケロン人 ～世界を揺るがす大決戦!～

エルド

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

嵐を呼ぶ園児&ネコ型ロボット&ケロン人 〜世界を揺るがす大決戦！〜

### 【Nコード】

N2341E

### 【作者名】

エルド

### 【あらすじ】

クレヨンしんちゃん、ドラえもん、ザ・ドラえもんズ、ケロロ軍曹のクロスオーバー作品！行方不明になった主人公と仲間達を探す、残されし者達に襲いかかる敵は、行方不明の彼らだった…！？果たして、残されし者達は彼らを止める事が出来るのか…？

## 第一話：行方不明と共に来る者達

ここは春日部。

嵐の園児こと、“野原しんのすけ”とその一家が暮らす、平和な町である。

しかし、この町にいつもと違う事があった。

「しんのすけー！」

「何処にいるのー！」

あのしんのすけの行方が、分からなくなってしまうている事だ。

だが、しんのすけだけではない。

春日部防衛隊の風間にマサオ、ネネとボーちゃんまでも帰っていないのだ。

今の時間帯は夜の9時。

とつくに帰っている筈の時間に、彼らは揃って家にいない。心配になった彼らの家族は、全員で探しているのだ。

「警察に頼んでも、まだ分かんないなんて…」

「しんのすけー！」

彼らは一日中、探し続けた…。

「ドラえもん！」

時を同じくして、“野比のび太”も出歩いていた。

親友であるネコ型ロボットである“ドラえもん”が行方不明だからだ。

友達のしずかやジャイアン、スネ夫と共に探す。

しかし、一向に見つからない上、手がかりもない。

「ドラえもん……ドラえもおおおー……んっ！……！」

悲痛な呼び声が、夜のスキケ原に響いた…。

「軍曹！ 何処にいるの！」

さらに時を同じくして、日向家でも異変は起こっていた。

侵略者でもあり、居候でもあるケロロ小隊の面々が、忽然と消えてしまっていたのだ。

心配になった“日向冬樹”と“アングル・モア”は探しに出たのだ。

「あ、あのボケガエル、また何か企んでるんじゃないでしょうねー！」

口ではそう言うものの、かなり心配した様子で冬樹の姉“日向夏美”も探しに出ている。

「西澤さんも探してるみたいだけど、軍曹達は見つからないみたいだし…」

「おじさま…」

「小雪ちゃんの方にも、ドロロは帰ってないみたい…」

とうとう今日、この三組が探す者達を見つけることは、遂に出来なかった…。

――朝

（野原家）

「しんのすけ……」

家に帰ってから一睡もしていないみさえは、眠気を追い払うと外を見る。

「もう、朝ね……」

「そうだな……」

ひろしも眠い目をこすり、みさえと同様に外を見た。

するとふと、何かが窓の外にいた。

それは濃い青い色の身体で、黄色い帽子をかぶった蛙が、二足歩行で歩いてきたのだ。

（幻覚が見えてんのか……？）

ひろしはそう思ったが、隣にいるみさえも信じられないといった様な目で外を見ていた。

「みさえも見えるのか……！」

「えっ！？　じゃあ、あなたも？」

顔を見合わせている間に、蛙は窓を開けて家の中に入ってきていた。

「どうもです」 野原さんですか？」

「そ、そうだけど、あなたは？」

「そうですか」 じゃあ…」

ひろしの言葉を見無視し、静かに蛙は呟いた。

「ここで死んでもらうですー！！！」

蛙は凄まじい速さでひろしを殴り飛ばす！

「ぐへえ！！？」

「あなた！？」

「弱っちいですう！」

ひろしの元にみさえは駆け出す！

それを見届けると蛙は口を開き、エネルギーを溜め始める。

「これで終わりですう！ タママ…！」

ひろしはみさえを庇う様に抱きしめると、二人は目を閉じた…。

く空き地く

その頃、のび太達が集まっている空き地でも、何者かの襲撃を受けていた。

「ジャイアン！ 大丈夫！？」

「クソ！ てめえ！ 何もんだ！？」

ジャイアンの叫びに、箒に跨って空を飛んでいる魔女の服装をした少女はバカにしたかの様に笑った。

「あんた達をやっつけに来たのよ！」

「何でそんな事を…！？」

「うるさい！ えいつ！」

のび太の問いを無視し、手をかざす。

すると、周りにあった小石が宙を浮き、のび太達を襲った！

「いてっ！！」

「きゃあ！！！！」

「えへへっ、このままやっつけちゃおう」

四人は正に、手も足も出せなかった…。

日向家

さらにさらに、日向家にも襲撃があった…。

「こんのお!!」

「ひらり！」

突如現れた、角の生えた赤いタヌキと夏美が戦闘を開始していた。しかしいくら攻撃しても、全て自分の方向に返ってきてしまうのだ。

「も〜！ 何で当たらないのよ!!」

「バカが！ このひらりマントの前に、攻撃なんか無駄だ！」

その状況に冬樹とモアは只、見ていることしか出来ずにいた。

「さあ、終わりだ！」

赤いタヌキは角を夏美に向けると、牛の如く駆け出す！

「えっ！？ えっ!?」

突然の事である為か、夏見は避ける体勢を作ることが出来なかった。

「姉ちゃん（夏美さん）!!?」

二人は駆け出すが、間に合いそうに無かった。

違う場所にいるが、絶体絶命の状況だけは一緒の三組。

しかし、奇跡というものは起こるものであった。

「そこまでにしてもらいたいな、“タママ”二等兵」  
「あっ!?!」

エネルギーを溜めるのを止め、声のした方向に向く。

そこにいたのは紫色をし、黒い帽子をかぶった蛙だった。  
手にしている銃を構えながら、タママと呼んだ蛙を睨んでいた。

「ガ、“ガルル”中尉…!」

「一般家庭に攻撃とは、どういう事かな?」

「くっ…! こうなったら、まとめて始末するですう!!!」

タママは駆け出し、ガルルに向かって飛び蹴りをする！

「甘いな」

それをあつさりと右にかわし、体勢を立て直そうとしているタママの額に銃を突きつける。

「し、しまったですう…！！」

銃の引き金を引いた瞬間に放たれた麻酔針により、タママはそのまま眠りに落ちた…。

「…ふう、終わったか」

銃を下ろすガルルに、ひろしとみさえ、起きたひまわりとシロは何が何だか分からなかった。

「あ、あのう…」

「どうもすみませんでしたな。ご迷惑をおかけしまして」

「い、いえ、助けてくれてどうも…で、あなたは？」

「私ですか？ 私はガルルと申します」

「そこまでだ！ しんのすけ君の友達、“ネネ”くん！」  
「何ですって！？」

黒い魔女の少女は上から聞こえた声に反応し、上を見上げた。

「アクションキック！！！」

突然の攻撃になす術もなく、攻撃を喰らい、そのまま地面に転がり落ちた。

「悪いが、眠ってもらおうよ！」

着地した男は魔女の少女の首に手刀を喰らわすと、少女はガックリとうなだれた。

「つ、つええ……！」

「君達、怪我は無いかい？」

「は、はい！ お陰さまで……」

「ヒーローさん！ あなたのお名前は……！」

スネ夫の言葉に、男はこう返した。

「私かい？ 私は“アクション仮面”。正義の味方だ」

「エル・マタドーラ」！ やめてよ！」

「あうあうっ！」

「なにっ！！？」

「「えっ！？ 誰！？」「」」

日向家の方でも、二人の助っ人が現れていた。

それは赤いタヌキとそっくりで、色と服装が違っただけの二人だった。

「ドラニコフ」に「ドラリーニョ」！？ 捕まえ損なった二人が  
「！」

「やめないんだったら…シュート！！！」

ドラリーニョは持っていたサッカーボールを強烈な蹴りで放つ！

「そんなもの！ ひらり！」

瞬時にサッカーボールをはね返すが、瞬時に後ろに回りこんでいた  
ドラニコフに気づかなかった。

「んっ！？ し、しまっ…！！！」

「アオオオオオオオオッ！！！！！！！」

唐辛子エキスをすでに飲んでいたドラニコフの口から、炎の渦が巻き起こる！

慌ててエル・マタドーラは、はね返そうとするが、気付くのが遅<sup>ズ</sup>きた。

「ぎゃああああああああつ！！！！？」

あつという間に炎の渦に巻き込まれ、見事に真っ黒コゲになったエル・マタドーラは倒れた。

「ふう〜。危なかったねえ、大丈夫？」

「な、何とか…」

「すごいすごい！ タヌキさんがまた来たよ！」

「ありがとうございます！ っていうか感謝感激？」

お礼の言葉に二人は照れながら頭をかいた。

「ところで！ あんた達は何なのよ！」

「ボクはドラリーニョ！ こっちはドラニコフ！ ボク達はドラえもんズのメンバーさ！」

「アウアウッ！」

「『ドラえもんズ？』」

野原一家、のび太達、日向家に現れた謎の人物達。  
これが、大いなる戦いの伏線である事に誰も気づかなかつた…。

## 第一話：行方不明と共に来る者達（後書き）

この小説を読んで頂き、誠にありがとうございます！  
ご感想、ご指摘をお待ちしております。

## 第二話：裏山へ行く者達（前書き）

襲い掛かってきた三人を倒してくれた者達と共に、襲撃者達から話を聞けるのだろうか？

## 第二話：裏山へ行く者達

〔野原家〕

「お分かり頂けましたか？」

「「な、何とか…」」

その頃、野原一家はガルルによつて襲い掛かつて来たタママの事や、ガルル自身の事などを聞かせてもらっていた。

「つまり、あなたはケロロ小隊の様子を見に来た時に、偶然にタママさんを発見して今に至る訳ですか？」

「ご理解いただき、感謝します」

「いえいえ、感謝しなくちゃいけないのはこっちですよ」

みさえの言葉を丁重にガルルは受け取ったと同時に、ひろしは疑問を投げかけた。

「でも、あんたの話の通りなら、このタママって人も悪い人じゃないですよね？」

「そうです」

「じゃあ、どうして俺達を襲つて…」？」

「それは…」

ガルルが答えようとした直後、眠っていたタママは目を開けた。

「…あれ？ 僕は一体…？」

「起きたか、タママ二等兵」

起きたタママは、ガルルを見た瞬間に高速で後ろに後ずさりをした。

「ええ！？ 何でギロ口伍長のお兄さんがここに！？ ……っていうか、ここ何処ですう？」

「…やはりか」

「ど、どういう事ですか？」

「恐らく、タママ二等兵は…」

ガルルは一旦区切ると、すぐに次の言葉を発した。

「操られていた、という事です」

「「操られていたあ！？」」「」

驚きの発言に、ひろしとみさえは大声を上げていた…。

く空地く

「つまり、その子は操られていたの？」

「そうつ事だ」

一方その頃、のび太達もアクション仮面から説明を受けていた。

彼がもう一つの地球のある“平行世界”から来た事。

そして、その平行世界からこの世界にやって来た“ハイグレ魔王”を追いかけてきた事。

ハイグレ魔王の力を感じて、この場に来た事などを語った。

「んでよお。その灰くれ魔王とかいう奴が、こいつを操ってたのか？」

「ジャイアン、ハイグレ魔王だよ」

「その通りだよ、武君」

名前はともかく、それ以外は当たっていたのでアクション仮面は頷いた。

「でも許せないよ。他人を操って、ぼく達を襲わせるなんて…」

「それで、この子は大丈夫なんでしょうか？」

「心配しなくても大丈夫。気絶すれば、ハイグレ魔王の力は消えてしまうからね」

ホツとする静香を余所に、スネ夫がある事に疑問を抱いた。

「アクション仮面さん。思ったんだけど、何でそいつはこの世界に来たの？」

「それは…」

アクション仮面は少し間をおいてから、言葉を発した。

「“復讐”だ。私と、しんのすけ君に対しての…ね」  
「「「復讐？」」」

（日向家）

そして日向家でも、ドラリーニョとドラニコフから説明してもらっていた。

彼らが二十二世紀、未来から来たネコ型ロボットである事。

ドラえもんズという七人のチームの様なものに入っている事。

そのドラえもんズの仲間に襲われた為、襲ってきたメンバーの中にいなかった“ドラえもん”  
を頼ってきた事を話していた。

「あんだ。あたしに襲い掛かってきた事とか、ホントに覚えてないの？」  
「ああ…」

そして今は、目が覚めたエル・マタドーラに話を聞いていた。

しかし彼はタママ同様に夏美に襲い掛かった記憶などが無かった。

「あれれ？ どういうことかな？」

「もしかして、操られてたんじゃ…？」

冬樹の何気ない一言に、全員がハツとする。

「そつかゝ！ 操られてたのか！」

「ホントに操られてたの？」

「でも、この人は嘘をついてないと思うよ。姉ちゃんだってそう思ってるでしょ？」

「う…」

冬樹の言葉に夏美はグウの音も出なかった。

確かに嘘をついているとは、何故か夏美も思えなかったのだ。

「だが、操られていようがいまいが、あんた達を襲っちまったのは事実だ。すまない！」

「い、いいのよ！ 悪いのはあんたを操ってた奴なんだから！」

「そ、そうだよ！」

頭を下げるエル・マタドーラに、慌てて冬樹達はそう言った。

「でも、操られたマタドーラが僕達の家に来るなんて変だよ。もしかしたら、消えちゃった軍曹達の事と関係が…」

「あるぜえ」

「「「「「「！！？」」「」「」「」」

突如聞こえた声に、全員は反応して声のした外を見る。

外には、メガネをかけた黄色い蛙が、自身に良く似たロボットに乗っていたのだ。

ドラえもんズの彼らは誰だか分からなかったが、冬樹達は大声を上げて彼の名を呼んでいた。

「くくくく（曹長さん）！！！！」

「くくくくくくくく」

“クルル”と呼ばれた黄色い蛙は、気味の悪い笑いをしていた。

「知り合い？」

「うん。行方が分からなくなった軍曹の部下なんだ。一緒に行方不明だったんだけど…」

「少しいなくなっただけで、オメエラ大げさじゃねえかあ？」

「そんな事はどうでもいいのよ！　クルル！　ボケガエルとかギロ口の場所知ってんでしょ！」

「さあ〜な〜。くくくくくくくく」

夏美の怒りの混じった質問に、クルルは笑いながら答える。

「あんたねえ…！」

「だが、俺について来れば分かるかもしれないねえ〜ぜえ〜？」

「えっ…！？」

「隊長達の場所が知りたきゃ、ついてくるんだなあ？」

彼は口ボットを起動させると、空高く飛んでいった…。

「あっ！？　待ちなさいよ！」

「追いかけよう！ 姉ちゃん！」

「私も行きます！」

「俺達も行くぜ！ 迷惑をかけた借りを返さなくちゃな！」

「このタケコプターを使いなよ。頭につけたら、スイッチを入れれば空を飛べるよ！」

「あうあうっ！」

全員がタケコプターを頭につけ、スイッチを入れる。

回転すると、身体が重力を無視してフワリと宙に浮き始める。

「わーっ！ 凄い凄い！」

「頭につけるだけで飛べるなんて凄いです！」

「ホントに未来っぽいわね」

「んなこと言ってねえで、行こうぜ！」

この一言で我に帰えると、すぐにクルルの後を追っていった…。

～野原家～

「しんちゃんのお父さんとお母さん、いますか！？」

「その声は…“マサオ”くん！？」

ひろしとみさえが大急ぎで窓を見ると、おにぎりに似た頭の持ち主、マサオがいた。

「マサオくん、今まで何処に…」

「そんなことよりしんちゃんが小学校のうらの山に！」

「！ ホントかい！？」

「行きましょ！ あなた！」

「じゃあ、ぼくについてきて！」

走るマサオの後を、ひろしとひまわりを抱いたみさえが追っていた…。

「ガルル中尉、どうしますかぁ？」

置き去りにされた二人は、とりあえずその場で話をしていた。深刻な顔でガルルは、今来たマサオの事を考えていた。

「…あの少年、何か臭うな」

「えっ？ あの子は別に臭く無かったですよ？」

トンチンカンなタママの言い分に、少々頭を悩ませながらもガルルは駆け出した。

「ああっ！？ 待って下さいよお！！」

タママも慌てて後を追っていった…。

く空き地く

「じゃあ、ドラえもんの居場所を知ってるの!？」

のび太の大声が空き地に響く。

そこにはドラえもんズの一人である、“ドラメッド三世”がいたのだった。

彼は魔法の絨毯で空から現れると、驚いているのび太達に自分の事を説明した。

そして、ドラえもんの居場所を教えるという事を言ったのだった。

「その通りでアール。この絨毯に乗るでアール。案内するでアール」

「ありがとう！ 行こう、皆！」

「おう！ 当たり前だ！」

「ドラえもんこんな友達がいんだなあ……」

「ドラちゃんのように、優しそうな人ね」

のび太達が喋っている中、ネネを抱えているアクション仮面はドラメッドに質問した。

「…私も乗っていいかな？」

「もちろんでアール。さつ、全員乗ったら行くでアール！」

そして気絶しているネネを合わせて全員が乗り込むと、ドラメッドは裏山に向かって行った…。

「ぐ、ぐああ…！！！」

「クッ、クックックッ…油断大敵だぜえ？」

一足先に着いていた冬樹達は、山の中で止まっていたクルルに声を掛けた途端、超音波攻撃を喰らってしまったのだ。

「み、耳があ…！！！」

「や、やめなさいよ…お…！！！」

あまりの音の大きさに、耳を塞いでも効果はまるで無かった。苦しむ冬樹達を見て笑っているクルルの背後に、ある少年が立っていた。

「んっ？…何だ、お前か。つれてきたのか？」

「は、はい。つれてきました。今、ドラメッドさんの笛でうごけなくしてます」

「ほお、中々やるじゃねえか」

ニヤリと笑うクルルに、冬樹は弱々しく呟いた。

「ク、クルル…！ ま、さか…君も…」

「ああ。俺様も操られてるってやつう？ クツクツクツクツ！」

その問いに、やはりクルルは笑いながら返事をした…。

くくくくくく

薄暗く、照明がついていない部屋…。

そこには、青と黄色が半分ずつ塗られている仮面をかぶった人物。そしてもう一人、黄色い帽子をかぶり、緑色をした蛙がその場にいるた。

「…つまり、あの三組は一箇所に集めたのね？」

「そうですね。これで一気に畳み掛けるのであります」

「でも当初の計画じゃ、一組一組を狙うんじゃないの？」

「その結果、見事に振り返り討ちとなり、相手に味方を増やしてしまったであります！」

仮面をつけた人物の言葉に、蛙はすぐさま返した。

「だから作戦を変えらるとお？」

「その通りであります！ 我々の計画を邪魔する可能性を持つあの者共には、数で攻めるのが一番であります！」

しばしの沈黙がこの場を包むと、観念したように仮面の方がタメ息をついた。

「しょうがないわねえ。あんたの望む作戦でやりなさい、“ケロロ”軍曹」

「了解であります！ ハイグレ魔王殿！」

仮面の人物、ハイグレ魔王に敬礼をすると、ケロロはこの場から去っていった。

「ふふふ…果たして、今度はどっちが勝つかしらねえ…アクション仮面？」

不気味な笑い声が、この空間を包んだ…。

## 第二話：裏山へ行く者達（後書き）

二話を出すのが遅れてすいません。

次回ではクルル達との戦いを書こうと思います。

ご感想、ご指摘をお待ちしております。

### 第三話：最悪の再会と最悪の事態（前書き）

迫るクルル達の攻撃に、彼らはどう立ち向かうのか…！

### 第三話：最悪の再会と最悪の事態

「裏山・のび太チーム&野原チーム」

「くっ！ まさか、あのドラメツドくんが敵だったとは…！」

「クッソー！ だましやがったな！」

「違うよ！ きつとあの人も操られて…」

「それよりこの耳鳴り！ 何とかしてよ！」

のび太達は耳を押さえながら会話をする近くで…。

「ちくしょー！ 何なんだこの耳鳴りは！」

「うるさーい！」

「たいたいーい！」

野原一家も耳を押さえていた。

耳を塞がなくてはいけない原因を作った、ドラメツドが絨毯に乗って笛を吹いていた。

「ふっふっふっ、我輩の笛の音は耳を塞いでも無駄でアール！」

そう言っただけでまた笛を吹くドラメツドに、なす術もなく耳を塞ぐしかなかった。

「どうすれば…！」

「クッソー！ こんな音より、オレ様の歌のほうがいいぞ！」

「くっくっ！ えっ！？」「くっく」

ジャイアンの一言に、のび太、スネ夫、静香の顔は一瞬で青ざめた。

「ジャ、ジャイアン!! 落ち着いて…!」

「いくぜえ!! 『オレはジャイアン!!…!!…!!』」

歌い始めた瞬間、ドラメツドの笛の音はジャイアンの歌によってかき消される!

「な、なにっ!? ぎゃあああああああゝゝゝゝゝっ  
!…!!…!!」

その歌のデカさと下手さに、ドラメツドは瞬時に耳を塞ぐが、ジャイアンの歌にそれは効果は出さなかった。

「こ、これだったら、さっきの音のほうがマシ…!」

「ジャイアン、やめ…!」

「無駄だわ、もう…」

「な、何て大きい声と下手さ…!」

「ぎゃあああああっ!!…!? 何だこらあ!!…!?」

「み、耳が…!!…!」

「えええゝゝゝんっ!!…!!…!」

ジャイアンの歌は、さらに全員の耳を強く塞ぐ結果となった…。

く裏山・日向サイドく

「クツクツクツく…ククツ！！！？」

そしてジャイアンの歌は、近くにいた冬樹達の所にまで被害をもたらしていた。

「な、何この歌！？」

「クルルの出す音のほうがマシだわ…！！！」

「っていうか、究極音痴！？」

「さ、さらに耳ってより、角があゝ！！！」

「エル・マタドーラしっかり！！！」

「あうあうっ！！！！！！」

凄まじい被害を出す中、クルルにも大損害を与えていた。

「ククくくくくッ！！！！？」

ジャイアンの歌はクルルの眼鏡を割り、クルルロボに煙を上げさせた。

地面に倒れるクルルを見て、夏美は駆け出す！

「こおんのバカアアアアアッ！！！！！！」

先ほどの恨みからか、クルルにアッパーを喰らわせると、マサオのいる方向に吹き飛んでいった。

「えっ？ えっ！？」

困惑するマサオに、クルルはいい音を出してぶつかる！  
そしてマサオごと、ドラメット達のいる方向に吹き飛ばしていった…。

「うわっ！？ 何か吹き飛んできた！？」

「んっ？ あの二人は…！」

ドラメッド達は、吹き飛んできて木にぶつかって気絶したクルルとマサオを見つけた。

「二人がやられたでアールか！？ ええいっ！ もう一度笛を吹けば…！」

そして耳から何とか手を離し、力を振り絞って笛を…。

「させん！」

一発の銃声があった瞬間、笛は粉碎された。

「なにっ!？」

「ふう、野原さん。大丈夫ですか？」

銃を構えたガルルが、心配している素振りで近づく。

「あ、ありがとう」

「いえ。タママ二等兵、歌は？」

「口を塞いで何とか収まったですう」

ジャイアンの口を塞ぎながらタママは言った。

「あれ!？ タママ!」

「それにギロ口のお兄さん!？」

「あっ! フッキー! ナッチー! それにあの女あ…!」

明らかモアに敵意を剥き出したが、モアは分かっている。

「あれえ!？ ドラメッド!？」

「何でここに…?」

「あうあうっ!」

「げっ!？ ドラリーニョ達まで…! こうなったら、我輩だけで全員を捻り潰すでアール!」

そう言うと、ドラメッドに変化が表れ始めた。

徐々にドラメッドが大きくなっていったのだ。

大きくなるのが収まる頃には、その大きさは家やビルをゆうに越えるものとなっていた。

「……………ええっ!!!?」……………

ネコ型ロボット達は驚かなかったものの、残りの全員は驚きを隠せなかった。

ガルルも声を上げはしなかったが、驚愕の表情であつた。

「踏み潰すでアール!!!!」

そのまま歩き始めた瞬間、全員が逃げる為に駆け出した。

「タママインパクトオ!!!!!!!!!!」

タママは口から黄色い光線を出してドラメツドの顔に当てる！

その直後、爆発を起こす！

「やっ  
たです  
う…！  
？」

煙が晴れると、睨むかのように無傷のドラメツドがいた。

「何かやったでアルか？」

「効果ねーっ!!!」

「この分では、私の銃も効果は無いな」

「とにかく逃げろーっ！！！！！！」

『待て——っ！！！！！！』

全員が逃げる中、夏美がドラリーニョに話しかけた。

「ちよつと！ 仲間なんでしょ！？ 何か弱点とか知らないの！？」

「弱点？ … あゝ！ 思い出したあ！ ドラメツドは水が苦手なんだ！」

「水うゝ！？　そんなのねえぞ！！！」

ひろしの声が響くと、のび太がある事を思いつく。

「そうだ！　ぼく達の学校のプール！　あそこなら水があるよ！」

「それだ！」

「っていつか、もう目の前だよ！」

冬樹の言うとおり、目の前にはフェンスの向こうのプールが見えた。

「って、フェンス高いぞ！？　どうすんだ！？」

「オイラに任せな！　全員、オイラに掴まれ！」

「えっ！？　でも……」

「心配すんな！　オイラはドラえもんズーの力持ちだよ！」

そして全員を担ぐと、フェンスを軽々と飛び越えた。

因みにアクション仮面はネネを抱えながら勝手に飛び越えた。

「マ、マジで！？」

「すごいですう……！」

「この人数を持ち上げるなんて……！」

驚きの声が次々と上がる中、着地した瞬間に全員を下ろした。

その直後に、ドラメッドがプールの中に足を入れた。

『待てえ……！！！！……んっ？』

ドラメッドは下を見た。

「……………」

しばし沈黙後…。

「ぎゃあああああああゝゝゝゝつ！！！！！！ 我輩！ 泳げ  
ないでアゝル！！！！！！」

叫びながら元の大きさに戻ると、水の中に落ちていった…。

「…何とか落ち着いたけど」

プールから気絶しているドラマメッドを上がらせ、気絶したクルルと  
マサオをつれてきた。

「とりあえず、情報を交換するかい？」

「はい」

「そうですね」

ひろしの一言に、冬樹とのび太は頷いた。

「…なんてこった。襲ってきた状況とかも、まるで一緒じゃないか」  
思わずひろしは絶句した。

二人の話は、全て自分達と同じだったからである。

「どういう事だろう？」

「何が何だかさっぱり…」

『知る必要は無いであります』

全員が頭を悩ませていた時、上から謎の声が聞こえた。

「！？ 誰だ！？」

「その声…！」

冬樹や夏美達は、この声の主を知っていた。

悪い事をすることもあるが、優しく明るい、ガン普拉をこよなく愛している人物。

上を見てその姿を確認し、彼だと確信した。

そして、彼の事を知っている者達は名をあげた。

「軍曹！！！！！！」

「ボケガエル！！！！！！」

「おじさま！！！！！！」

「軍曹さん！！！！！！」

「ケロロ軍曹！！！！！！」

「ケーロケロケロケロ……！ 久しぶり……というほどでもないでありますか」

自分の名前を呼ばれたケロロは、そう返した。  
そして地面に着地すると、全員を睨む。

「さて、さすがでありますな。我輩の部下をこつも簡単に倒すとは……」

「ボケガエル、あんた……！」

「軍曹！ 軍曹も操られてるんでしょう！？ 目を覚ましてよ！」

冬樹の言葉をケロロは無視し、話を続ける。

「とにかく、次回から送り込む者達をそう簡単に倒せると思ってもらっては困るであります」

「その通りだねえ」

再び上から聞こえる声に、今度はのび太達が反応した。

自分達の大切な友達であり、困っていた時には助けてくれた人物。姿を表した途端に、彼らは叫んだ。

「「ドラえもん！……！！」」  
「ドラちゃん！……！！」」

「やあ、みんな。元気だった？」

ドラえもんは呑気にそう言うと、ケロロの隣に下りる。

「みんなさすがだね。ドラメッドをあっさりと倒しちゃうなんてさ」  
「ド、ドラえもん……！」

「クッソ！ 操られてんなら、気絶させて元に戻してやる！」

ジャイアンは駆け出すが、その瞬間に足元にビームが直撃する！

「うわっ！……！」

「慌てないでよジャイアン。今回は顔見せだけさ」  
「そうであります」

ビームライフルを下ろすケロロの隣で、ドラえもんはポケットを探る。

そしてどこでもドアを出し、扉を開けると二人は入っていった。

「あっ！？ 軍曹！」

「ドラえもん！」

ドアが閉まる……と思ったらケロロがまた出てきた。

「あっ、そうそう。言い忘れてたであります」  
「しんちゃんは、ばく達が預かってるよ」

その言葉に野原一家は驚愕の表情を浮かべた。

「心配しなくても、操ってないから安心しなよ」

「檻に入ってもらっているだけですから。…それでは、さよならであります」

「それじゃ、また会おうね。のび太くん」

「またお会いしようであります。冬樹殿」

この言葉を最後に、ケロロは扉を閉めた。

それを彼らは只、呆然と見ているしかなかった…。

### 第三話：最悪の再会と最悪の事態（後書き）

第三話、いかがだったでしょうか？

次回は、彼らの行動を書きたいと思います。

ご感想、ご指摘をどうぞ、よろしくお願いします。

**第四話：赤い蛙と青い蛙、現る！（前書き）**

ケロロとドラえもんは宣戦布告を受けた彼らは…。

#### 第四話：赤い蛙と青い蛙、現る！

日向家

ここは日向家。

あの戦いが起こった昨日、話し合った全員は一箇所に集まった方が戦えるという結論に達した。

そして、操られていたマサオとネネは、自分の決意でここに残る事を決め、戦う事を選んだ。

その為、基地がある上に兵器などもある事から、日向家に全員は住む事となった。

日向家の大黒柱でもある“日向秋”は、快く了承してくれた。

…ひろしがナンパしようとして、みさえに殴られたのは言うまでも無い事である。

そして今日はひろしは会社で、秋は出版社へ行っていた。

ドラえもんズも、ドラメッドを残して周辺の様子を調べに行っていた。

今、家に残っているのは適当な理由をつけて休みをとった学校組や幼稚園組。

そして残りのメンバーに、知らせを聞き駆けつけた桃華と小雪だった。

ちなみに、タママと桃華は泣きながらの再会は、周りをホロリとさせた。

く日向家・リビングく

「……………」

「冬樹、どうしたの？」

深刻な顔で何かを考えている冬樹に、夏美は尋ねた。

「…軍曹を、何とか元の優しい軍曹に戻せないかなって……」  
「冬樹…」

夏美はそのまま何も言えなかった。  
何か返事をしなくては、そう思い、夏美が言葉を発しようとした時だった。

地下から、大きな爆発音と地震の様な衝撃が起こったのは。

「！？ なに！？」

「夏美さん！ 地下から爆発みたいな音が！」

「何でアールか！？ 今の音は！？」

「ど、どうしたの!？」

「地下基地で爆発ですう!!!」

「何ですか!？ 今の音!？」

「爆発音か...!」

「今の音は!？」

その音は家にいた全員がリビングに集まった。

「基地からみたいね!!」

「行ってみよう!!!」

冬樹を先頭に、全員は基地に入っていった…。

く地下基地く

「クルル!!」

慌ててクルルのいるクルルラボに全員が向かった。

ラボの中には、目が割れ、身体中が怪我だらけで倒れているクルルがいた。

「クルル！？ どうしたの！？」

「…クツ、クツクツ、クツ…お、せえぜ、オメエラ……」

「敵ね！？ でも誰に！？」

「夏美さん！ 危ない！」

夏美と冬樹が駆け寄った瞬間、小雪が叫んだ！

「えっ！？ 何がもらった！！！」

上からの声に反応して、上を見上げる。

そこにはドラメッド達に色や服装が違っただけ姿のネコ型ロボットが、刀を振り下ろそうとしていた。

「きゃっ！！？」

「させません！！！」

夏美を庇って小雪が刀を刀で受け止める。

「はっ！！！！！」

そして一瞬で、ネコ型ロボットを吹き飛ばした！

「なにっ！！？」

「隙ありですう！ タママインパクトオ！！！！！」

タママの口から出たエネルギー波は見事に相手に着弾し、爆発をしていた。

「い、今のは何！？」

「わ、我輩達と同様のお手伝いロボットでアール！！ 何故ここに

「!?」

「…恐らく、未来から連れてきて操っているのでは？」

ガルルの冷静な言葉に、全員が硬直した。

ならば敵は、かなりの兵力を所持している可能性が出てきたからだ。

「もしくはこの世界で生産され、最初からそう設定されているのかもしれない」

「そ、そんな…！」

ネコ型ロボットが戦いの為に利用されている事に、ドラマメッドは衝撃を受けた。

絶句しながら、膝を地面につけていた。

「それ…と、ギロ…ロ、せんぱ、いも…」

それだけ言うと、気絶したのかガツクリとうな垂れた。

「クルル…!?!」

「大丈夫。気を失ってるだけだ」

「よ、良かった…」

全員がホッとしている中、夏美は表情を曇らせていた。

「ギロロが…」

「でも、敵はどこにいるんでしょうねえ？」

「…んっ？ この映像を見てください」

ガルルの言葉に、全員はその映像を見た。

その映像は、ケロロの作ったガンブラが置いてあるガンブラーム

だった。

そこに、赤い蛙と二体のネコ型ロボットがガン普拉を一箇所に集めている場面だった。

「こ、これは…ギロロ…!？」

「…何をしてるのかしら？ おもちゃなんかを…」

全部を集め終わったのか、ギロロ達は動きを止める。

そしてペットボトルを出すと、中身を集めたガン普拉にぶちまける。

「…？ 何でアールか？ あの水は？」

「あの水は…！ まさか!？」

驚きの声で、全員はその声を発したタママに注目した。

「ど、どうしたの!？ タマちゃん!？」

「あれは兵器化ナノラ！ かかった物を兵器にする液体ですう!!」

タママの言った通りになった。

ガンプラは徐々に大きくなり、遂には大人の人間並の大きさになった。

「う、嘘お…!」

「な、何てことでアール…!」

みさえやドラメッドが驚く中、桃華がある事に気づく。

「あ、あれ？ 夏美さんは？」

「そっいえば、小雪さんもギロロのお兄さんもいない…」

周りを全員は見るが、誰もいない。

次の瞬間、ドラメッドが映像を見て驚きの声をあげた。

「み、皆！ これを見るでアール！」

全員が再び画面を見ると、そこに映っていたのは…。

「ね、姉ちゃん！！？」

「ガルル中尉！！？」

「小雪さん！！？」

くガンプラルームく

「…来たか、夏美、ガルル。そして、あの女も…！」

目の前にいる三人を睨むギロロに、二体のネコ型ロボットは駆け出す！

「死ねえ！！！！」

「くたばれえ！！！！」

そして二体がジャンボガンを三人に構えた瞬間、二体は放電を起す！

「…邪魔だ」

ガルルは静かに呟いたと同時に、銃口から煙が出ている銃を下ろした。

その瞬間に、額に風穴が開いた二体は爆発した！

「…さすがだな、ガルル」

「操られていても、兄を呼び捨てにする所は変わらないか…」

互いに銃を構え、二人は牽制しあう。

「ギロロ！ 元に戻んなさいよお！！！」

夏美は駆け出し、ギロロに殴りかかる！

「…遅い」

ギロロは迫り来る拳を左にかわし、ビームライフルの引き金を引く。発射されたビームは、夏美を正確に狙っていた。

「夏美さん！！！」

小雪は駆け出し、夏美を助けようとした。しかし、そう簡単にいかなかった。

「させないでござる。」

突如、飛来したクナイを小雪は全て叩き落す。

そして飛んできた方向を見ると、小雪は驚愕の表情を浮かべた。

「ド、 “ドロロ” …？！」

「小雪殿…」

小雪の望んでいた再会は、最悪の形で起こった…。

その間に夏美に向かっていたビームを、ガルルがシールドで防ぐ！  
お返しにガルルはライフルを連射する！

「…ふん」

それらを全てかわすと、ギロロは銃を下ろす。

「何のマネだ、ギロロ？」

「焦るなガルル。今回は、兵力増大と顔見せ程度だ。そろそろ帰還させてもらう」

戦っている間に、兵器と化したガンブラ達は続々と、どこでもドアで消えていつていた。

「次に会うときは…夏美、容赦はしないぞ」

そしてどこでもドアに入ると、同時にドアは消えた。

「拙者も同じくでござる。小雪殿、次に会う時は本気の死闘でござる」

凄まじい速さでドロロはその場を去っていった。

「ドロロ……」

小雪の目から、一筋の涙がこぼれる。

自分でも気づかぬ内に、泣いていたのだった…。

その直後、クルルラボにいた全員が到着した。

「皆！ 大丈夫！？」

みさえが駆け寄ると、夏美は呆然と座り込み、小雪は両膝をついて泣いていた。

ガルルはそれを見ていた…いや、見ているしかなかった。

「二人とも…」

「今は、そつとしておいてあげて下さい」

ガルルの言葉に、全員は頷いた。

その時、アクション仮面が何かに気づいた。

「皆！ 何かいるぞ！」

アクション仮面の指差す先に、本当に何かがあった。

それは赤みがかったピンク色で、赤いモノアイが光っていた。  
その周りに、緑色をした全く同じ形のロボットが四機いた。

「な、何ですか、あれは？」

「あ、あれは！ 僕が軍曹と一緒に作ったシャア専用ザク……！」

冬樹の声が響くと、ザクは全員に迫り始めた。

「来るぞ！」

「やってやるですう……！」

こうして、戦いは再び始まったのだ……。

#### 第四話：赤い蛙と青い蛙、現る！（後書き）

第四話、何とか今日中に出来た…。

次回はガンブラ達とある人物の戦いを書こうと思います。

ご感想、ご指摘をぜひ！ お願いします。

第五話・ガンブラと装甲に覆われし者（前書き）

ガンブラとの戦いに、全員はどうするのか…！？

## 第五話：ガンブラと装甲に覆われし者

シャアザクを含む五機のザクは、散開しつつ、攻撃を開始しようとしていた。

「アクション！ ビームッ！！！！」

両手から放たれた黄色い光は、ザク二機を一撃で破壊する！

「タママインパクトオ！！！」

黄色い光はザクに向かうが、スラスターを全開にして上に避ける。

「きつゝ！ 見かけ以上にやるですうゝ！！！」

「今度は我輩でアゝル！！ いでよ、魔法道具達よ！」

ドラメッドが叫んだ瞬間、ドライバーやトンカチ、スパナなどの工具が出てきた。

そして二機のザクを取り囲むと、あっという間にバラバラに分解した。

「残りは、赤いロボットだけでアゝル！」

しかしシャア専用ザクは一味違う事に、気付かされる事となる。

数分後…。

「いい加減に堕ちろゴラァ！！！！」

タママのマジギレと共に黄色い光が発せられるが、あっさりと回避される。

お返しと言わんばかりに、マシンガンの弾がタママを襲う！

「タママ二等兵！ 伏せろ！」

「はいですう！！」

ガルルの叫びで下に伏せて避けると同時に、真上をビームが通り過ぎる！

「……………！」

シャアザクは肩のシールドで防ぐが、ビームに耐え切れずに爆発する！

「敵はかなりの腕前だな」

「赤はやはり、三倍の性能が……！！？」

「何の話だ？」

話している間にも、シャアザクはザクバズーカを構え、射出した！  
その狙いの先には……冬樹だった。

「うわっ！！？」

「危ない！」

間一髪、みさえが冬樹を抱えて何とか回避した。

冬樹のいた場所は、爆発に包まれる！

「冬樹君！！？ ……てんめえ！！！」

裏になった桃華は、シャアザクに飛び蹴りを喰らわす！

「！？！？！！」

これには堪らず、シャアザクは吹き飛ぶ。

そして体勢を立て直す前に、ルシファースピアを構えるモアが飛び掛る！

「ハルマゲドン黙示録！！！！ 一千万分の、一！！！！！」

ハルマゲドンが起こした衝撃は、シャアザクを破壊するには十分なものだった…。

「…ふう。何とかなったな」

「そうですね」

アクション仮面の言葉にガルルが返した瞬間、タママが桃華に迫るある物を見つけた。

鉛筆がミサイルの様に飛んできていたのである。

「……！？ モモツチ！ 危ないですう……！」

タママは桃華を押し飛ばし、避けさせる。

そしてタママに鉛筆が当たった瞬間、閃光に包まれた。

爆発したと全員が分かった時には、タママは怪我だらけで吹き飛んでいた。

「！？ タママ二等兵……！」

「タマちゃん……！」

すぐさま駆け寄り、気絶しているだけと分かると全員は安堵の息をした。

怒りで裏となった桃華は瞬時に振り返り、敵を探す。

そして、ロボットの様な者が空を飛んでいるのを確認する。

「こおんのおっ……！！！」

裏桃華は手身近にあった石を、思い切り投げつけた！

「ふっ……」

相手は高度を下げることで、石をやり過ごした。

そして、そのまま高度を下げ続け、地面に降り立った。

そこで全員はある事に気付く。

降りてきた者は、緑色のアーマーで身を包んでいただけである事を。それに気付いた訳は、顔が出ていた為だった。

みさえとアクション仮面は顔を見た瞬間に、声を荒げてその者の名を呟いた。

「か、“風間”君……!!」

「君はしんのすけ君の友達……!!」

「……どうも、しんのすけのお母さん。アクション仮面」

丁寧にお辞儀をして、風間は挨拶をした。

しかし裏桃華にはそんな事どうでもよかった。

彼女はただ、風間をぶん殴ることしか考えていなかった。

「タママの敵だぁ……!!」

風間の懷に飛び込み、拳を打ち込む!

当たった! そう確信して顔を上げるが、裏桃華は驚愕する事になる。

「野蛮だなぁ……」

殴ったと思った風間は、裏桃華の後ろにいたのだ。

そう、攻撃は当たっていなかったのだ。

裏桃華が殴ったのは、先ほどの戦闘で出来たザクの残骸だったのだ。

「て、てめえ……いつの間に!?!」

「あなたが駆け出した瞬間です」

風間はそう言っ、その場から離れようとする裏桃華を殴り飛ばす！

「がはっ！！！！？」

壁に当たり、強い衝撃を受けた裏桃華はそのまま崩れ落ちるように倒れた。

「西澤さん！！？」

「ふん。雑魚が出しゃばって…」

「アクション！ キーック！！」

桃華を見ている風間を、アクション仮面が飛び蹴りを構える！

「…ペンシルミサイル、発射！」

風間の背中の装甲が開くと、数本の鉛筆がミサイルの様にアクション仮面に撃ち出された！

「んっ！！？ ぐあああああああっ！！！！！」

全てアクション仮面に直撃すると閃光が発し、爆発が巻き起こる！爆発で出来た煙から、身体中が怪我だらけのアクション仮面が出てきた。

「アクション仮面さん！！」

「んっ？ アンゴルⅡモア…厄介だから、これを使おう」

アクション仮面に駆け寄るモアに、薄紫色の透き通った石を投げる。

モアは投げられたそれに気付いてかわそうとするが、遅すぎた。

「きゃああああああああああっ！！！！！」

モアは石の中に吸い込まれていった。

残ったのは、モアを中に封じ込めた薄紫の透き通った石が残っているだけだった。

「モアちゃん！？」

「アングルスートン……！ なるほど、考えておくべきだったか……」

「ま、まずいでアール！ 残りは我輩達だけでアール……！」

ドラマメッドの言葉通り、残っているのは夏美と小雪、ドラマメッドとガルル、みさえ。

そして桃華の元にいる冬樹だけだった。

「……いつまでも、落ち込んでる訳にはいきません……！！」

「そ、そうね……！」

小雪、夏美は何とか立ち上がり、戦闘体制を取る。

「ふん！ 雑魚が何体集まったところで、この僕専用“風間アーマー”に勝てるわけ無いさ！」

笑いながら風間は背中にあるユニットから鉛筆型のミサイル、“ペンシルミサイル”の発射準備をする。

全員はそれを見て構え、攻撃がいつ来ても回避できる体制をとる。

「死……」

ペンシルミサイルを発射しようとした瞬間に一発の銃声が鳴り響いた…。

そのすぐ後に、ユニットの爆発で風間は吹き飛ばす！

「なにっ！！？ 一体なんで！！？」

「間に合った！」

引き金を引いたショックガンをのび太は下ろし、全員に駆け寄る。

「大丈夫ですか！？」

「間一髪だったな」

マタドーラやドラリーニョ、ドラニコフとジャイアン達、マサオとネネが続々と駆け寄る。

「ぐっ…！ 邪魔を…！」

「カザマくん！ 元に戻ってよ！」

「そうよ…！」

「ふん！ 裏切り者の二人が何を言っのさ！」

右腕の装甲が開くと、二門の銃口が外を覗く。  
そして二門の銃口をネネとマサオに狙いを定め、連射する！

「うわっ！！！？」

「きゃっ！！！？」

「させるか！！ ひらり！！！」

迫りくるビームを、マタドローは次々にはね返していく！

「うわっ！！？ クソッ！！」

はね返って来るビームを何とかかわすと、肩部から二門のビームキヤノンを出す！

「吹き飛ばー！！！」

「させん！」

ガルのビームライフルから放たれたビームで一門は爆発する！

「しまっ！！？」

「シュートオ！！！！！」

さらにドラリーニョのサッカーボールが炸裂し、もう一門も破壊した！

「クソクソクソオ！！！！！！！」

イラつきと焦りが増したのか、左腕の装甲から収納されていたビームサーベルを出す！

「斬り裂いてやる……！」

全員に突撃する為に脚部のブースターを点火しようとした瞬間、背後からの衝撃で吹き飛ぶ！

「がつ……！！？」

「なめんなあ……！！」

冬樹に支えられながら、裏桃華が背後から殴り飛ばしたのだった。そして吹き飛んでくる風間にみさえが駆け出す！

「おらあ……！！……！！」

「がぼっ……！！……！！？」

右腕の強烈なラリアットを喰らい、風間は倒れこんだ。

「ぐ、ぐぐ……！！」

何とか風間は起き上がるが、装甲の殆どが損傷、武装も全て破壊されていた。

「よし！ 後は気絶させれば「そこまです」……！！？」

ジャイアンが近づこうとした瞬間、ヌンチャクが投げられる！ それを見たドラえもんズのメンバーは、一瞬で誰か見抜いた。

「……」「王ドラ」……！！」「……」

「あうあう……！！」

ヌンチャクの飛んできた方向に、赤い中国の服を着た王ドラがいた。彼はドラえもんズメンバーを無視し、風間を背負った。

「今回はここまでです。いいですね？ 風間君」  
「…うん」

そして、ここに来る際に出したどこでもドアを開き、入っていく。

「逃がすかあ！！！」

ジャイアンの一声に全員が駆け出すが、途中で全員は地面に倒れる！

「いたあ！！！！？」

「なんだっ！！？」

「あ、足に何かついてる！！！」

全員の靴の裏には、ネッチョリとした液体が付いていた。

「さすがです、“ボー”君。さっ、帰りましょう」  
「……………うん」

いつの間にか王ドラの隣にいたボーは、鼻水で全員の動きを止めたのだった。

そして王ドラと風間、ボーはドアに入っていくと、ドアは消えていった…。

「チクシヨー！！！！ 逃げられた！！！！」

「ジャイアン！！！！ それより皆を何とかしないと！！」

「のび太さん！ 早くスペアポケットからお医者さんカバンを！！！！」

「うん！ わかった！」

のび太達や動けるメンバーは駆け出し、怪我をした皆に応急処置をするのであった…。

## 第五話：ガンブラと装甲に覆われし者（後書き）

第五話、いかがでしたでしょうか？

次回は敵の作戦が開始されます。

ご感想、ご指摘をドシドシどうぞ！

**第六話：寄生物の大逆襲！（前書き）**

日向家の地下基地の戦いのその後は…？

## 第六話：寄生物の大逆襲！

く????

「風間！！！ 貴様！ 勝手に飛び出た拳句、ボロボロになって帰ってくるとは……！！！」

たくさんの機械やモニターのある部屋でギロクの怒号が響き渡る。ギロクの目線の先には、しょんぼりとうな垂れる風間の姿があった。

「まあ、そう怒んなよギロク。こいつだって謝ってんじゃねえか」  
「黙れ“キッド”！！！！ 危なく敵にまた味方が増える所だったんだぞ……！！」

空気砲を磨いている帽子をかぶった黄色いネコ型ロボット、ドラ・ザ・キッドにギロクは怒鳴る。

「落ち着くでござるよ、ギロク殿」  
「そうですよ。本人も反省してますし……」  
「ドロク！ 王ドラ！ 貴様らまで……！！」  
「そうでありますよ、ギロク伍長」  
「そうだよ、ギロクくん」

ドラえもんはケロクの意見もあってか、納得のいかない顔でギロクは席に座る。

「まっ、アーマーのテストとも思えばイーじゃん？ これで改善の余地も出来たわけだし」  
「それより、どうするのでござるか？ 彼らは予想以上に手強いで

「ござるよ?」

「…誰か、何かいい案はありますか?」

ケロロの一言に、ドラえもんが手を挙げた。

「いい作戦がある。捕まえた“あいつら”を使うよ」

「あいつらだと? あの宇宙で彷徨ってた寄生生物の事か?」

「うん。前の冒険の時には苦戦したけど、これを使えば…」

「なるほど…よし、その作戦の説明を」ねえねえ、ケロロく〜ん!  
ゲロツ!?!」

突如、響く声にケロロは振り向く。

振り向いた先には、赤い半そでで黄色い半ズボンをきた少年が檻の中に入っていた。

「チョコビたべたいゾ」

「しんのすけ殿! さっき食べたでありますよう!!」

「たらないゾ」

しんのすけは頬を餅のように膨らませる。

「…おいケロロ。思うんだがあいつは何で操れないんだ?」

「純粹すぎるのであります…」

「はっ?」

ケロロの言葉に、ギロロは思わず素っ頓狂な声を出した。

「純粹な心は、このコントロール銃では完全に操ることが出来ない  
のであります」

「…純粹な心、だと?」

「そう。心に悩みといった“負の感情”が全くないのであります」  
「ま、全くだと…?」

「しかも幼さも加担しており、さらに操りが効かないのであります」

その言葉に全員は静まった。

「で、でも、風間君は操れてるんですよ?」

「風間くんの場合は、塾の嫌気とかの負の感情があったからできたんだ」

「しんのすけ殿の場合、そういうものが欠片くらいしかないのですります」

「操れないんだったら、ここからホッポリ出せばいいだろう」

「でも、基地の場所を見られちゃってるし。人質としても使えるし」

ギロ口はなるほど、と呟くとドラえもんを見る。

「話を戻すが、その作戦の説明は?」

「今するよ。いいかい、まずは西澤邸に…」

ドラえもんが説明をする中、しんのすけは未だにブーブーと唸っていた…。

日向家

「どうですか？ モアちゃんは…？」

「…無理のようです。かなりの高度な技術で改造されています」

ガルルの言葉に、夏美はアングルストーンに封印されたままのモアを見つめる。

「アングルストーンを改造して、封印されたら二度と出られない様にしたんでしょうな」

「出すことは出来ないの？」

「…今の段階では何とも」

夏美は肩をがっくりと落とした。

「…とにかく、何とかしなければ今は戦力が少なすぎます」

ガルルの言うとおりだった。

アクシオン仮面やタママ、クルルは一週間は安静で、モアは封印されたまま。

春日部防衛隊の面々や、のび太達もお医者さんカバンで健闘するも、やはりこれ以上は直せなかった。

「どうするでアールか？」

「このまま敵が来たらまずいぜ？」

「戦えるのは、のび太くん達にボク達、ガルルくん、夏美さんと小

雪さんくらい?」

「…あう…」

ドラニコフはタメ息を漏らした。

誰もが数が少なすぎると思っていたその時だった。

「おいおいっ！ 大変だぞ!!」

ひろしが慌しい様子で地下基地の治療室に駆け出てきたのだ。

「？ ひろしさん？ どうかしましたか？」

「冬樹君から連絡だ！ お友達の…西澤って子の家に敵だって!!」

その言葉に夏美は驚愕の表情を浮かべた。

「えっ!!!? 西澤さんの家に!!!?」

「なにっ!!!? 急いで出撃だ！ 戦える者は私についてこい！」

そして騒ぎを聞きつけたのび太達やみさえ、ネネやマサオも行くつと準備をしていた。

ガルルはすぐさま準備をしている者達に叫んだ。

「待って下さい！ ひろしさんやのび太君達には残ってもらいます！」

「えっ!? 何で!!!?」

「もしここが攻められても大丈夫な様に、護れる者がいなければなりません」

「あつ…」

「彼らは移動させる事は出来ません。ですから、あなた方には残ってもらいます」

納得したかのように準備をしていた面々は黙った。

「分かってもらえましたか…では！」

ガルルはドラえもんズのメンバーと共に、西澤邸の方角へと向かっていった…。

く西澤邸く

「お嬢様！！ お逃げください！！！！」

桃華の執事である“ポール”の叫びが西澤邸の一つの部屋に響く。その部屋の扉はミシミシッ！と凄まじい音を出し、壊れかけていた。

「ポール！！！」

「西澤さん！ 早く！！！」

桃華の手を冬樹は引つ張って連れ出していった。

「…行きましたな、お嬢様」

逃げたのを確認したポールは、それと同時に部屋に雪崩れ込んで入ってきた猫型ロボットやガンプラ達を睨む。

「ここから先には行かせませんよ。ここで足止めです！！！」

襲い掛かってくる者達に、ポールは恐れも無く立ち向かうのだった…。

く 西澤邸・庭く

「西澤さん！ 早くここから！」

「は、はい！」

庭に出た二人は、何とか出口を目指すために駆け出していた。しかし門の近くまで来た二人は、絶望に染まる事となる。

「そ、そんな…」

「嘘…」

門の前には、武装をした人達がいた。

それは、二人がよく知っている人達だった。

「よ、吉岡平…！？ 他の親衛隊の皆さんも…！？」

彼らは桃華を護る為に結成された“西澤桃華専属護衛部隊”。通称“親衛隊”と呼ばれている部隊の隊員達だったのだ。

「へっ、バカだな。出口は押さえられてると分かってるだろうに」

「！？ み、皆さん…！？」

「ど、どうして！？ 味方じゃないの！？」

「教えてあげましょうか？」

困惑する二人に、落ち着いた感じの声が親衛隊の後ろからした。

親衛隊が左右に展開し、真ん中に道が出来る。

その道を王ドラが通り、二人の前に出てくる。

「き、君は…？！」

「王ドラ…！！」

それと同時にガルルとドラえもんズの面々が塀を飛び越え、王ドラを呼ぶ。

「来ましたね皆さん…のび太君達がいなのは好都合です」

「なにっ！？ どういうことだ！？」

「それより、あなたは親衛隊の皆さんに何をしたんですか！！」

桃華の悲痛の叫びに、王ドラは鼻で笑うと喋りだした。

「別に何も？ ただ“ヤドリ”を使っただけです」

「はあ！？ なんだそりゃ！！」

「ヤドリ！？ あの寄生生物か！」

「えっ！ ガルルくん、知ってるのおゝ！？」

ドラリーニョの驚きの声に、ガルルは首を縦に振る。

「人にとりつき、身体をコントロールする生命体だ。だが、親玉が

死んだ為に活動停止になったはずだが…」

「私達は生き残った800万体の内の50体を手連れてきたんですよ」

王ドラはヤドリにとりつかれた親衛隊を前に出す。

「さあ、もういいでしょう。かかれっ！！！！」

号令一つに、ヤドリ達は動き始めた！

そして持っているバズーカ砲を次々に構え、発射する！

「おわっ！？ 撃ってきたぞ！」

「どうすんだ！？ 攻撃するわけにはいかないぜ！！？」

避けながら話しかけてきたマタドーラに、ガルルはバズーカの弾を打ち落としながら答える。

「奴らは“何か”をかけると活動を停止すると聞く！　しかしそれが何か分らないのだ！」

「じゃどうにもならないでアールか！！？」

「何かって何だよ！！？」

「分らん！！」

ビームライフルの引き金を引き、最後のバズーカの弾を破壊してガールルは叫んだ。

「半数のヤドリ達は、あつちの二人を撃ちなさい！」

「分かったよ！！」

「ガキなら楽勝だぜ！！」

ヤドリ達は次々と目標を冬樹と桃華に変更し、バズーカ砲を放つ！

「まずいつ！　エル・マタドーラ！！」

「分かってるよドラメッド！」

すぐさまマタドーラのひらりマントでバズーカの弾を次々と違う方向に変える！

「何とかヤドリだけに攻撃する事はできないのか！？」

「あうあうっ！！」

完全に状況が悪い中、ヤドリの一人がマタドーラを突破して桃華にバズーカ砲を構える！

「っ！？　しまった！！？」

「西澤さん！！」

庇う為に、冬樹は桃華の前に出る！

「冬樹君！！？」

「死になっ！！！！！」

ヤドリがニヤリと笑い、冬樹と桃華が目を瞑った瞬間だった。

ヤドリが引き金を引く直前に、顔に泡立った真っ白い水を顔に浴びる！

「がっ！！？ これは……！！！」

浴びた瞬間、真っ白い粒が額から出ると同時に地面に倒れた。

「なんだっ！？」

「うわっ！！？」

次々とヤドリ達は顔に泡立った真っ白い水をかぶり、続々と倒れていく。

ドラえもんズやガルルは門の外から銃の様なものを撃っているのび太達を見つけた。

「のび太達！？ 何でここに！？」

「いや、やつぱりついて来たかったいから……それに、相手がヤドリなら何とかなるし」

のび太は再び銃から泡立った真っ白い水をヤドリに浴びせる！

「ついてきて良かったぜ！ これでヤドカリを倒せっぞ！」

「ジャイアン、ヤドリだよ」

会話している間にも、奇襲のお陰もあってか全部のヤドリを倒す事に成功した。

「ぐっ！ まだ真空ソープを持っていたんですか…！ 油断しました…！」

王ドラは吐き捨てるように呟いた。

「真空ソープ？ 確か俺達の時代にある石鹸じゃねえか！？ そんなもんで倒せんのかよ…！」

「これを当てられたヤドリは、本体が泡で包まれてしまっんです」

「…なるほど。それでとりつきも出来なくなり、活動が出来なくなるでアールか…」

静香の説明で納得した一同は、残った王ドラを睨む。

「ぐっ…！ ですが、まだ味方が「もういませんよ」なっ…！！？」

王ドラの後ろから聞こえた声に、桃華は何か気付いた表情を浮かべる。

「ポールツ…！！ 無事だったんですね！」

「はい。桃華お嬢様」

桃華に向かってお辞儀をすると、ポールは王ドラに向き直る。

「あなたの味方のロボット達は全て破壊しました…残りは、あなただけです」

「ぐっ…！ 任務失敗のまま帰るわけには行きません！」

王ドラはヌンチャクを懐から出し、近くにいたポールに向かう！  
ポールは迫ってくる王ドラに拳を構える。

「この一撃は桃華お嬢様を危険にさらした分、そして親衛隊の全員の分です…！！」

そして一歩踏み出し、王ドラに拳を打ち出す！

「ポール烈波っ…！！！！！」

様々な思いを込めた一撃は、王ドラを一発で戦闘不能にするのは訳なかった…。

く???く

「クソッ…！！ 王ドラの奴、やられちゃったぜ！」

モニターに映っている画面に、キッドは怒号を吐く。

「計算では、のび太達は護衛の為に残っている筈だったんだけどな……」

ドラえもんはがっかりとした表情で、タメ息をついた。

「だから日向家に敵を送り込むべきだったのだ……」

「そうですよ」

「……しょうがない。戦力、あんまりなかったから……」

ギロロと風間の言葉を、ボーが返した。

「どうするのでござる？ またも仲間が敵になってしまったでござるよ？」

「うーん……」

ケロロは考え込み、しばらくすると顔を光らせた。

「いい方法があります。とっておきが……」

「なに？ それは何だ？」

「ゲロゲロリ。まずは……」

ケロロのウキウキとした声が、この部屋に響いた……。

## 第六話：寄生物の大逆襲！（後書き）

遅くなりつつも第六話が出来上がりました。

次回はケロ口達の基地に攻め彼らが攻め込みます。

ご感想、ご指摘をお待ちします。

**第七話：潜入！？ 敵の基地での戦い！（前書き）**

西澤邸の戦いから一週間が経った…。

## 第七話：潜入！？ 敵の基地での戦い！

西澤邸の戦いからかれこれ一週間。

怪我をしていた者達は完治した…しかし、モアは未だに封印されたまま。

そして敵が何も仕掛けてこない状況だった。

「日向家」

「……………」

「冬樹くん？　どうかしたの？」

深刻な顔で何かを考えている冬樹に、のび太は話しかけた。

「…いや、何だか敵が妙な感じがしてさ……………」

「妙な感じ？　どうして？」

のび太は冬樹の言葉に疑問を抱いた。

「だってあれだけ連続で敵が来てたのに、一週間も来なくなっただよ？」

「…そういえば、確かにそうだね？」

「戦力を増やしているから来ないという事もありえますよ？」

丁度リビングに現れ、一週間前のあの時に操りが解けてた王ドラも答えた。

「でも、軍曹達ならもう大量に生産してると思うんだ。それなのに音沙汰は無い…」

「確かにそう考えると変ですね。彼らならかなりの量を生産できる筈ですし…」

「何か企んでるのかもしれないな」

リビングに入ってきたひろしも言った。

「そうで…」

冬樹が喋りかけた瞬間、辺りが地震が起きたかのように揺れる！

「うわっ！！？」

「何だっ！？」

「戦闘の準備だ！！」

ビームライフルやスナイパーライフルを持ったガルルがリビングに駆け出してきた。

「ガンブラやネコ型ロボット達が基地に侵入した！ 戦える者は基地に！」

「はい！」

「分かった！」

家にいた全員はすぐに地下基地に向かった…。

〈地下基地〉

地下基地では、怪我が治った者達を含めた全員が戦っていた。

「タママインパクトオ！！！」

薙ぎ払うかのように撃たれたタママインパクトは、周囲にいたネコ型ロボットを一掃する！

「アクションキック！！！」

アクション仮面は飛び蹴りを放ち、ガンプラを吹き飛ばす！

「やあ！ やあっ！」

「コンチキショー！！！」

「来るな来るな！」

のび太達もショックガンや空気砲を連射してどんどん撃退していき…。

「八！ 九！ 十！！！」

ガルルもビームライフルを的確に放ち、ガンプラやネコ型ロボット達を破壊する！

「魔法道具達よ！！！」

「ひらりーっ！！！」

「シュート！ シュート！ シュート！！！」

「アオオオオオオオオンッ！！！！！」

「はあああああっ！！！」

ドラえもんズの面々も次々に敵を倒していく。

「俺もやってやるぜえー！！！！！！」

「一気に行くわよー！！！！」

「たあああああつ！！！！」

シヨックガンを連射するひろし、そしてパワードスーツを着用した夏美と小雪がさらに応戦する！  
しかし倒しても倒しても、敵はゴキブリの様に侵入の際に作った穴から湧き出ていた。

「クソツ！！ 何て数だ！！！！」

「きりが無いぞ！！ 誰か一掃できる様な技はないのか！！？」

ひろしの絶叫に夏美は敵の群れに飛び込む！

「夏美さん！！？」

「これで一気に仕留めるわよ！！」

両手からビームサーベルを出し、敵の群れの真ん中で思い切り回転する！

「！？！？！？」

「？！？！？！」

「たああああああああつ！！！！！！」

次々にビームサーベルの餌食となって爆発するガンプラやネコ型ロボット達を見て全員は絶賛した。

「すげえ！！」

「やるな夏美ねえちゃん!!」

ところが数体のガンプラやネコ型ロボットは上に飛んで回避し、回転している夏美に襲い掛かる!

「しまっ…!」

回転を止めて避けようとした瞬間に、一体のネコ型ロボットの胴体をビームが貫通する!

「甘いな」

「僕も!」

ガルルとのび太は夏美に襲い掛かろうとする敵を狙い撃ち、一瞬で撃破する!

「これで…! 最後!!」

そして残っていた敵を一掃した。

奇跡的に残った二機のガンプラは、穴へと戻っていった。

「あっ! 逃げた!」

「追っぞ!! 奴らの基地が何処だか分かる!」

言うがいなやマタドーラは穴へと飛び込んでいった。

「あゝ! 待ってよエル・マタドーラ!!」

「あうあう!」

「俺達も行こう!」

「おう! ギッターギッターにするぜ!」

次々に穴に入っていく中、冬樹とガルル、王ドラは止まっていた。

「…変だと思わない？ 何でわざわざ足がつく様な方法でここに攻め込んだんだろう…？」

「畏、ということですか？」

「…いずれにしろ、乗るしかないだろう」

そして彼らも穴へと入っていった…。

〈秘密基地〉

「ぷはーっ！！ やつと出口にでた！」

「長かったなあ…」

次々と穴から全員は出てくる。

そして周りにある複雑そうな機械を見る。

「…どうやら、敵の基地で間違いなさそうだな」

「オラーツ！！ ドラえもん！ 何処だー！！ 出て来ーい！！

！」

「ちょ、ちよつとジャイアン……！」

大きな声で叫びジャイアンの声を大急ぎでスネ夫が塞ぐ。

「遅いですよう。絶対に聞こえたですう」

『クツクツクツ。どうせ敵は俺達が来てる事を分かっている筈だからな。別にいいんじゃないの？』

ガルルの持つている通信機からクルルの嫌味な声が聞こえた。

「クルル曹長。アングル」モアは封印から……」

『まだ無理だぜ。もうちよつと時間があれば何とかかなりそうだぜ』

「そうか……」

「モアちゃん、良かった……」

安堵の息がこの場を包んだ。

「クルル曹長。もしもの時は、みさえさん達を護ってくれ」

『ちつ……子守りと人を護らせるのを押し付けんなよ……』

クルルの愚痴が聞こえたが、ガルルは構わず通信機の電源を切る。

「それじゃあよ、とつとと先に進もうぜ！」

ジャイアンはそう言う目目の前にあった扉に駆け出した。

「ま、待つでアール！　ここは敵の基地！　罠があるに違いないでアール……！」

「それに間違いなくここには敵がいます！　油断は禁物です……！」

王ドラとドラメッドの言葉を見殺し、ジャイアンは進んでいった。

「ジャイアン！ 待ってよ！」

「ちっ！ 追いかけるぞ！！」

慌てて全員はジャイアンの後を追いかけ始めた。  
しかしこの部屋に入った瞬間、広い空間に出た。

「んっ？ ここは…？」

「さっきの部屋よりも随分広いな…」

出た先にある部屋は、広い空間に大きな扉があるだけだった。  
そしてジャイアンは、扉の横にある何かを見ていた。

「どうしたのジャイアン？」

「この扉が開かねんだよ。それでよく見たらここに何か書いてあるんだよ」

ジャイアンは横に動き、柱に書いてある文字を全員に見せた。

「え〜っと…『汝らの力を示し時、扉は開かれる』？」

ひろしが柱に書いてある言葉を読んだ次の瞬間には、扉が閉まる音が聞こえた。

「！？ おいつ！ 扉がしまったぞ！」

「えっ！！？」

そしてこの部屋の左右の壁が開き、中からガンブラが十機とネコ型ロボットの十体が出てきた。

「…なるほど。力を示せ、か…」  
「へっ！ こんな奴らボコボコにしてやるぜ！…！」

ジャイアンの言葉に全員は大きく頷いた。

しかしスネ夫はガンブラとネコ型ロボットを見て疑問を抱いた。

「あれ？ あのガンブラとかネコ型ロボット、形とか色が違う…」  
「そういえば、違うな」  
「気をつける皆。恐らく今までに戦った者達とは一味違う」

ガルルの言うとおりだった。

実はこのガンブラはザクを遙かに凌ぐ機体であり、ビーム兵器を持つ“ゲルググ”。

そして通常の三倍の能力を持つエリートの赤いネコ型ロボットだったのだ。

そんな事を知る由も無い彼らは、攻撃を仕掛ける！

「タママインパクトオ！！！」  
「ドッカーン！！！」  
「当たれーっ！！！」

タママインのタママインパクト、ジャイアンの空気砲、ひろしのショックガンが三機のゲルググを狙う！

「……………」

三機のゲルググは迫ってくる三つを右に、左に移動し、あっさりとかわす。

「なにつ!？」

「は、速いですう!!!」

「避けられた!!」

回避行動を行った三機のゲルググは驚く三人にビームライフルを構え、連射する!

「おわっ!!? あぶねえ!!!」

「コンニャロー!!!」

「ブチ壊すぞコラア!!!!」

転がって避けた三人の内のジャイアンはすぐに空気砲を放ち、タママは連続で拳を打ち込む!

「!?!?!?!」

「?!?!?!?!」

三機の中の二機は回避できずに空気砲の餌食に、もう一機はタママの連続の拳で吹き飛ばされる!

「油断せずに戦わなくては死ぬぞ! 連携をして戦え!」

「分かったぜ!」

ガルルに返事をしながら全員は敵に飛び込んだ…。

「はあ！！！！」

「えいつ！！！！！」

夏美と小雪は三機のゲルググと交戦していた。

少し離れた所で小雪はビームナギナタを使うゲルググと激戦を繰り広げ…。

「ええええいつ！！！！！」

夏美は二機のゲルググと空中戦を繰り広げていた。

ゲルググのビームライフルから放たれたビームをかわし、ビームキヤノンを出して放つ！

「！！！」

ゲルググはバーニアを吹かしてかわし、シールドを構えて夏美に突撃する！

「いつくわよあ！！！！！」

ビームサーベルを構え、夏美もゲルググに向かって突撃する！

そしてぶつかり合った瞬間、シールドごと胴体を真っ二つにされたゲルググが地面へと落下しする！

残った一機がビームライフルを連射するが、夏美は止まらない。

避けながらゲルググの目の前まで移動し、斬り裂く！

ゲルググは放電しながら地面へ落ち、二回目の爆発と共に消えた…。

「小雪ちゃん！」

「こっちは大丈夫です！」

残骸と化したゲルググを見せながら、小雪は言った。

「じゃあ、他の人の援護にいこつ！」

「はいっ！」

二人はまだ戦っている方に駆け出していった…。

一方ドラえもんズ的面々は、五体のエリートのネコ型ロボットと交戦していた。

「死ねえ！ ドッカーン！」

「のわっ！！？」

避けるのが遅れ、ドラメッドは空気砲から放たれた空気の塊に当たる！

「いつ、痛いでアール！」

「そりゃコレ、改造してある空気砲だしな…」

痛がっているドラメッドを見下すようにエリートネコ型ロボットは睨み、空気砲を構える。

「消え…！」

「甘いでアール！」

放とうとした瞬間、巨大化したドラメッドの拳を受けて円を描くように吹き飛ぶ！

「アチョーッ！！！」

「ごふっ！！？」

王ドラの蹴りを喰らい、パワーてぶくろをつけたエリートネコ型ロボットは吹き飛び、ドラメッドに吹き飛ばされた一体とぶつかり、気絶した。

「アオオオオオオオンッ！！！！！」

ドラニコフは唐辛子エキスを飲み、二体のエリートネコ型ロボットに炎を吐く！

「あっちいいいいいつ！！！」

「みずみずう！！！」

身体中に炎が走り、二体は周りを走り回る！

すかさずそこにドラリーニョのサッカーボールが二体の顔面に命中し、倒れこんだ。

「どおらあ！！！」

「ぬおっ！！？」

マタドーラは最後の一体を持ち上げ、そのまま壁にぶつけた！そして壁にめり込んだまま、動かなくなった…。

「…おし！ 片付いたぜ！」

「のび太君達の方に行きましょう！」

ドラメッド達はすぐにのび太達の方に駆けていった…。

「クソッ！ 何でこっちはこんなに多いんだよ！」

「僕達も多いし…」

「タママインパクトオ！！！」

「ドッカーン！！！」

「アクシヨンビーム！！！」

こっちはすでに七機いたゲルググは三機に、五体いたエリートネコ型ロボットは二体となっていた。

「クソオ！ エリートを舐めるなあ！！！」

「喰らえい！！！」

二体のエリートネコ型ロボットはジャンボガンを構えた。

しかし次の瞬間、一瞬でジャンボガンは残骸と化して地面に落ちた。

「遅い」

ジャンボガンを破壊したガルルは、二体が他のひみつ道具を出す前に額に風穴を開けた。

そのまま二体は崩れ落ちる様に倒れていった…。

「！！！」

ゲルググはビームナギナタを抜くと、冬樹に飛び掛る！

「うわっ！！？」

「危ない冬樹くん！！」

冬樹の前に出たのび太はゲルググにショックガンを放つが、紙一重でかわされる。

そしてゲルググはビームナギナタを振り下ろす！

「あぶねえ！！！」

間一髪でジャイアンが二人を突き飛ばしてビームナギナタをかわす。そして隙が出来たゲルググにパワーてぶくろをつけた状態の拳を喰らわす！

「！？！？！？」

吹き飛んだゲルググは壁を貫通し、爆発する！

「！！！！」

残った二機はシールドを構えた状態でビームライフルを構え、連射をし始める！

「ハイパータママインパクトオ！！！！」

タママはタママインパクトの強化版であるハイパータママインパクトを放つ！

それはシールドを物ともせず貫通し、見事に二機に直撃した！

「やっただすー！」

倒したと思っていた瞬間、煙の中からシールドと右腕が損傷したゲルググが現れる！

「しまっ…！」

「タマちゃん！？」

「アクションパンチッ…！！」

タママに迫っていたゲルググを殴り飛ばし、アクション仮面は両腕を構える！

「アクションビーム…！！」

両腕から放たれた黄色い光は、ゲルググの身体を包む！  
そして見る見るうちに爆発していった…。

「…！ 皆！ 扉が！」

ひろしの言葉で見ると、扉は自動ドアのように横に開いていった。

「よし！ さあ行くわよ！」

「おーうっ！」

夏美とジャイアンが扉をくぐり、全員がそれに続いた…。

「……………」

それをギロロが見届けていたのを、誰も気付く事はなかった…。

**第七話：潜入！？ 敵の基地での戦い！（後書き）**

第七話、完成しました…。

次回はちよつと危機的状况を書きたいと思います。

ご感想、ご指摘をドンドンとお送りください！

**第八話：基地からの脱出！ 復活の赤き戦士！（前書き）**

仕掛けを解いて、部屋に入った彼らは…？

## 第八話：基地からの脱出！ 復活の赤き戦士！

踏み込んだ部屋は薄暗かった。

唯一の明かりは、モニターから発せられる青白い光のみだった。

「…何？ この部屋」

「モニタールームの様だが…」

未だに青白い光を発し続けるモニターに、ガルルが近づいた時だった。

けたたましい程のサイレンが鳴り始め、部屋が赤く染まった。

「！？ 何だっ！！？」

全員が困惑する中、モニターが時間を表示すると共にアナウンスが響く。

『自爆装置が作動しました』

無常にも響くアナウンスの言葉に、数名を除く殆どの者達は硬直した。

「やはり罠だったか…！」

「どうということ…！」

「つまり、もともとこの基地は自爆させて僕達を倒す事が目的だったんだ！」

冬樹の説明は、硬直していた面々を動かすほどの威力を持っていた。

『爆発まで、あと十分…』

「ふざけんなっ！…！」

マタドローを先頭に、畏と分かった彼らは一目散に扉に駆け出していった。

それと同時に壁からガンプラのゲルググ、エリートのネコ型ロボットが数体現れる。

「『邪魔だ！…！』」

ガルルの正確な射撃により、三機のゲルググの頭部に着弾。

アクション仮面の拳が炸裂し、エリートネコ型ロボットが吹き飛ばす。マタドローのブン回し投げで、残っていた敵をまとめて吹き飛ばした。

全ての敵が倒れた瞬間、爆発が起こった！

「急ぐぞ！」

まだ動く敵が起き上がる前に、急いでのび太達は部屋を出て行った…。

く穴のある部屋く

「あつた！ … きゃあああああああつ！！！！？」

夏美が部屋に踏み込んだ瞬間、夏美は全身が雷に打たれた様な感覚が襲った！

「夏美さん！！？」

「姉ちゃん！！？」

冬樹と小雪の声が響く中、夏美の身体に装着されていたパワードスーツは消え、私服へと戻っていった。

夏美は地面に倒れていったと同時に冬樹と小雪が駆け寄った。

「強制解除！！？ … まさか！」

ガルルは瞬時にスナイパーライフルを構える。

「遅いな、ガルル」

謎の声が響いた瞬間、スナイパーライフルをビームが貫通する！

「くっ！！！」

苦々しく吐き捨て、すぐさまスナイパーライフルを投げ捨てる！  
それと同時に放電を起こしているスナイパーライフルは爆発した！

「随分、甘くなつたなガルル」

「ギロロ…！」

直後、誰もいなかった場所から幽霊の様にギロロが現れた。

「う、嘘！！？ 誰もいなかった筈…！？」

「アンチバリアか…盲点だったな」

「ひ、卑怯ですう…！！」

地団太を踏むタママを見て、ギロロは鼻で笑った。

「卑怯？ 戦場に卑怯も何も無いだろう」

「フザけんなっ…！！ ドッカーンッ…！！」

ジャイアンの怒号と共に空気砲から空気の塊が放たれ…。

「…あれ？」

なかった。

空気砲は反応すら示さず、何事も無かったかのようにジャイアンの手にはめ込まれていた。

「ああ、言い忘れていた。この基地にひみつ道具を使えなくする電波を流しておいた」

「何だっ…！！？」

その言葉を確かめる為に、ドラえもんズやひろし、のび太達はひみ

つ道具を使う。

しかし反応は示さず、やはり何も起こらなかった。

「マ、マジかよ!!!??」

「ど、どうするの!!!??」

ひみつ道具を主に使っているのび太達やひろしは焦りを隠せずにくた。

つまり自分達は今、戦う事が出来ないという事だからだ。

『爆発まであと、七分五十秒、七分四十九秒…』

焦り始めている彼らを尻目に、刻々と時間は迫り始めていた。

「さあて…時間もなさそうだ。お前達をここで足止めさせてもらおう!!」

ギロロの叫びと共に、周囲から数機のゲルゲグが現れ始めた。

「ちょ、ちよつと待て!! お前まで死ぬ気かよ!!!??」

この言葉を聞き、ギロロは不思議そうに発言したマタドローを見た。

「死ぬ気? まさか俺が何の準備をしないとでも?」

「なにっ!!!? どういう事だ!!!!」

「…説明する必要はない。いくぞ!!!」

ギロロが駆け出した瞬間、戦闘は開始された。

「雑魚は任せてください!!」

「ガルルくんは弟さんを速く戻すんだ！」

ひみつ道具が無くても何とか戦える王ドラやマタドロー、アクション仮面がガルルに叫んだ。

「了解！」

新たにビームライフルを出したガルルは、駆け出した。

「夏美さんは護つてみせます！！」

「僕だつて！！」

未だに膝をついている夏美を護る為に、小雪と冬樹は前に出た…。

「はあ！！！」

「でえい！！！」

次々と互いに放たれる赤と黄色の光線。

ある時はミサイルの雨、ある時はバズーカの乱れ撃ち。

武器のオンパレードが何度も起こっていた。

「ちいっ！！！」

焦りを感じたギロロはマシンガンを連射するが、ガルルにはかすりともしなかった。

「ならば！　これでどうだ！！！」

ギロロは四連ロケットランチャーを取り出し、次々と発射させた！

「ふんっ！」

巧みにビームライフルを使って全て破壊し、ギロロの方向に向く！  
視線の先には、ビームサーベルを構えて特攻をするギロロの姿が見えた。

ガルルもビームサーベルを手早く抜き、ギロロに駆け出す！

「ガルルウウウウウツ！！！！！」

「ギロロオオオオオツ！！！！！」

その叫びは、兄弟の戦いはさらに拍車をかけた！  
互いのビームサーベルが火花を散らす中、二人は一步も退かなかった。

しかしそんな中、悲劇は起きた。

「動くな！　動くと、女の命がない！」

一機のゲルググの叫びが全員に聞こえた。

向くとその先には怪我をして倒れている小雪と冬樹。

さらに一機の赤いゲルググに銃を突きつけられた夏美の姿だった。

「おい小雪に冬樹！　しっかりしろ！」

「二人とも！　しっかりしてください！」

王ドラとドラメッドは小雪と冬樹に近づき、息をしている事を確認してホッとする。

「動くなと言っただろう！」

夏美に更に銃を突きつけたのを見て、慌てて二人を背負って下がる。

「紫ガエル。ギロ口伍長から離れてもらおう」

「……仕方ない、か」

ガルルはビームサーベルを下ろす。

そして赤いゲルググもとい、“シャア専用ゲルググ”はギロ口に視線を変える。

「さあ、ギロ口伍長。こいつらに止めを」

「あ……ああ」

ギロ口は頷き、ガルルに銃を向ける。

「……………」

「どうしたのだ？」

「いや……何でもない」

そう言っただけでガルルに再び銃を向けるのだが、何故か震えていた。

「……（な、何なんだ！？　夏美のあの視線は……！！）」

そう、ギロ口は夏美の視線が気になっていたのだ。  
視線は何かを訴えているようだったのだ。

「ギロ口…」

夏美は目から涙をこぼしながら、弱々しく呟いた。

「…！」

横目で夏美の涙を見たギロ口は、大きく目を見開いた。

「おい！ 何してるんだ！ 早くやれ！…！」

シヤア専用ゲルググは急かす様に言う。

「…ああ。分かった」

ギロ口は引き金を引き…撃った。

「ぐあああああああああああつ！！！！？」

シヤア専用ゲルググの銃を持っていた右腕を。

爆発で吹き飛んでいる間にギロ口はすぐに夏美を救出した。

「ギ、ギロ口…！」

「…大丈夫か？ 夏美」

その言葉で、いつものギロロだと分かった夏美は思わず抱きしめた。

「良かった…！」

「夏美…」

良い雰囲気の二人に…。

「死にやがれ…！」

シャア専用ゲルググが入り込む！

すぐさま夏美から放れて飛び越えると、ビームサーベルを抜く！

「ちっ…！」

「があっ…！！！」

ビームナギナタとビームサーベルが交差する！

「この裏切り者があ…！！！！」

「裏切り？ …違う！」

ギロロがさらにビームサーベルに力を込めて、シャア専用ゲルググを弾き飛ばした！

「なにっ…！！？」

「元に戻っただけだ…！！！！」

そして体勢を整えさせる隙を与えず、一瞬で相手を斬る！

「…！？！？！？」

訳も分からぬまま、シャア専用ゲルググは閃光に包まれ、爆発した…。

『爆発まであと、三分…』

「まずいでアール！！ もう時間がないでアール！！！」

最後のゲルググを倒した瞬間に聞こえたアナウンスに、ドrameッドは焦りを隠せずに入られなかった。

「早く脱出しようぜ！！！」

「冬樹君達は私が担ぐ！ 皆、速く穴に！！！」

大急ぎで穴に入っていく中、ガルルとギロロ、何とか立ち上がった夏美が最後となった。

「…ギロロ？」

「…ガルル」

「話は後だ。今は脱出が先だ！」

そう言ってガルル達も穴の中へと入っていった。そして、少し経ってからカウントはとうとう…。

『5、4、3、2、1…0』

そして基地は、閃光に包まれた…。

この日、ある町で震度5の地震が起こったという…。

**第八話：基地からの脱出！ 復活の赤き戦士！（後書き）**

第八話、いかがでしたか？

ちよつと話が急だったかもしれませんが…。

次回は、戦闘ものではないようにします。（多分…）

ご感想、ご指摘をお待ちします。

## 第九話：明かされ始めた敵（前書き）

ギロロが戻り、爆発する敵の基地から脱出した後…。

## 第九話：明かされ始めた敵

基地での戦いから一日が経った。

彼らはギロ口から話があると聞き、日向家の地下にある秘密基地の会議室に集まっていた。

「…全員、集まったな」

集まったのを確認したギロ口は、全員の方向を向いた。

「ギロ口、話って何？ 重大な事？」

「ああ。奴らの事を、な」

「なにっ！？ お前、操られてた頃の記憶があんのか！？」

マタドーラの驚いた様な発言を聞き、ギロ口は頷いた。

「質問もあるだろうが、先に俺の話を聞け」

深刻な顔で言うと、ギロ口は語り始めた。

「まず奴らの目的だが、ペコポン（地球）を侵略する事。その為に兵器化したガンプラや戦闘用に改造されたネコ型ロボットを使用している」

「…やはりそれが目的でアールか…」

「そして奴らは俺達を操る為に、コントロール銃というものを使用していた」

「？ 何ですかそれ？」

「負の感情で相手を操る事が出来る銃らしい…兎に角、俺たちはそれで操られていた」

それを聞いて、のび太は疑問を抱いた。

「ちょっと待って？　だったら何で僕達にもそれを撃たなかったの？」

のび太の言葉に、全員はその事に気付いた。

「確かにそうだ！　何で俺達にもそれを…？」

「…これは復讐も入っている。分かるか？」

「復讐…なるほど。確かに仲間を操り、我々を攻撃するのは精神的なダメージを促す」

夏美達とのび太達は俯いた。

確かに精神的なダメージも、自分達にはあつたからだ。

「そして、ケロロやドラえもん達を操っているのは…」

「知っている。ハイグレ魔王だな？」

「そいつもいる。しかし、そいつ“だけ”ではない」

「なに？」

初耳のその情報に、アクション仮面は耳を傾ける。

「一度だけ、ケロロがこう呟いたんだ。『ハイグレ魔王殿と“アチモフ”殿がいれば、ペコポン侵略は簡単であります』…とな」

「なにっ！？　アチモフだあ！？」

アチモフという名前が出た瞬間、ドラえもんズの面々は驚きの声と表情を出した。

「知ってるの!？」

「ボク達が前に捕まえた世界征服を企んだ科学者だよ!」

「そういや、前に脱獄してそのまま行方不明って話があったな……」

「えっ!？ 初耳ですよその話!？」

「マタドーラ! そんな大事な事を何で言わなかったでアールか!？」

「あうあうっ!!!」

そのまま騒がしくなったドラえもんズを無視し、ギロロは話し出した。

「それで、ドラえもんズにも復讐を……?」

「悪い事をしたんだから、自業自得じゃねえか……」

ひろしは怒りを含み、呟いた。

「それと俺はあと一人、協力者がいると考えている」

「えっ!？ 何で分かるの!？」

「それは……」

「我々の存在を知っているから、だな?」

ガルルの言葉に、冬樹が気付いた。

「そうか! もし、しんのすけ君やドラえもんズの敵だけなら軍曹達の事を知っている筈が無い!」

「つまり俺達の事を知ってる上に、復讐したい奴が協力してるって事か。クツクツクツクツ」

クルルの陰険な笑い声が会議室に響く。  
そして夏美は手を挙げた。

「ギロロ、聞きたいんだけど」

「何だ？」

「ボケガエル達の場所、分かる？」

「…すまん。あれは移動要塞の様なもので、移動できるんだ。だから…」

「場所は分からない、って訳ね」

この場がタメ息に包まれる。

ふと、マサオが恐る恐るギロロに問いかけた。

「あの、ギロロさん。どうしてあやつられてたころのきおくがあるの？　ぼくはおぼえてないのに」

「…分かん」

「って、分かんねえのかよ!!」

ジャイアンのツッコミを受け、ギロロはうな垂れる。

「…すまん。本当に分かんのだ」

「別にどうでもいいじゃない。敵の正体も分かってきたんだし」

「そうそう!　のび太君の言うとおりだ。ギロロ君も味方になってくれたんだし」

のび太とひろしの叫びは、全員を頷かせた。

「よし!　アチモフとハイグレ魔王って奴とかをブツ飛ばすぜえ!」

「おおー!!!」

「ジャイアン!　こんな近くで叫んだら、耳が痛いよ!」

ギアギアと騒いでいると、会議室の扉が開いた。

「皆さん。コーヒーを入れてきました。」

「あ、ありがとうモアちゃん……んっ？」

コーヒーを受けとった瞬間、冬樹は驚きのあまり叫んだ。

「って、モアちゃん！？ いつの間に!？」

「言ってなかったか？ この会議室に全員が集まった頃には封印は解けてたぜえ？」

「言ってねえよ!！」

「良かったな！ モアちゃん!！」

モアの事で更に騒がしくなる中、夏美がギロロに近づいた。

「ギロロ。そういえば、言うの忘れてた」

「んっ？ 何をだ夏美？」

夏美はギロロに笑顔で言った。

「おかえり」

「……た、ただいま／＼／」

顔を赤くして、ギロロは何とか返したのだった……。

「秘密基地」

「どういう事がありますか!？」

「知らないよ!」

その頃、ケロロ達は珍しく焦っていた。  
なぜなら…。

「どうしてボー殿の操りが解けちゃったのよ!？」

「しかも、しんちゃんを牢から出して逃げちゃったんだ!！」

「そんな事を言ってる場合ではないでござる! 速く追わねば…!」  
「その心配は無いぜ!」

キッドは見るからに焦っているケロロ達を鎮める。

「さっき風間が改造したアーマーを着てた。それでガンプラとか連れて追撃に出たぜ!」

「ほっ! 危ねえ! …しかし、何で洗脳が解けたんでありますか?」

「…もしかして、このコントロール銃に限界があるんじゃない?」

ケロロは頭をフル回転させ、結論を出した。

「とりあえず、この事をハイグレ魔王殿やアチモフ殿に言った方が良さそうでありますな」

「だろうね。ドロロ君とキッドはここで待機してて」

「OK。分かったぜ」

「心得たでござる」

そしてドラえもんは、ハイグレ魔王とアチモフのいる部屋へと歩いていった…。

## 第九話：明かされ始めた敵（後書き）

第九話、短めですが完成です。

ちよつと物語の展開が速すぎるかもしれませんが…。

それはさておき、次回はボーちゃんとしんのすけに危機が…！？  
ご感想、ご指摘を是非、お願いします。

## 第十話・逃げし者達と復讐の風間（前書き）

ギロロの話聞き、更に決意を強くする一同に…。

## 第十話：逃げし者達と復讐の風間

「…ん？」

「どうしたクルル？」

話が終わり、上に戻ろうとして動いた時に発せられたクルルの声に全員は止まった。

「どうやら近くで戦闘が起こってるみたいだな？」

「なに！？」

「しかも熱量から考えてかなりの数みたいだぜえ？」

笑いながらクルルは、驚いたまま硬直している彼らを見る。

「どうする？」

「行くに決まっているだろう！」

すぐさま武器を構えて走り出すギロロを、慌てて皆は追いかける。

「ま、待ちなさいよギロロ！！！！」

「行こう、皆！」

「ああ！」

戦闘が起こっているその先で、何が起こるか分からないまま、彼らは走っていった…。

く川原く

「終わりにしようよ、ボーちゃん」  
「ボー…！」

埃だらけになっているボーを囲むホバー移動型の陸戦型ガンブラ、  
“ドム”数機。

陸戦型モビルスーツ“グフ”数機。

そしてカンタムロボを思わせるアーマーを着込んだ風間だった。

「しんのすけはまだ捕まっていないけど…時間の問題だよ？」  
「しんちゃん…」

この場にはいないしんのすけを思いながら、ボーはヨロヨロと立ち上がる。

「ドム、グフ。連れてけ」  
「了解」

囲んでいた数機の内の一機が、ボーを拘束する為に近づく。  
何とか逃げようと、足を動かそうとした時だった。

二発の銃声がした瞬間、ドムとグフは穴が開いた腹部から放電を起す。

そして、何も出来ないまま二機は爆発した。

「なにっ！？ 全機、離れろ！」

号令と共にドム、グフの数機は高速で離れた。

「誰が…！？」

「俺だ…いや、俺達だ」

ハッとして風間は声のした方向を睨んだ。

そこには秋にみさえ、ネネやマサオ、クルルを除いた全員が来ていた。

「ギロ口さん…！ あなたも洗脳が解けたんですね？」

「…見たところ、ボーの洗脳が解けたから追撃に出たんだな？」

この言葉を返さずに、風間は銃口を向ける。

「うるさい！ ここで排除してやる！ 全機かれ！」

「数で攻める…素人がやる事だな」

「よーしっ！ 皆、戦おう！」

「……おーっ！！！！」

のび太の掛け声に大きな声で全員は返すと、迫り来るガンプラとの戦いが始まった。

「アクション、ビームッ!!」

一番手のアクション仮面は両手を構え、黄色いビームを放つ!

「!」

殆どのグフ、ドムはかわすが、その内の一機はかわせずに直撃する! 黒コゲとなったグフは崩れ落ちる様に地面に倒れ、爆発した!

「こいつっ!」

「喰らえっ!」

敵討ちをする為に、二機のドムが360ミリバズーカを構え、射出する!

「今度は俺だ! ひらりっ!」

迫り来るバズーカの弾を、マタドーラはひらりマントであっさりとはね返す!

一機は回避するが、もう一機は避けきれずにバズーカの餌食となった。

「うおっ!? 兄弟!?!」

「もらったですう!」

動きの止まったドムの足を掴み、タママはそのまま振り回し始める!

「うおおおおおおおおおっ!!!!!!?」

「おんどりゃああああああっ!!!!!!」

勢い良く投げ捨て、近くにいたグフに激突させ、地面へと倒す！

「これでどうだっ！ ヒートロッドオ！！！！」

一機のグフは電撃が流れる鉄製のムチ、“ヒートロッド”をマサオに向けて放った！

「えっ！？ うわああああああっ！！！！？」

「アチヨー！！！」

マサオの前に出てきた王ドラは手で弾き飛ばし、明後日の方向に弾き飛ばした。

「シュートオ！」

そして王ドラの後ろから出てきたドラリーニョがサッカーボールを打ち込む！

「ごはっ！！？」

避ける事もままならず、グフは腹部に受けたサッカーボールによって後方に飛ぶ！

「遠距離から攻撃だ！」

「「「おうつ！！！！」」」

ドム、グフの各二機は360ミリバズーカ、マシンガンを構えて撃ち続けた！

「やばっ！」

「アオオオオオオオオオンッ！！！」

ドラニコフは口から炎を吐き、弾を全て燃やし尽くした。  
しかし後からすぐに弾の嵐が起こる。

「まだくるよ！？」

「任せて！」

「撃ち落とす！」

「俺も！」

ギロ口はマシンガン、のび太とひろしはショットガンを迫り来る弾に向けて放つ！  
ひろしのは殆ど当たらなかったが、ギロ口とのび太の撃った弾は全ての弾を破壊していた。

「なっ！？ 全部撃ち落としただっ！？」

「馬鹿な！？」

「くっ、くそっ！ 弾切れだ！」

「こっちもだ！」

撃ち過ぎた為に、次々と弾切れが起こった。

「今でアール！」

「喰らいなさいっ！！」

パワードスーツを装着した夏美のビームサーベルがドムを切り裂き、  
巨大化したドラメッドの拳でグフが吹き飛んだ！

「こんのおー！！」

「調子に乗るな！」

残った二機はヒートソードを抜き、体勢を整えている二人に斬りかかった！

「そうはさせねえぜ！」

グフの背後から、ジャイアンの拳が炸裂した！

転がりながら倒れるグフを見て、ドムは慌てて助ける為に止まる。

「大丈夫か！？」

「もらいます！」

その隙を突いて、小雪の小太刀をドムのモノアイに突き刺す！

「おおっ！！！？」

ドムは放電を起こし、遂には煙を上げて倒れ込んだ。

「よしっ！ 残りはもう風間と青いロボットと黒っぽいロボットの  
みだ！」

「ぐっ…！！！」

ギロロの言うとおりだった。

残っているのは風間とドムの発展型である“ドワッジ”一機と、改造型のグフである“グフ・カスタム”一機だけだったのだ。

「ドワッジ！ グフ・カスタム！ 行け！」

「了解！！！」

ドワッジを先頭にグフ・カスタムがその後ろにつき、飛び掛ってき

た！

「ドッカーンッ！……！」

「ハルマゲドン黙示録！ 十万分の一！……！」

「今度こそ当たれーっ！……！」

ジャイアンの空気砲、モアのハルマゲドン黙示録、ひろしのショックガンが先頭にいるドワツジを狙う！

「なめるな！」

瞬時に構えた360ミリバズーカを連射し、全て相殺する！  
そして懐に入り込み、バズーカをバットの様に振り回して三人を薙ぎ払った！

「ぐあっ！……！」

「うげっ！……！」

「きゃあっ！……！」

避ける間もなく三人は喰らい、地面へと倒れた。

「てんめえ！……！」

マタドーラが地面に着地したドワツジを殴る為に飛びかかる！

「させん！」

しかし、間に割って入ってきたグフ・カスタムがそれを遮る。  
そしてマタドーラにガトリング砲がついたシールドを向け、連射する！

「!?! ひらりーっ!?!」

すぐさまひらりマントを振り、はね返す。

しかし連射の効くガトリング砲では、対処が完全に出来ずに隙が出来てしまった。

「しまっ!?!」

「もらったあ!?!」

そのままガトリング砲の餌食となり、マタドーラの身体に何十発もの弾丸がめり込む。

よろめきながら、マタドーラは地面に倒れた。

「皆!?!」

「こ、このロボット達、強いよ!?! どうするの!?!」

「落ち着け! 君達は彼らの手当てを! あいつらは私とギロロに!」

指示に従い、気絶している四人をのび太達は一箇所に集める為に駆け出した。

「させるな! そのまま始末しろ!」

「そうはいかん! 合わせろギロロ!」

「了解!」

ガルルとギロロはドワッジとグフ・カスタムの攻撃を正確にかわしながら接近する!

そして二人は一瞬でドワッジの目の前まで移動し、息の合った蹴りを放つ!

「うおっ!？」

「なっ!？ この!」

グフ・カスタムはガトリングシールドを二人に向け放とうとした。しかし、それは発射される事はなかった。

「な、何だとお…!!!？」

「武器が固定されていると思うな」

倒れこんで爆発するグフ・カスタムに、ギロ口は吐き捨てる様に言った。

煙を噴いている四連ロケットランチャーを投げ捨て、蹴り飛ばされてこっちに帰ってくるドワツジを見る。

その近くにいるガルルは、ドワツジが360ミリバズーカを構えたのを見て、スナイパーライフルを構える。

「死にやがれっ!!!」

「見切った!!!」

一瞬で勝負は決した。

360ミリバズーカから放たれた弾は、スナイパーライフルから放たれたビームによって爆発し、さらにドワツジをも貫いたのだった。瞬く間に放電が起こり、硬直したドワツジは閃光に包まれる。

「ば、馬鹿なあああああっ!!!？」

それを最後にドワツジは爆発した…。

「ま、まさか!？ 高い性能を持つ二機が!？」

「俺達を倒したいのなら、あと百機は持つてくる必要があるな」

基地から転送されたバズーカを構えたギロロが、風間に迫る。

「手を貸そうかギロロ？」

「いらん。俺一人で決着をつける」

「くっ！ ボクに勝てると思うな!!！」

背中に設置されていたスラスターを吹かし、高速で移動しながら腕についているビームキャノンを連射する！

「遅い！」

背中装置から四本の光の羽を出すと、宙に浮く。

そして次々と来るビームをかわしながら風間の後を追う！

「くそっ!!!!」

全て避けられたと分かった風間は、腰部にある二本のビームナイフを投げる！

「ふんっ！」

抜いたビームサーベルで一瞬で弾き飛ばし、更に距離を縮める。

「バカな!!!!？」

「焦って武器を使うのは、素人の証拠だ」

「うるさい！！！！ 素人とボクをバカにして！！！！」

両肩部に設置してある二門のビームカノンを発射する！  
太く長い光が、ギロロを狙う！

「焦って使うのは素人のやる事と言った筈だ！！！！！」

シールドを転送し、ビームを防ぐ。

しかし通常のビームよりも熱量が桁違いであった為か、シールドは無残にも貫通した。

「はははっ！ やった……！！？」

風間の笑い声が止まった。

シールドの後ろにいた筈のギロロが、ビームサーベルを振りかざした状態で目の前にいたからだ。

「いつの間に……！！？」

「ビームがこっちにきた瞬間にだ！！！！」

そう、ギロロは転送したシールドが貫通した瞬間に一気に攻め込んだのだった。

風間はビームサーベルを何とか防ぎ、再び距離を開こうとする。

「させん……！！」

放たれた四つのバズーカの弾は、風間のアーマーの背中にあったスラスターを破壊した！

「なにつ！！？」

「もらったあ！！！！」

そして一気に距離を縮め、両肩部に設置されていたビームカノン、両腕に設置されていたビームキャノンを切り裂いた！  
最後に真上からバズーカを放ち、直撃させる！

「うぐっ！？」

脚部のバーニアで何とか減速し、地面に無事に着地した。

「まだ終わりじゃ！」

「終わりだ」

ハッとして風間は上を見る。

その瞳に映ったのは、銃のグリップ部分を自分に向かって振り上げるギロ口だった…。

「やったか？」

「ああ」

返事をする、と、気絶して額にアザが出来た風間からほぼ全壊しているアーマーを脱がせた。

「ボーちゃん、大丈夫かい？」

「うん…だいじょうぶ」

その近くでは、お医者さんカバンでボーを治しているのび太とアクション仮面の姿があった。

「でも、どうしてボーくんの操りが解けたんだろう？」

「分かんない……」

「……ボーちゃん。しんのすけ君の場所を……」

「……………」

その質問に、ボーは顔を下に向けた。

「ごめんなさい。しんちゃんとはぐれて……」

「えっ？」

思いもよらない返答に、二人は声を上げた。

「しんのすけも逃げて……皆！ アレ見て！……！？」

スネ夫の叫びに、気絶しているメンバー以外が首を向ける。

向こう岸で見えるものは、丸に耳が生えた様なシルエットが五つほど見えた。

「……あれはネコ型ロボット！ 増援でしょうか！？」

「いや、あの方向から攻撃は妙です……何かを抱えている？」

ガルルの目では、一体のネコ型ロボットが何かを抱えているのが見えた。

ネコ型ロボット達は、どこでもドアを出して開き、順々に入っていた。

その際に、夕日が上がったと同時に抱えているものの正体が分かつ

た。

「しんのすけ君！！！」

「しんちゃん！！！」

「なにっ！？ 本当だ！」

操られていた記憶を持っていたギロロは、しんのすけの顔を覚えていた。

そして、すぐに向こう岸に向かおうとするが…。

川に入ろうとした瞬間に何かにぶつかり、入ることが出来なかった。

「ごはっ！！？ 何だコレは！？」

「何やってるんですか伍長さん！ もう僕がやるですう！ タママインパクトオ！！！」

しかしタママインパクトも向こう岸に着かず何かに当たって爆発した。

煙が晴れると、変化は何もなかった。

「…！ 通せんぼカバーです！」

「通せんぼカバー！？ 何それ！？」

「名前の通り、何も通さないカバーでアール！！ これを抜けるのは不可能でアール！！」

「そんなんっ！！？」

刻々とどこでもドアに入っていく、しんのすけを抱えたネコ型ロボットも入る。

「しんのすけくーんっ！！！！」

「しんちゃん！！」

必死の叫びを聞いたネコ型ロボットはニヤリと口元を歪めた瞬間、どこでもドアは消えた。

「しんのすけくうううううんっ！！！」

「しんのすけええええええええええっ！！！」

アクション仮面とみさえの悲痛な声が、川原に木魂した…。

〈秘密基地〉

「そうでありますか…しんのすけ殿は捕まえたでありますか…」

「でも二人も一気に無くすとは痛いな…」

会議室で深刻な顔で話をしている四人がいた。

「ドロロ、キッド。何としても彼らを倒すのであります。作戦は任せるであります」

「了解ござる」

「分かった…そっいや、洗脳が解けた理由は分かったのか？」

ケロロは頭を横に振った。

「ダメでありました。しかし、調べると言っていたでありますから大丈夫であります」

「ふーん…それじゃ、ドロロ。作戦でも考えるか」

「そうでござるね」

二人は会議室の自動ドアを通り、部屋から出て行った。

それを見届けると、ドラえもんが口を開いた。

「…ケロロくん、何で嘘をついたの？」

「…分かってるでありましよう、ドラえもん殿。言ったら洗脳が解けるかもしれないであります」

ケロロは天井を見上げ、ハイグレ魔王との会話を思い出した…。

く回想く

『想い…でありますか？』

『そう。恐らく洗脳を上回る想いの強さで戻ったんじゃないのかしら』

椅子にすわり、アチモフの解析結果をハイグレ魔王は言っていた。

『その場合、記憶などはどうなるので…？』

『気絶された時と違って、操られていた当時の記憶は残るらしいわ』

よ？  
『

…そうでありますか……』

〈回想・終了〉

「想い……」

「何だかボク、頭が痛く……」

「ドラえもん殿でもありますか…我輩でもあります」

何故、頭が痛くなるのか二人は分からなかった。

二人は知らない、自分達も操られているという事を…。

## 第十話：逃げし者達と復讐の風間（後書き）

第十話、いかがでしたでしょうか？

今回はかなり長めにしたつもりです…。

次回は遂に、ドロロとキッドが動きます。

感想、ご指摘をお待ちしてまゝです。

## 第十一話：戻りし者達と進む計画（前書き）

ボーちゃん、風間は戻ったが、しんのすけは再び連れ去られ…。

## 第十一話：戻りし者達と進む計画

日が沈み、夜になった。

あの戦い後、日向家に戻った一同は怪我をした者達を治療室に運んだ。

一応、治ってはいるが、安静にしておく必要が合ったためだ。

「モアさんもひろしさんも武さんも、大したケガじゃなくてよかったわ」

「マタドローも、タイムふろしきで何とか治りましたしね」

「ボーちゃんって子と風間って子も、大きな怪我をしてなくてホントに良かった」

治療室では、みさえと王ドラ、のび太達と冬樹と桃華にガルル、春日部防衛隊とアクション仮面が怪我をした者達の介護をしていた。

「ボーちゃん…」

「カザマくん…」

「心配しなくても、寝てるだけ。明日には回復してるわよ」

ボーと風間の寝ているベッドを心配そうに見ているマサオとネネに、静香は優しい口調で諭した。

ふと、みさえは目線に入った時計を何気なく見て言った。

「いやだ、もう九時よ。皆、私が看病するから寝なさい」

「そんな…大丈夫ですよ。皆、学校も休んでますし」

「…そういえば、ママにも、ようちえんのみんなにしんぱいかけてるかな…」

実はマサオとネネは、家に帰っていなかった。

皆と一緒に帰りたい、その心が家に帰る事を拒んだのだ。

もちろん当初は周りも反対したが、二人の決意にとうとう負けたのだった。

「ぼく、ママの所に帰りたいよーっ！！！」

「スネ夫！ 静かにしてよ！！」

のび太達や冬樹達も、学校を休んでいた。

家の人には、友達の家泊まると適当にごまかした。

何とかスネ夫を落ち着かせようとした時だった。

「お前ら無事か！？」

「伍長！？」

突然、武装したギロロが治療室に乱入してきたのだ。

「どうしたのいきなり！？」

「敵襲だ！」

「ええっ！！？」

治療室にスネ夫の叫びが響き渡った。

「敵はこの基地のどこから、どこでもドアで進入している！」

「そんな…！ まだ一日も経ってないのに！？」

「油断しました…敵はまだガンプらなどの戦力が大量にある事を…」

！」

「それよりも戦える者はオレと一緒に来い！ 何人かこの部屋に残してな！」

慌てて武器を持ち、ギロロを先頭に何人かが治療室から出ようとした。

しかし、何故か先ほどは開いた自動の扉に近づいても、反応が起らなかった。

「むっ！？ どういう事だ！？」

『おい。聞こえるかいギロロせんぱい』

嫌味な声が、設置されているスピーカーから流れる。

「クルルか！？ どういう事だ！ 扉が開かんぞ！」

『その扉、さっき言ってた通せんぼカバ―ってのがやられてるから、開かねえと思うぜえ？』

「何だと！？」

嫌味な声が、今は更に倍増している気がした。

「何とかならんのか！！！」

『あのカバ―の強度は知ってるだろ？ まっ、何とか出られる様に対処してやるさ』

スピーカーのブツツと切れる音が、響いた。

「クソッ！ それまでここから出られないのか！」

「大丈夫だよギロロさん！ とおりぬけフープを使えば……」

「ダメです。あのカバ―には秘密道具も効果はありません」

王ドラの言葉に、悔しそうな顔をしてのび太はスぺアポケットにしまった。

「やっぱり、待つしかないか…」

「信じようよ、外にいる皆を…!」

そうは言っても、やはり齒がゆさが治療室の全員にあったのだった…。

〈秘密基地・通路〉

「はああああああああっ!!!!!!」

「やああああああああっ!!!!!!」

パワードスーツを着用した夏美と小雪の連携攻撃で、黄色いネコ型ロボット達は吹き飛ばす。

「怯むなあ! どんどんいけえ!!」

エリートの子ネコ型ロボットの号令に、周りにいた十体のネコ型

ロボット達は次々と駆け出した！

「小雪ちゃん！」

「はいっ！」

迫り来るネコ型ロボット達に、二人は飛び掛った。

最初に夏美の持つビームサーベルによって、前方にいた三体が真つ二つに切り裂かれる！

「もらった！」

「受けるお！」

夏美の左右から、ジャンボガンを構えた二体が迫る、が。

「させません！」

小雪によって放たれた数十本のクナイによって塞がれた。

避ける事も出来ずに二体は数十本のクナイを喰らい、地面に倒れた。

「ちい！」

「接近戦だ！」

続いて秘剣・電光丸を持った二体が、二人に斬りかかる！

「はっ！」

「っ！」

瞬時に持っていた剣で受け止めると、鏖迫り合いが始まった。

「ぐぐっ…！」

「人間風情が…！」

「くっ…！ 前のロボットさんよりも力が強い…！」  
「負つけるもんですかあ…！！！」

この状態が続く中、残った三体がこつそりと後ろに回っていた。

「よしっ！ あとはこのジャンボガンで…「させないでアール…！」」

振り向くとそこには、巨大化した拳が目映った…。

そのまま三体は、エリートの赤いネコ型ロボットの方向に殴り飛ばされた！

「うおっ…！！？」

赤いネコ型ロボットは何とかかわす。

吹き飛んできた三体は通路の壁を貫通し、ガラガラと壁を崩していた。

「っ！？ 何だ！？」

「もらったわよ！」

壁の崩壊する音に動揺し、二体のネコ型ロボットが後ろを向いた。  
しかし、それは夏美と小雪に隙を与えるのだった。

一瞬で二体を吹き飛ばし、瞬時に二人は胴体に剣を突き刺す！

「が、がが…！！！」

「ぐはっ…！！！」

そのまま機能停止をし、二体は動かなくなった。

「援護、ありがとうございます！ ドラメットさん」

「礼には及ばんでアール」

「さてっ！ 残りは…」

「ぐっ…！ クソッ…！！」

残ったエリートのコ型ロボットは、走って逃亡を図った。

「あっ！ 逃げた！」

「逃がしませんよっ！」

「待つでアール！」

この通路に、駆け出す音が響き渡った…。

〈会議室〉

「追い詰めたわよ！」

「諦めてください！」

「覚悟するでアール…！」

「しまった…！」

何とか三人は、会議室の隅にギリギリと追い詰めた。

「チクシヨウ!!!」

空気砲をはめ込み、エリートネコ型ロボットは夏美に向けて放った！

「えいつ！」

しかしビームサーベルに弾かれる事によって、空気の塊は消滅した。空気砲の反動で後ろに下がった瞬間を狙い、小雪の小太刀で胴体を貫く！

「ぐおおっ!!!?」

小雪がその場から離れた直後にエリートネコ型ロボットは倒れ、動かなくなった…。

三人が動かなくなった事を確認した瞬間、パチパチと拍手をする音が聞こえた。

「さすがでござるな、お三方」

「その声は…！」

一番速く小雪は振り返り、その人物を見た。

予想通りだったのか、焦らずにゆっくりとその人物の名を言った。

「ドロロ…」

「小雪殿…」

二人はじつと相手を見て、小雪が先に話を切り出した。

「ドロロ…戦わなくちゃ、いけないの…？」  
「……………」

何も言わずにドロロは小刀を抜き、小雪に駆け出す！

「ドロロ！」

「…もはや、何も語るまいでござる」

小太刀で小刀を受け止めた瞬間、その衝撃が辺りを振動させる！

「ぬっ！！？」

「きゃっ！！？」

夏美とドラメッドは転倒しそうになるのを何とか凌ぎ切った。

「小雪ちゃん！ 助けに「来ないでください！」！！？」

駆け出そうとした瞬間、小雪の叫びに夏美は動きを止める。

「ドロロは…私自身が元に戻します」

「小雪ちゃん…」

「…分かったでアール」

納得したのか、二人は動きを止めた。

「中々の度胸でござるな、小雪殿。それに免じ、苦しまない様に…  
殺す」

ドスの聞いた声と殺意の籠ったドロロの瞳に一瞬ビクツとするが、  
頭を横に何度も振る。

「行くよ…絶対に戻してみせるよ！ ドロロ！」  
「笑止！」

そして再び、小刀と小太刀がぶつかり合った…。

それから二人の凄まじい攻防戦が繰り広げられる中、ある三名がこの部屋に雪崩れ込んでくる事となった。

「ドッカーンッ！！！」

「うあああああああああつ！！！」

ドラリーニヨが扉を破って入ってきたのだ。

「！？ ドラリーニヨ！？」

「どうしたの…！ 誰よあんた！？」

そのすぐ後に入ってきたキッドに気付いた夏美は、ビームキャノン  
を構える。

「へー。唯の人間にしちゃ、いいもん装備してんじやんか」

「キッド…！？ お主が引きずっているのは、ドラニコフか！？」

気絶しているのか全く動かないドラニコフを見て、ドラメッドは叫  
んだ。

するとキッドは、ドラニコフを地面に置くと話し出した。

「ああ。この二人はオレの空気砲で倒しちゃったぜ？ 残ってるのはお前等、三人だけだ」

その言葉に二人は愕然とした。

「そんな馬鹿な！？ 他の皆は！？」

「心配しなくても、閉じ込めているだけ…結果的には残ってるのはお前等なんだよ」

閉じ込められているだけと知って、二人は安堵の息を漏らした。そして気を取り直し、キッドを睨む。

「へっ…二人がかりとはいえ、オレに勝てると思うなよ？」

「キッド！ 絶対に元にもどすでアール！」

「援護するわ！」

ドラマッドと夏美は走り出し、キッドに向かっていった…。

「はあっ！…！」

「甘いでござる…！」

数十本ものクナイを全て小刀で弾き飛ばし、小雪を睨む。

「その程度でござるか？ 小雪殿？」

「くっ…！（ドロロ…やっぱり強い！）」

小太刀を強く握り、いつでも反撃できる様にする。

「次元の彼方に消えろ！ 零次元斬っ！！！」

「っ！？」

ドロロは相手を異次元へと送り込む技である、零次元斬を繰り出す！

「いけないっ！ 忍法！ 木の葉隠れの術！」

迫り来る刃をかわす為、大量の木の葉を使って間一髪、回避した。  
そして全て木の葉は、零次元斬によって開けられた次元の穴に吸い込まれていった…。

「かわしたでござるか…」

「はあっ！！」

体勢を立て直し、瞬時にドロロに斬りかかった。  
しかしあっさりと小刀で受け止められ、そのまま鏝迫り合いが起った。

「ぐっ…！！」

「中々…！ だがっ！」

力はほぼ互角だった。

だが、一瞬の隙についてドロロは小雪を吹き飛ばした！

「きゃっ！！？」

「いくでいじわるっ！」

うまく着地をした小雪に一気に迫り、そのまま小刀で連続で斬りかかる！

「くっ！！？」

慌てて小太刀で連続で来る斬撃を食い止めるものの、徐々に小太刀は耐え切れずに…。

「ふんっ！」

「あっ！？」

最後の斬撃によって、明後日の方向へと飛んでいった。止めに柄を小雪の頭部に叩きつける！

「うつ…！！」

「さあ、終わりでござる！」

ドロロは構える。

自身の最強にして、究極の技を出す為に。

「ドロロ忍法！ 究極秘奥義！！！」

手にエネルギーが集まり、それらは黄色い光を放つ手裏剣へと姿を変える。

「流星十字手裏剣！！！」

投げられた巨大な手裏剣は、円を描きながら真っ直ぐに小雪に向かう！

「小雪ちゃん!？」

「よそ見してんじゃねえ!! お前の相手はオレだぜっ!」

ドラメッドが倒れ、今や夏美とキッドとの戦いとなっていた。  
その為に、小雪を助けに行く事など出来なかった。

「…今だ!」

倒れていた小雪は何とか立ち、右に転がって移動する事で、巨大手裏剣を回避した。  
流星十字手裏剣はそのまま壁に突き刺さり、この部屋を振動をさせた。

「むっ!？」

「小雪忍法! 蛇群の如し!!」

そして何本もの手裏剣を、不規則な軌道で投げ始める!

「ぐっ!」

それらをドロ口はある時は小刀で弾き飛ばし、ある時は回避をした。  
しかし、それは相手に隙を作ることともなった。

「てやっ!」

手裏剣に気を取られている隙を突き、懐に飛び込む!  
近づいた瞬間、ドロ口の持っている手首を叩き、小刀を落とさせた!

「しまっ!!!？」

「ドロ口!」

何を思ったのか、小雪はそのままドロロに抱きついた。

「なっ！？ 何をつ！！？」

「ドロロ…」

悲しみが混じった声に、ドロロは何故か何も言えなくなった。

「お願い…元の私の大好きなドロロに戻って…！」  
「…こ、ゆき殿？」

小雪の目から溢れる涙は頬を伝い、ドロロの顔にかかった。  
この言葉と涙の二つは、ドロロの洗脳など、一瞬で消し去るには十分なものだった。

「小雪殿…」

殺気が完全に消えたドロロは、小雪の背中に短い手を回し、ギュッと抱きしめた。

「っ！ ドロロ…！」

「小雪殿…すまなかったでござる」

「うっん…いいの！ 元のドロロに戻ってくれて、良かった！」

そのまま二人は、強く抱きしめあった…。

「きゃあっ！！！！」

「「！？」」

しかしそれは、夏美の悲鳴で終わる事となった。

パワードスーツが半壊して倒れこんでいる夏美に、二人はすぐに駆け寄った。

「夏美さん！ しっかり！」

「夏美殿！」

「おいおい！ 余所見とはずいぶん余裕だな、ドロロ！」

ハツとして顔を上げると、そこには多少のダメージを負っているキツドの姿があった。

「洗脳が解けちまったんじゃない！ お前も倒すまでだ！」

「そうはいかんでござる！」

キツドはドロロに向かって走り出すと、空気砲を構えて放った！

「はっ！」

空気の塊を跳び上がって回避し、落ちていた自身の小刀を瞬時に拾う。

「オレの空気砲で、お前も倒してやるよ！」

「拙者は、負ける訳にはいかないでござる！」

斬撃を空気砲で受け止め、キツドは蹴りを入れる！

「ぐっ！？」

「オラオラ！ 下がお留守だぜ！」

腹を押さえているドロロに向けて、空気砲を放つ！

「ドッカーン！ ドッカーン！ ドッカーン！」  
「ぐはっ！？ ごはっ！？」

連続で空気の塊を受けるドロロに、更に空気砲を放ち続ける。

「ドッカーン！ ドッカ「いい加減に、しなさい！！」なにっ！？」

何とか動く事の出来たパワード夏美の拳が、キッドを吹き飛ばす。  
転がっていくキッドを尻目に、小雪はドロロに近づく。

「大丈夫！？ ドロロ！？」

「な、何とか…！」

何とか起き上がり、ドロロは起き上がるキッドを見る。

「夏美殿と小雪殿は下がって！ 拙者がキッド殿を「待つでアール  
！！！！」

後ろの声に、三人は振り返るとその人物の名をあげた。

「ドラメッド！！」

「ドラメッド殿！！」

「ドラメッドさん！！」

ヨロヨロと起き上がるドラメッドを、三人は慌てて近寄る。

「我輩が、やるでアール…！！」

「ぼくも…！！」

「アウ、アウッ…！！！！」

起き上がったドラメッド達は、キッドに近づく。

「へっ！ そんなボロボロの状態でおれを倒せるのかよ？」

「倒して…みせる！」

「アウアウッ！」

「絶対に、元に戻すんだ！」

叫んだ瞬間、三人は飛び掛った。

「無駄だっ！」

手始めにキッドは、かみつきを仕掛けてきたドラニコフを殴り飛ばす！

「シュートオ…！！！」

「ドッカーンッ…！！！」

続いて迫り来るサッカーボールを、空気の塊で逆に吹き飛ばし、ドラリーニョにぶつけた！

「喰らうでアール！」

「おっとお…！！！」

巨大な拳を横に飛んでかわし、すぐさま空気砲を放ってドラメッドを吹き飛ばした！

その様子を三人は、啞然として見ていた。

「い、一瞬で三人を…！！！」

「嘘…！！！」

「何とかせねば…！！！」

ドロロは周りを見て、気がついた。  
先ほどの戦いの際に投げた流星十字手裏剣が消えずに、壁に突き刺さっているのを。

「これでござる!」

流星十字手裏剣を抜き、それをキッドに向かって投げた!

「なにっ!? …だが、そんなもん簡単に避けられっ!?」

移動しようとしたが、足が動かない。

その原因はすぐに分かった。

ドラメッド達が足にしがみ付き、動けなくしていたのだ。

「くっ、クソッ!! 離せ!!」

「そうはいかないでアール!」

「キッド! これで戻って!」

「アウアウッ!」

そして避ける事も出来ないまま、流星十字手裏剣はキッドの腹部に突き刺さった!

「がはっ!!!!?」

「終わりでござる…!!」

崩れ落ちるキッドを、ドロロ達は黙って見ていた…。

そしてドラメッドはすぐにタイムふろしきをかけたと同時に、倒れた。

「ちよつ！？ ドラメツド！？」

「…気絶しているだけみたいですよ？」

「そうでござるか…良かったでござる」

すると扉が開き、のび太達が雪崩れ込んできた。

「みんな、大丈夫！？」

「夏美！ 怪我はしてないか！？」

「ドラメツド！？ ドラニコフにドラリーニヨまで！？ 早くタイ  
ムふろしきを！」

「お医者さんカバン、お医者さんカバン！！！」

「あせんなのび太！」

てんてこ舞いな状況に、この部屋がなったのは言うまでもない…。

く 秘密基地 く

「…時は、きたであります！」

会議室では、ケロロとドラえもん、そして檻に入れられているしんのすけの姿。

そして彼らの視線の先には、大量のガンブラとネコ型ロボット達に埋め尽くされていた。

「ギロロくんやドラメッド、風間くん達が敵になった今！ 君達に今回の作戦はかかっている！」

ドラえもんの強い言葉を受け、徐々に歓声上がる。

「今こそ！ ペコポンもとい、地球侵略作戦…の前に、奴等の抹殺を実行するであります！！！」

「「「「「おおおおおおおっ！！！！！！」」」」」

ガンブラやネコ型ロボット達は、会場に響くほどの歓声を上げた…。

「…冬樹殿。この戦いでケリをつけるでありますよ」

「のび太くん。楽しみに待っててね」

二人はクルルに似た笑いをするのを、ハイグレ魔王とアチモフが見ていた。

「洗脳度を上げすぎたんじゃない？ 危なく自我が崩壊するところだったわよ？」

「仕方ないっショ！ 自然に戻りそうだったのだから！」

コントロール銃を見せながら、アチモフは呟いた。

「…まっ、いいわ。それよりあいつはどうしたのよ？」

「宇宙で協力してくれる者が出たとか言って、出て行ったっショ！」

そう言うと、ガンブラなどの量産をする為にか、そそくさと研究室

に入っ  
ていっ  
た。

「この作戦、成功するかしないかは、彼らの洗脳が解けるかにかか  
ってるわね」

フッフッフと笑いながら、ハイグレ魔王は消えていった…。

決戦の時は、近づいていた…。

## 第十一話：戻りし者達と進む計画（後書き）

第十一話、いかがでしたでしょうか。

長らくお待たせして、申し訳ありませんでした。

パソコンが壊れていた為、かなり更新が遅くなりました…うう、ホントにすいません。

気を取り直して…次回はいいよ、敵の侵略計画が開始されます。どうぞ、お楽しみに！

## 第十二話：現れしは、もう一人の恐怖の大王（前書き）

遂にキッドとドロロを元に戻した彼らに…。

## 第十二話：現れしは、もう一人の恐怖の大王

昨日の戦いから、一日が経ち、太陽が昇り始めていた。

気持ちの良い平和な朝。

しかし、この変わる筈もない平和な朝に、敵が本拠地ごと現れる事を知る者は誰一人としていなかった…。

～日向家～

「全員、いるな？」

同時刻。

ガルルの声に、全員が反応して頷いた。

昨日の夜の最中、ボーや風間、マタドーラの意識が戻った為に、全員は喜びの声を出していた。

その後のドロロの話聞いたものの、敵の基地は何処だか分からないとの事だった。

意気消沈しながらも、残りはケロロとドラえもん、そして捕らわれたしんのすけという事からか、俄然やる気が全員には満ち溢れていたのだった。

「かなりの人数を元に戻した事で、敵は焦りを感じている筈だ」

「…つまり、どー言う事？」

「もし、そんな状況だったら短期決戦を望むな」

元に戻ったキッドの言葉に、数名がハツとする。

「そうか！　つまり敵は、すぐに決着をつける筈と言いたいのか！」

「って事は……」

「そう。敵も本気で来る……」

そう言った瞬間だった。

『あゝテストス。聞こえるでありますか？　皆の衆』

スピーカーから流れる、ケロロの声が聞こえたのは。

「っ！？　この声は……！」

「おじさまの声！」

大慌てでモアが外へ出て行った。

それに続き、何人かが出て行く中、ガルルがみさえや春日部防衛隊、静香を止めた。

「待ってください！　あなた方にはここに残ってもらいます！」

「えっ！？　何ですよ！」

「ボクたちだって、いききたいですよ！」

風間の悲痛の叫びを、ガルルは静かな口調で返し始めた。

「気持ちは分かる。しかし、戦闘がまるで出来ない君達では正直、足手まといだ」

「うっ…」

ガルルの言葉を返せず、静香やみさえ、ひろしも春日部防衛隊も何も言い返せなくなり、ただ俯いた。

そしてクルルに向くと、銃を数丁渡した。

「クルル曹長」

「ちっ…またお守りかよ」

渋々と言った感じで、銃を受け取ったのを確認したガルルは外へ出て行った。

「ひろしさん。みさえさん。しんのすけ君は、私が必ず救い出します」

「アクション仮面…」

「お願いします…」

みさえやひろし、春日部防衛隊の面々は、頭を下げてアクション仮面に頼んだのだった。

それを受け、アクション仮面も外へと出て行った…。

〈外〉

「…な、何だ、あれは!？」

「で、でけえ…!!」

「何なの、あれ…!!」

外に出て、ギロロとドロロ以外の全員は啞然とした。  
何故ならそこには…。

赤と黒の二つの色を強調したボディ。

大きな二つの翼。

円盤の様な形をした“ソレ”は、悠々と空を浮かんでいた。

「あれは！ 俺達が操られていた頃に乗っていた戦艦！」

「そうでござ「ホントかよ!?’「えっ!?’」

ドロロの言葉を遮り、ジャイアンの驚きの声が響く。

「って事は、あれは敵の本拠地か!!?’」

「その通りで「よーしっ！ さつさと乗り込むとしようぜ!.’「あの  
…」

更にドロロを無視し、マタドーラが叫んだ。

それをケロロは聞いたのか、円盤型の戦艦に搭載されているスピーカーから音声を流した。

『そう焦らんでも、乗せてあげるでありますよ』

それと同時に、円盤から発せられた光が全員に当たる。  
すると全員の身体が浮き始め、徐々に円盤へと吸い寄せられる。

「えっ？ えっ！？ どうなってんの！？」

「どうやら、あの円盤に俺達を乗車させたいみたいだな」

「いよいよ、決戦か……！」

「皆！ 残りの二人を元に戻し、しんのすけ君を救出し、残りの敵を倒すぞ！！！」

「「「「「  
 おおおおお  
 ーーーーー  
 ！！！！！  
 「「「「「

片手を挙げ、一部の者以外は声を上げた。

唯一、上げなかったのは…。

「ボクこわいよお!!! ママあゝ!!!!!!」

「どうせ、ボクなんて…」

泣きながら嫌がるスネ夫と、シヨックを受けてトラウマモードとなっているドロロの二人だった…。

～  
円盤・ブリッジ  
～

「ゲロゲロリ。まんまとこの艦に乗ったであります」

司令室では、椅子にドカッと座り、モニターで乗ってきた彼らの姿

を見ているケロロとドラえものの姿があった。

「これで倒せばいいんだけどね…」

「大丈夫でありましょう。何でも、恐ろしく強い三名を配置したとハイグレ魔王殿が言っていたでありますからなあ」

「…そうだね。それじゃ僕は、高みの見物といこうか」  
「そうでありますな！」

モニターに映る彼らの姿を見ながら、二人は言った…。

く円盤・格納庫く

広い空間の中で、彼らは壁に張つてあるものを見ていた。

「…どうやらここは、格納庫の様だな」

「格納庫つてことは…ゲツ！ 一番、奥じゃねえか！」

壁に貼つてあつた艦の図を見て、キッドは呟いた。

「まっ、いきなり司令室やブリッジに敵が来させる訳もあるまい」  
「それもそうだけどよ…」

タメ息を出しながら、ガツクリとマタドローは身体を俯かせた。

「それでは場所も分かったことですし、行きましようか」  
「いや、その前に…」

銃を構えると、ギロ口は積んであるコンテナに向ける。

「さあ、さっさと出て来たらどうだ？ いる事は、分かってるぞ」

そう言った瞬間、コンテナの後ろから黒いロープを纏った男が姿を現した。

『ほう…まさか、バレていたとはな…』

「ケツ！ そんな格好して、魔法使いか何かのつもりかよ？」

マタドールの挑発には耳も貸さず、赤く光る目で彼らを睨んでいた。その時、のび太達が何かに気が付いた様に叫んだ。

「…あつ！？ お前はっ！」

「思い出した！ てめえはアンクル・ドア……！」

「違うよジャイアン！ アンゴル＝モアだよ……！」

アンゴル＝モアの名前が出た瞬間、ギロ口達、全員が固まった。

「ええっ！？ どうしてこの女の名前が出てくるんですかぁ！？」

「同じ名前なんじゃないのか！？」

「まさか……！ っていうか同姓同名！？」

「んなわけないだろ！」

すかさずツツコミを入れ、アンゴルを睨んだ。

『ふっふっふ。どうやら混乱しているようだな。仕方ない、教えてやるっ』

「まずお前が何でここにいるんだよ！ お前はブラックホールに閉

じ込められた筈だろ!!」

この質問を、アングルは笑って返した。

『それはな、ある宇宙人が私をあのブラックホールから救い出してくれたからだ』

「なにっ!? ブラックホールから抜け出すなんて出来るわけが…!」

「いや、今の我々ケロン軍の様な科学力を持つ者なら出来ない事もない」

補足の説明もあり、脱出については納得した。  
しかしまだ疑問点が残っていた。

「それじゃあ、どうしてモアちゃんと名前が一緒なのよ!」

名前の質問が出ると、アングルはまたも笑って答えた。

『それにはまず、私のいた世界について話さなければならん』

「…私のいた世界、だと?」

『さよう。元々私は、この世界のアングル≡モアではない』

ドラえもんズとアクション仮面を除く全員が、首を一斉に傾げた。  
言っている意味が分からないからである。

「どういう意味だ!」

「…つまり、彼は平行世界からやって来たんですね」

王ドラの言葉に、更に場が混乱した。

「説明するでアール。もともと世界とは、実は沢山あるのでアール」  
「……えええええっ！！！！？」「……」

格納庫に、驚きの声が響き渡った。

「ドラマメッド！ 言い方がちょっと……」

「つまり私がいた別次元の地球や、もしもの世界……それを言いくるめて、平行世界というのさ」

アクション仮面の説明で何とか皆は理解できた。

全員が分かった事を確認したアングルは、再び話し出した。

『その通り。私は数多くある平行世界の一つからこの世界にやって来たのだ』

「……ん？ 待て。貴様がこの世界の人物ではない事は分かった。だが、何故この世界に来たのだ？」

それを聞いた瞬間、アングルに怒りが沸いた。

『……その世界で私は、地球を支配する事に失敗したのだ』

「なるほど。それで他の世界ならば支配できると考え、この世界に来たのか」

「それでまた失敗してりゃ、世話ねえけどな！」

アングルがその言葉を聞いた瞬間、怒りが爆発した！

『黙れ！！！！ あの時失敗したが、今度は違う！！！！』

黒いローブからドロドロとした緑の液体が、周りにあるコンテナや部品にまわり付く！

そしてアンゴル自身に全て集まると、様々な物がついた巨大な口ボツトの様な姿になっていく。

コンテナで作られた、巨大な腕。

様々な部品を大量につけた、ナメクジの様な足。

最後に、ザクの頭部をつけた頭。

その顔から見えるのは、通常のザクにはない二つの赤い目があった。

『行くぞ地球人共！！！！あの時の様にはいかんぞお！！！！！！』

「なっ！？ 何だこいつは！？」

巨大な腕を叩きつけるかのように、彼らに振り下ろす！  
それを慌てて、全員は横に回避した。

「ギロロッ！！！！」

「了解だっ！！！！」

ギロロとガルルは持っている武器を、一斉に連射する！

身体に重い物をつけ過ぎた為に、アンゴルは避ける事も出来ずに直撃した！

「やったか！？」

「……！ 避ける！」

煙の漂っている中、巨大な腕が煙の中から現れる！

「ひらありっ！！！」

かわし切れなかったギロ口を、マタドーラがさかさず援護に入る！  
向きを変えられた拳は、そのまま格納庫の壁を壊していった。  
その隙を突き、手の空いている者達は攻撃に入った。

「タママインパクトオッ！！！！！」

「アクション！ ビイイイイムッ！！！！！」

「ドッカーンッ！！！！！」

「シュートオ！！！！！」

「いっけえー！！！！！！」

一斉攻撃は、見事に全て命中した。

しかし…煙が晴れば、そこには身体が少々へこんだだけのアング  
ルの姿があった。

「ダメだっ！ まるで効いてない！」

「どうすれば…！！」

『ふはははっ！！！！ その程度か！？』

笑いながら再び拳を振り上げ、叩きつけ様とした。

しかし、途中でその腕はピクリとも動かなくなった。

『っ！？ なにつ！！？』

「皆さん！ 今のうちに…！！」

小雪が糸を使い、腕をその状態で止めていたのだった。  
相手が抵抗している為に、かなりの力を出しているからか、額には  
汗がにじんでいた。

「今がチャンス！ ショックガンで！」  
「ボ、ボクも！」

のび太とスネ夫は、アングルの目に向けてショックガンを放った！

『させるか！』

もう片方の腕にガードされ、それは阻まれた。

「ドロロ忍法！ 究極秘奥義！ 九星十字手裏剣！！！」

いつの間にか復活していたドロロの奥義が、ガードをしている腕に向かい……！

『グオツ！！！？』

つけ根を狙った為に、コンテナで出来た巨大な腕は斬り飛ばされていった！

「やった！」  
『馬鹿め！』

喜びも束の間、何と腕の中にあるアングルの一部はくっついていてコンテナごと動き出した。

そして、何事も無かったかのように元の腕の付いていた場所に戻った。

「嘘お！！！」

「そんなの反則ですう！！！！！」

『ふふふっ！ 貴様等の攻撃など無意味だ！』

糸によって動かなくなっていた腕も、力を入れて糸を引きちぎる。

「クソッ！ このままではこちらの体力の消耗が多いぞ！」

「何か弱点はないのか…！」

「アオオオオオオオオオオッ！！！！！」

ドラニコフの口から吐き出された炎は、アングルを包んだ！  
しかしそれを気にも止めず、ドラニコフに襲い抱える。

「アチョー！！！！！」

『ゴハッ！！！！！！？』

後ろにいた王ドラは、巨大ヌンチャクを頭にぶつける！

これは効いたのか、その巨体は大きく揺れた。

「アクション！ ビーム…！」

それを待っていたかの様に、アクション仮面が両手を合わせ、エネ  
ルギーを溜めていた。

そして…。

「ボオオオオオオオオオオッ！！！！！！！」

莫大な量を溜めた黄色い光を放つ球が、両手から放たれた。  
体制が整っていないアングルの腹部に、着弾したと同時に大爆発を  
起こす！

『グオオオオオオオオオオッ！！！！！！？』

大爆発は、アングルを地面へと倒れさせる程の威力だった。  
その上、大量のエネルギーを溜めていた為か、それは腹部に張り付いていた装甲にもヒビを入れていた。

「すげえっ!?!」

「あれだけビクともしなかった装甲にヒビを入れるとは…!」

「アクション仮面さん! すごいよ!」

「あ、ああ…」

息も絶え絶えの状態で、アクション仮面は返事をした。

通常の倍以上のエネルギーを溜めた為に、力をかなり使ってしまったのだ。

『おのれえ…! しかし、この程度ではな!』

腕にしていたコンテナを、アクション仮面に向けて弾丸の様に投げ飛ばした!

「うああっ!?!」

力が出ない為に、避ける事も出来ずにそのまま喰らってしまう!  
コンテナごとアクション仮面は壁にめり込んだ。

「!?! アクション仮面さん!!」

『死ねえ!?!!』

今度は腕にしていたコンテナを全て投げ飛ばした!

「うおっ!?!?」

「きゃあ!?!?」

「ぬおっ！！？」

いきなりの攻撃に全員は避けられず、直撃してしまった。  
そしてそのまま、壁に叩きつけられた！

『私の勝ちだな！ ははははっ！！！』

「ぐっ……！」

「こ、この……！」

アングルは高笑いをしながら喋り続ける。

『お前達を消した後、この艦に乗っているあの緑ガエルと青ダヌキと捕まっていたガキを消す！ 私は奴等と共に、地球の支配者となるのだ！』

その言葉にモアと冬樹、のび太とアクション仮面が顔を上げ、アングルを睨んだ。

「今、何て…言った…！」

『聞こえなかったか？ 緑ガエルと青ダヌキとガキを消すと言ったのだ！！！！』

自分が彼らの逆鱗に触れている事も知らず、アングルは高笑いをした。

そして、止めを刺す為に動こうとした瞬間だった。

『グアアアアアアアアアアッ！！！！？』

一発の銃声とビームを放つ音と共に、アングルの悲鳴が響き渡った。

「許せない……！ ドラえもんを消そうって言うなんて……！」

「その、通りだ……！！ しんのすけ君を……消すなど……！」

シヨックガンを片方の目に向けて撃ったのび太は、ゆっくりとシヨックガンを下ろした。

その隣で、アクションビームをもう片方の目に放ったアクション仮面も両手を下ろす。

冬樹は武器が無かった為に何も出来なかったが、その瞳は怒りに包まれていた。

周りにいる全員も、殺気を醸し出していた。

そして目を押さえてもがき苦しんでいるアングルを、モアが構える。

「おじ様を消すと言う人を……誰であろうと！ 私は許しません……！！」

ルシファースピアを構え、制服からアングル族の服に変わる。

「ハルマゲドン黙示録……！！ 一分のお……！！……！！」

未だに目を押さえているアングルに向け、構える！

「いちいいいいいいいい……！！……！！」

光り輝くルシファースピアを、ガラ空きである腹部に突き当てる！

その瞬間、アングルの腹部が光り輝き出す！

『グオ！！？　グオオオオオオオオオオオオッ！！！！！！？』

そのまま光は腕、顔といった、アングルの至る所から漏れ出す！

『ば、馬鹿な！！！！？　この私が！！！！？　地球を支配する筈の私  
があ！！！！！！？』

光の中で、徐々に身体が消滅していきながらアングルは叫び続ける。

『ウソダアアアアアアアアッ！！！！！！！！』

大きな声で叫びながら、アングルは完全に消滅していった…。

「皆。大丈夫ですか？」

「何とかな…」

アングルを倒した後、大破している格納庫から出て、その少し先の  
部屋で治療をしていた。

「さあ、治療をしたらすぐに行くぞ」

「落ち着いてくださいギロ口さん！　この状態で行ったらあつとい  
う間にやられてしまいます！」

王ドラの言葉をもっともだと言うかのように、周りも頷いた。

「…ちっ」

ドカッと座り込むギロ口を見て、全員はホッとする。

そしてのび太とモアと冬樹、アクション仮面が奥を見つける。

四人が思っている事は、一つだった。

（（（必ず…助ける！）））

それを四人は、心より誓っていた…。

## 第十二話：現れしは、もう一人の恐怖の大王（後書き）

第十二話、いかがでしたでしょうか？

尚、ドラえもんの方であるアングル＝モアの設定はオリジナルなので…。

次回はヘンダーランドのあいつを出すので、是非見てください！

ご感想、ご意見は随時、お待ちしております！

第十三話：復活！ - 100 の雪だるま！（前書き）

ブラックホールから抜け出た、アングルを倒した一同は…。

第十三話：復活！ - 100 の雪だるま！

「やれやれ、アングル殿は役に立たなかったでありますな」

ブリッジでの戦いをモニターで見ていたケロロは呟いた。

「おまけに格納庫を壊されちゃ、外にガンブラ達を出せないしねえ…」

「まっ、それは後でタイムふろしきで直すとして…問題は奴等であります」

モニターの場面を変え、のび太達が歩いている場面を映す。

「次の部屋は…コンピュータールームか。この部屋には誰が…？」  
「なんでも、ハイグレ魔王殿の話ではしんのすけ殿に関連の者らしいであります」

そう言つて、モニターを見続けた。

次の戦いで、どちらが勝つのかを見るために…。

「コンピュータールーム」

「……ここは？」

「どうやら、コンピューターの部屋みたいだな」

銃を構えたギロロを先頭に、全員はゆつくりと部屋に入ってきた。部屋には大量のパソコンや電子機器があり、広い中央には、何故か雪だるまが置かれていた。

「何であそこに雪だるまなんかがあるんだ？」

「ただ単に置いてあるだけだろ」

その雪だるまは、海苔で丸い目と三角の目、そして眉毛がついていた。

片方の手には赤いグローブ、もう片方の手にビニール手袋をつけていた。

そして青いバケツをかぶっている、何の変哲も無い雪だるまだった。

何もないのだろうと思い、一同はそれを無視した。

「しかし、あれから敵に一度も襲われずによく来れたものだ」

「ホントだぜ……」

事実、アンゴルを倒して治療をし、この部屋に来るまで何者にも会わなかった。

この状況に、全員が不審がっていた。

「罠か……？」

「分らん。しかし進むしかない……」

コンピュータールームを無視し、扉に近づこうとした時だった。

「それはいけないねえ」

何処からとも無く聞こえた声に、全員は反応を示した。

「誰だ！？ 何処にいる！？」

「ここにいるじゃねえか」

その瞬間、中央に置いてあった雪だるまに、黄色いローラースケートを履いた足が出てきた！

「ええ！！？」

「あゝあ、あちいあちい。ここの冷房、壊れてんのか？」

顔の部分についている海苔の眉毛が垂れ下がり、口も下に向く。

「た、ただの雪だるまじゃなかったのか！？」

「な、何だお前は！？」

冷房のスイッチを入れ始めている雪だるまは、彼らに向いてこう言った。

「俺か？ 俺はス・ノーマン・パー。見ての通りの雪だるまだ」

名乗ったス・ノーマンは、彼らにゆっくりと近づき始める。

「雪だるまさんも誰かにやられたんですかあ？」

「…俺は、あのジャガイモ小僧とその家族にやられたのさ」

「ジャガイモ小僧…？ まさか！？」

「察した通り。野原しんのすけにだ…」

殺気が籠った声に、すぐに武器のある者達は構える。

この殺気に、かなりの恨みがある事が全員に伝わった。

「あの家族はいねえみてえだが…まあいい。てめえらを倒した後でも、な」

そう言うと、グローブのついた腕をこちらに向けた。慌てて身構えると同時に…。

グローブが飛んだ。

「ごはっ！！？」

ギロロの顔面にめり込み、壁に激突した！

「ギロロ！？」

「てめっ！ ドッカーンッ！！！」

キッドの空気砲がス・ノーマンに炸裂…せずに後ろに当たり、そこにあったパソコンは壊れていった。

「なにっ！？」

「おせえおせえ！」

ローラースケートによって、スイスイと部屋を滑るために、攻撃が当たらなかったのだ。

「ちっ！ このっ！」

「当たれえ!!」

「はっ!!!!」

のび太やスネ夫、ジャイアンとガルルも加わり、連射するが…。

「あゝらよつと!!」

ローラースケートを巧みに使い、かする事も無く回避された。

「クソ! 速い!!」

「拙者にお任せを!!」

「あたしも!!」

ドロロと小雪が、目にも止まらぬ速さでス・ノーマンに追いつく!

「あ!??」

「もらった!!」

「えいつ!!」

二人は手裏剣やクナイを何本も投げ、ス・ノーマンに刺さった! やったと思った瞬間!

刺さったクナイと手裏剣は凍りつき、ス・ノーマンの体内にズズッと吸い込まれていった。

「「なっ!?!」」

「雪だるまにそんな攻撃が効くとも思っただけ?」

そして体内から先ほどの手裏剣とクナイの先端を出し、二人に向ける!

「お返しだ！」

そして次々と凍った手裏剣とクナイを撃ち出した！

「えっ！？」

「くっ！？」

瞬時に小刀と小太刀を抜き、次々と向かってくる物を弾き返していく。

「やめろお！ アクション…！」

近づいたアクション仮面が両手を構え…。

「ビームッ！！！」

黄色い光をス・ノーマンに直撃させる！

身体中にビームが浸透しているが、ス・ノーマンは気にも止めない。

「効いてない！？ くっ！」

アクションビームを止めたと同時に、空気砲やミサイルが発射され、直撃する。

しかし空気の塊もミサイルも触れた瞬間、氷の塊となってしまった。

「ミサイルもダメか…！」

「空気砲もダメだ！ どうすんだよ！？」

「アオオオオオオンッ！！！」

唐辛子エキスを飲んだドラニコフの炎が、ス・ノーマンに向かう！

「そうか！ 雪だるまなら炎で溶け…」と思うかい？」なにっ！  
「？」

マタドーラの自信満々な言葉を、鼻で笑った。

「俺の身体の雪は - 1000 の超低温… そんじょそこらの炎なんかじゃ…」

「あれ？ ドラニコフの炎は確か10000 くらいあつた様な…？」

ドラリーニョの言葉を聞いた瞬間、すさかずス・ノーマンは逃げ回る。

「あつ！？ 逃げた！」

「きたねえぞデメエ！ 10000 なんてよ！」

「アウ…」

そういつている間にも、必死に逃げ回っている為か、炎に全く触れることなく移動していた。

「チクシヨウ！ 当たれば一発で終わるんだろっに…！」

「一発… 閃いたでアール！ 親友達よ、来てくれ！」

キツドの号令に、ドラえもんズの面々が集まった。

「どうしたドラメツド！？」

「いい方法があるでアール！ これをやればあいつに炎を当てられるでアール！」

「どんな方法です？」

「それは…」

ゴシヨゴシヨと小さい声で話し、自分の考えを話した。

「…いいですね！ やりましょう！」

「さんせー！」

「俺もだ！」

「アウアウッ！」

「もちろん俺もだぜ！」

作戦を聞いたドラえもんズは早速、準備をし始めた。

「ドラリーニヨ！ 準備は！？」

「バッチリだよ！」

並べてある数個のサッカーボールを、いつでも蹴れる様に準備する。

「よし…皆！ 伏せるでアール！」

「えっ！？ なんで！？」

「何か考えがあるのだろう…伏せよう」

全員が伏せた事を確認した瞬間、ドラメッドは叫んだ！

「ドラリーニヨ！」

「わかった！」

三個のサッカーボールを、ス・ノーマンに蹴り飛ばした！

「はっ！ そんなもん凍らせてやるよ！」

「ドラニコフ！ 今だ！」

「アウツ！ アオオオオオオンッ！！！」

蹴った三個のサッカーボールに、ドラニコフの炎が纏う！

「なに！！？」

慌てて高速で移動し、全てかわした。

「あぶなっ！！！」

「おっと！ まだ…！」

「終わりじゃ…！」

「ねえぜ！」

後ろに回りこんでいたキッド、マタドーラ、王ドラがそれぞれ構える。

一つは空気砲で、一つはひらりマントで、最後はヌンチャクで跳ね返した！

「な、何だとっ！！？」

体制が整っていない為か、回避する事が出来なかった。

一つは顔に、あとの二つは腹部に直撃した！

「アチャアチャアチャ！！？」

「喰らうでアール！」

暑がり、苦しんでいるス・ノーマンを尻目に、ドラメッドは巨大化した拳を打ち込む！

「ぶへえ！！？」

見事に命中すると、凄まじい勢いで壁に衝突した！

「アオオオオオオンッ！！！」

止めと言わんばかりに、ドラニコフの炎がス・ノーマンを包む！

「ち…ちくしょ…う！ この俺が、ジャガイモ…小僧に…復讐も…出来ずにっ！！」

恨みが籠った言葉を述べながら、雪は溶けていき、とうとう液体になっ…ていった…。

「やったか」

「へへっ！ 俺達に勝つなんて100年はええぜ！」

「じゃあ、怪我人もいなかった事ですし、早く行くですう！」

「「「「「おあ！」「」「」「」

扉を開け、それぞれ入っていく中…。

「お、おい…俺を、忘れてるぞ…！！」

「…ギロロ、ドロロみたいね」

「全く…」

壁にめり込んだギロロを連れて行く、夏美とガルルの姿があったとか…。



第十三話：復活！ - 100 の雪だるま！（後書き）

第十三話、いかがでしたでしょうか？  
ちよつと短めですいません…。

次回はガルル小隊のあいづが出て来ますので、お楽しみにして下さい！

是非、ご感想とご意見をお願いいたします！

**第十四話：最後の刺客と操られし者達、明かされし正体（前書き）**

ス・ノーマン・パーを倒し、次の部屋に進む一向。  
次に待ち受ける者は…？

#### 第十四話：最後の刺客と操られし者達、明かされし正体

「どうするであります?」

「どうしようか?」

ケロロとドラえもんは、モニターに映ったのび太達を見ながら呟いた。

「もうすぐ、この部屋に来るよ?」

「大丈夫でありますかねえ…」

同時にタメ息をつくが、ケロロは顔を横に何度も振った。

「まっ、大丈夫でありましょう! 最後の一人がいますから!」

「…そうだね」

二人は最後の刺客を信じながら、モニターを見るのだった…。

〈ブリッジルーム・前〉

「…どうやら、次の部屋にいるみたいだ」

部屋にあった艦の図面を見ながら、全員に向けてガルルは話した。

「次の部屋に軍曹が…！」

「ドラえもんが…！」

気を引き締め、扉に手をかけようとした時だった。

「むっ！？ トイヤツ！」

何本もの手裏剣が、ドロロに放たれた。

瞬時に全て叩き落とすと、手裏剣が放たれた方向を睨んだ。

「何奴！？」

「……………」

後を追うように視線を向けると、その先にいたのはケロン人だった。そのケロン人は水色に近い色をしており、ドロロの様に目以外を布で覆っていた。

不気味な事に、体の半分が機械の様にコーティングされていた。

「お、お主は…！」

「くつくつくつ…会えて嬉しいぞ、ゼロロ」

驚きで目を大きく開くドロロを余所に、そいつはガルルにゆっくりと近づいていった。

「お前は“ゾルル”！？ 何故お前が！？」

「隊長…悪いな。だが俺は、どうしてもこいつと決着をつけたいのだ」

ゾルルはそう語ると、ドロロに近づきだした。

「さあ、ゼロロ。今度こそ決着をつけようぞ！」

「…一つ、聞いてよいでござるか？」

「…何だ」

目を閉じていたドロロは開くと、意を決した様に口を開いた。

「どちら様でござる？」

「…えっ？」

素っ頓狂な声をあげ、ゾルルは硬直した。

「ド、ドロロの奴、また奴の名前を忘れたのか…」

「そうとうドロロ先輩にとって、影が薄いんですねえ…」

硬直したのを見て、慌ててドロロは言葉を続けた。

「ああ！？ ゴメン！　すぐに思い出すから！　えゝつと…ダササくん…？」

「ダ、ダサ…」

その言葉で完全にKOとなったゾルルは、そのまま再起不能となったのだった…。

くブリッジく

「ちょっとお！？ 何メチャクチャ簡単に負けてんの！？」

モニターに向かって一人むなしく叫ぶ。

「どうするケロロ君？ ガンプラ達を使う？」

「それはな…ペコポン侵略する時に兵力はないといけないし…」

渋りながら言うと同時に、何かを決意したような表情で椅子から立ち上がった。

「しょうがないであります。ハイグレ魔王殿達のお三方に手間をかけさせる訳にはいかないであります」

「じゃあ…？」

「我輩達でやるであります。もしもの時は、お三方に任せるって事で」

ブリッジの扉の方向に、二人が顔を向けたと同時に開いた。

「軍曹！」

「ドラえもん！」

冬樹、のび太を先頭に次々とブリッジへと足を踏み入れた。

「よく来たでありますな」

「ケロロ！ これまでだぞ！」

一斉に全員が構え、真ん中に移動した二人を睨む。

「とりあえず…ドラえもん殿」

「分かった。えいっ」

ドラえもんは、懐から出した時計についているボタンを押した…。

「…えっ？」

冬樹とのび太の二人は、何も起こらなかったのを不思議に思った。しかし皆を見た瞬間、異常さに気が付かされる事となった。

「み、みんな！？ どうしたの！？」

そう、自分達の二人以外、誰も動いていなかった。まるで石にでもなったかの様に、硬直していた。

「気絶？ いや違う！ どうなって…！？」

「コレでやったんだよ」

持っていた時計の様な物を、見せびらかす様に見せる。

何だか分らない、といった表情の二人に説明をしはじめる

「これはね、ウルトラタイムウォッチっていうんだ」

「その名の通り、時を止める事が出来る秘密道具であります」

この説明を受けた二人は、冷や汗をかいた。

「で、でも、どうして僕等は動けるの!？」

「それは君達が他の人達よりもボク等の近くにいたからさ」

事実、時の止まった皆より二人の方が近かった。

「予定外ではありますが…まっ、二人なら倒せるでありますからな」

ビームライフルを構えながら、ケロロは呟いた。

「そうだね…いくよ、のび太くん」

右手に空気砲、左手にジャンボガンを構え、距離を置く。

「くっ!」

「戦うしか…ないの!？」

のび太はショックガンを二丁。

冬樹は家から持ってきていたケロン軍の秘密兵器、ケロボールを取り出す。

「ゲロツ!？ ケロボール…! 持って来ていたのでありますか!」

「当たり前だよ。僕だって戦わなくちゃと思ってね…今まで使う暇なかったけど」

しばし沈黙後、戦いは…始まった。

「ゲロッ！」

ライフルから放たれるビームは、真っ直ぐ冬樹に向かう！

「うわっ！？」

慌ててケロボールについているスイッチの一つを押すと、その場から消える。

同時にビームが着弾し、小規模の爆発を起こす！

「ちっ！ 移動したでありますか！」

苦々しく吐き捨てると、周りを警戒し出した。

「えいつ！」

「っ！？ そこかっ！」

後ろから放たれた電撃を間一髪かわし、再度ビームライフルの引き金を引く。

それを転がって回避したのを見届けると、体制を立て直した。

「ほう、さすがは冬樹殿。悪運が強い事で…」

「軍曹もね…」

笑いながら二人は話すと、戦いを再開するのだった…。

「あつちも盛り上がってるね。それじゃ、こつちも…」  
「始めよう！」

先手はのび太だった。

駆け出した瞬間に一斉に二丁のショックガンの引き金を引く！

「おっと！ 危ない！」

しかしドラえもんはそれをあつさりとかわすと、ジャンボガンをつつ！

「うわっ！」

走り回る事で何とか回避するが、次々とジャンボガン、空気砲を交互に撃ち続ける！

「あわわっ！！？」

「どんどんいくよ！」

走り続けるのび太には、攻撃をする隙がなかった。

走った後の地面には、焦げた大きな穴や、ヒビが入り、正確さに撃たれた事を物語っていた。

「ど、どうしよう…！」

「さあ！ のび太くん！ どうするんだい！」

撃ち続けながらドラえもんは叫んだ…。

「うわぁっ！！！」

「どうしたでありますか？ 冬樹殿…」

蹴り飛ばされて壁に激突した冬樹を、見下す様に言った。

「う、うう…！！」

「フィニッシュで…あります」

銃を構えるケロロを、冬樹は腹を片手で押さえつつ見る事しかできなかった…。

「冬樹くんっ！？」

そしてのび太は、冬樹の危機的状況に気づいた。

何とか出来ないかと考えるが、それにはドラえものの攻撃を止める必要があった。

たとえ撃つてたとしても、隙が出来た自分に容赦なく弾が降り注ぐであろうから…。

（何か…何かないか！？）

必死で考える中、ふと上を見上げた。

するとドラえものの真上に、モニターがぶら下がっているのを確認

した。

「あれだっ！」

素早く二丁のショットガンを連射すると、モニターを吊らしている二本の棒に命中させた！

すると、大きな軋む音を出しながらモニターは…落ちた。

「なっ！？」

いち早く気づくと、撃つのを止めてその場を離れる！

落ちたモニターは凄まじい衝撃を艦全体に響き渡らせた！

それは離れた場所にいるケロロを転ばすには十分だった…。

「うおっ！？」

「っ！ 今だ！」

予想外の振動に耐えきれず、見事にケロロは転んだ。

すかさずケロボールのスイッチを、転がりながら押した！

「ゲロオッ！！！？」

発せられた迸る稲妻は、ケロロを包み込んだ！  
黒こげでアフロ化すると、地面に倒れていった。

「やったあ！」

ガッツポーズをして、冬樹は喜ぶのだった…。

「ぐっ！ まさかモニターを撃ち落とすなんて…！」  
「ボクもたまには、頭を使っただよ」

転がり倒れたドラえもんは、ショックガンを突き付けながら呟いた。

「やるじゃない、のび太くん。でも…」  
「でも？」  
「まだ甘い！」

瞬時に短い脚でショックガンを蹴り飛ばす！

「あっ！？」  
「やあっ！」

もう一撃加え、右手にも持っていたショックガンを吹き飛ばす！

「これがホントの頭を使う、さ」  
「う、うう…！」

額に空気砲を突き付けられ、のび太は冷や汗をかく。

「ケロロくん。そっちは？」

「何とか…」

黒こげになっても気絶していなかったケロロは、拾ったビームライフルを突き付けていた。

油断しきっていた冬樹は、見事に逆転されてしまったのである。

「それじゃあ…！」

「止め…の前に。ドラえもん殿」

「分かってる」

ウルトラタイムウォッチを取り出し、ボタンを押した。  
その瞬間、時間が再び動き出した。

「えっ…あれっ!？」

「な、何で冬樹がボケガエルに…!？」

「何でのび太がドラえもん…!？」

「あ、あの一瞬で何が…!？」

不思議で堪らないという顔を、ギロロ達はしていた。  
王ドラは気づいた表情をした。

「まさか…! ウルトラタイムウォッチを!？」

「そうかつ! それで時間を止めていたのか!」

「大当たり! さすだね皆!」

ニツコリと笑いながら、ドラえもんは続けて話した。

「見て分かると思うけど、動かないでね?」

「くっ…! ドラえもん、てめえ!」

「こちらと同じくであります」

「お、おじさま…！」

この状況では、さすがに動く事は出来なかった。  
すると突然！ブリッジの天井が開き出した。

「んっ！？」

「なにっ！？」

大きな音を出しながら完全に開くと同時に、台が降りてくる。  
その台には三人の人物が乗っていた。

三人の内の二人は知っている顔ぶれであった。

「ハイグレ魔王！」

「アチモフ！」

名を呼ばれた二人は、薄ら笑いをしていた。

もう一人は、フードで身を包んでいた為、姿は分からなかった。

「ちっ！ さては貴様だな！ 俺達の事を話した奴は！」

「お前は一体！」

「何者でござるか！？」

ケロン人の三人の言葉に、フードで身を包んだ人物は…。

「クククツ… ガーラガララッ…！！」

笑いだした。

そしてその独特の笑い方に、すぐに気付いた。

「貴様は…！」

「まさか…！」

笑いながら左手でフードを投げ捨てた。

その人物は、体には赤いスーツを着用していた。

右腕は改造したのか、キャノン砲の様なものが付いている。  
顔はまるで蛇の顔であった。

ケロン人達は知っていた。

自分達の天敵であるその存在の名を…。

「貴様は…ヴァイパー！？」

ギロロの叫びが、ブリッジに響き渡ったのだった…。

**第十四話：最後の刺客と操られし者達、明かされし正体（後書き）**

十四話、完成しました〜！

お待たせして申し訳ありませんでした！ 書く暇がなくて…。

それはさておき、次回にはさらなる驚愕の事態に…！？

次回も是非、見てくださ〜い！

ご感想、ご意見もお待ちしております！

第十五話：真実が畏か！？ 隠されし間へ！（前書き）

遂に行方不明だった者達を操っていた三人…。

その最後の一人はヴァイパーだった！？

果たして何故…！？

## 第十五話：真実が罨か！？ 隠されし間へ！

「久しぶりだな！ 愚かなケロン人共よ！」

「…久しぶり、だと？」

「その通り！ 再び弟の恨みを晴らしに来たのさ！」

その言葉でギロロは思い出した。

以前倒したヴァイパーの兄が襲い掛かり、これを返り討ちにしたのを。

卑劣な罨を仕組み、ケロロ小隊を倒そうとした人物だったのを。

「あの時の…！」

その時を思い出したのか、ドロロは握り拳を思いきり作った。怒りが込み上がっていたのか、殺意すら感じる。

「悔しいか！？ ガッラガラガッ！！！」

「さぁお前等！ そいつらに止めを刺すっショ！」

アチモフの叫びに反応し、ケロロとドラえもんは武器を構え直す。

「ド、ドラえもん…！」

「軍曹…！」

「……………」

終始無言のまま、二人の言葉に耳も貸さずにいた。しかし冬樹とのび太は違和感を感じた。

ドラえもんもケロロの瞳は、いつもと同じ優しい瞳をしていたから

である。

「…冬樹殿」

「…のび太くん」

「…!?」

「しっ！ 喋らなくていいからよく聞いて…」

周りに聞こえない程の小さな声で、二人は喋り出した。話の中、のび太と冬樹は意外そうな顔をしばししていた。そして終わると同時に顔を引き締めた。

「何をしている!? 早くそいつらに止めをささねえか!?」  
「さっさと始末するっ ショ！」

怒号が響く中、ケロロとドラえもんは向きを変える。  
同時にアチモフとヴァイパーに武器を放った！

「なっ!?」  
「うおっ!?」

いきなりの攻撃に対処できず、アチモフは吹き飛んで壁に激突した！  
隣にいたヴァイパーは、右腕のキャノン砲が爆発すると同時に吹き飛んだ！

「二人共！」  
「さっきの話の通りに頼んだよ！」  
「…分かった！」  
「すぐに戻ってくるよ！」

冬樹とのび太は、目を丸くしているギロ口達の元に駆け出した！

「みんなっ！」

「お、おいっ！　どうなってるんだ！？」

「訳は後で！　今はこの前の部屋に！」

二人はギロ口達を抜き、扉に向かって駆け続ける！

「そうはさせないわ！」

行く手を阻む様に、ハイグレ魔王が上から現れる！

「そうはさせん！」

「フンッ！」

「こんにやろっ！」

アクション仮面が飛び蹴りを喰らわせ、蹴り飛ばし…。

ガルルの構えたビームライフルから撃たれたビームが直撃し…。

ジャイアンの空気砲で、さらに吹き飛ばす！

そのまま壁に激突し、床に崩れ落ちる。

しかしすぐに起き上がり、衝撃で割れた仮面の中から三人を睨む。

「ふふ…いきなりやってくれるわねえ。お三方？」

「こ、こいつ、立ちやがった！」

「…どうやら、今までの奴よりも手強い事は確実の様だ」

「みんな！　奴は我々が食い止める！　よく分からないが行くんだっ！」

背を向けながら発した言葉に、残りのメンバーは従うしかなかった。

「分かった！」

「戻るまで無事でいろよ！」

去って行った彼等を、追わせない為に三人は扉を塞いだ。  
それを見たハイグレ魔王は鼻で笑った。

「フンッ！ とつと倒して通らせてもらっわよ？」

「悪いがここは…」

「通行…！」

「止めだぜえ！」

この言葉を火ぶたに、三人は戦闘を開始するのであった…。

〈ブリッジルーム・前〉

「ここだっ！」

隣の部屋に着いたと同時に、二人は壁を探り出した。

「おいっ！ 何をしてるんだ！？」

「ちよっと待って…！ のび太君！ これっ！」

触った壁の内、1ヶ所の壁が開く事に気付く。

すぐに開けると、中に赤いスイッチが設置されていた。

「押して！」

「うんっ！」

頷いて押した直後、部屋が揺れ始める。  
そして彼等は気付いた。

真ん中の床が動いている事に。

「うおっ!？」

「な、何だっ!？」

慌てて真ん中の床から離れると、直径3メートル程の穴が出来た。  
暗い穴には地下へと続く階段があった。

いち早く駆け出したのび太と冬樹は、階段を下りて行った…。

「あっ、冬樹!？」

「のび太! 待てよっ!」

残りのメンバーは二人を追いかける為に、階段を下りて行った…。

く地下く

薄暗かった階段を抜けた彼等の目の前は、広い空間があった。  
その空間はとても広く、真ん中に牢屋がある以外に何もなかった。

牢屋の中には、赤い半袖に黄色い半ズボンを着用した少年が眠っていた。

「いた！ あの子だっ！」

「しんのすけ君だ！」

「なにっ!？」

冬樹とのび太の言葉に、全員が驚愕した。

「どういう事だ!？」

「…実は、ドラえもとあのカエルさんに頼まれたんだ」

二人はあの時の状況でした話を始めた…。

〈回想〉

『いいかい？ この前の部屋の壁に、一ヶ所だけ開く所があるんだ』

『それを探し、地下にいるしんのすけ殿を救出するのであります』

『しんちゃんを逃がさない様を守ってるガンブラに気を付けるんだ』

よ…のび太くん』

『冬樹殿なら出来るであります…頼むであります』

〈回想・終了〉

「……って言われたんだ」

「お前等、罾かもしれんのにここに来たのか!？」

叫んだギロロは、二人に歩み寄った。

「だ、だって……」

「元に戻ってるか分からないんだぞ!？」

「でも……!」

「言い争っても仕方ないだろ!？ とにかく、あの坊主を助けようぜ!」

そう言っでキッドは、牢屋まで走って行った。

続いて冬樹とのび太も駆け出して行ったのを見て、残りも走り出した。

後から来たメンバーが牢屋に着くと、キッドが扉に空気砲を放ちまくっていた。

「ドッカーンッ! ドッカーンッ! ドカドッカーンッ!……!」

全て命中したが、扉はまるでビクともしなかった。

「ダメか！」

「っ！？ ひらりっ！」

悪態づくキッドを庇い、マタドーラがひらりマントで飛来してきた  
ビームを跳ね返した！

敵だと気付いた彼等は、すぐに戦闘態勢をとる。

「ちっ！ 外したかつ！？」

「アホ！ 行くぞっ！」

身構える彼等の前に現れたのは、二機のガンプラだった。

「…何だ、たったの二体か！ あはははっ！ びっくりして損しちゃった！」

「何だと？ …おい、ガンダム」

「分かつてる。奴からやる」

スネ夫が笑っている間に二機はバーニアを吹かし、高速で迫った！

「スネ夫！ 危ない！」

「えっ…！ うわっ！？ 来るな来るなあ…！！」

気付いたスネ夫は、がむしやらにショックガンを連射した。  
しかし焦っている為に一発も当たることなく、接近を許してしまった。

「おらぁ！」

勢いづいた蹴りは、スネ夫を軽く蹴り飛ばした！  
白目をむき、泡を出して一瞬の内に気絶した…。

「ス、スネ夫！？」

「てんめえ！？」

「ちっ！」

二機はすぐに後ろに下がった。

その為に攻撃はかすりもしなかった。

「おっと！ 今までのガンプラと！」

「同じと思ってもらっては困るな！」

この二機は、ただのガンプラではなかった。

一機は白を強調した、連邦の白い悪魔と呼ばれる最強の機体“ガンダム”。

もう一機は脚部がないにもかかわらず凄まじい性能を持った、ジオン軍の最高傑作“ジオング”だった。

「確かに、今までとは違う…」

「でも、俺達には勝てないな！」

「そうだよ！」

最初に接近戦の得意なドロロと小雪が攻撃を仕掛けた！

「何の！」

「甘い！」

小刀をビームサーベルで受け止め、鏢迫り合いが起こる！  
一方ジオングには接近戦の武装は無い為、小雪の攻撃を腹部の二連メガ粒子砲でけん制する。

「ドロロ！ 小雪どけ！ ドッカーンッ！ ドッカーンッ！」

瞬時にその場を二人は離れ、空気が二機を襲う！

「ぬおっ！？」

「ぐっ！？」

直撃をしたが、装甲が厚い為に効果は仰け反らせる位しかなかった。  
しかし、それだけでも十分だった。

「今だ！！！！」

「ええええええいつ！！！！」

「いつくぜえ！！！！」

夏美のビームサーベルで、ガンダムの左腕を斬り飛ばし…。  
すぐにのび太のショットガンが直撃し、頭部が爆発する！

ギロロのビームライフルから撃たれたビームは、胴体部に直撃し…。  
ドラメッドの巨大化した拳が炸裂した！

彼等のコンビネーションによって、一瞬で二機は爆発した！

「…ふっ」

「決まったわね」

「そうでアールな」

「息がピッタリでしたね」

自分達の成長を感じたのか、笑みが浮き出た瞬間。

「まだだ！」

「……「！？」」「……」

煙の中から叫びが聞こえたと同時に、二本のビームが彼等を襲う！

「きゃあっ！！？」

「ぐおおっ！！？」

二本の内の一本は、ドラメツドの腕を貫通し…。

最後の一本は夏美の腹部を貫き、二人は吹き飛んだ…。

「な！？ 夏美！？」

「夏美さん！？」

「姉ちゃん！？」

「……「ドラメツド！！」「……」

円を描きながら吹き飛んだ二人は、地面へと倒れた。

「ふっ！ 我々を甘く見ては困るな」

「……！」

煙の中から出てきたのは、頭部と左腕が無くなったにもかかわらず起動しているガンダム。

そして胴体が吹き飛んだものの、頭部は脱出できた為に活動するジョングだった。

「…貴様あ！！！」

「許しません！！！！」

「仇をとってやる！！！！」

「許しません！！！！」

自分達の目線にいる二機に叫ぶと、そのまま駆け出す！

斬りかかって来た小雪を避け、持っている小太刀をビームサーベルで斬り飛ばす！

「あつ！？」

「！！！！」

ビームサーベルを振り下ろす！

…が直前で受け止められた。

「！？」

「このっ！！」

同じくビームサーベルを持ち、受け止めたギロロが小雪の前にいた。顔が破壊されているにもかかわらず見えているのか、そのまま力を入れる！

「ふんっ！！」

「！！！！」

しかしあっさりと弾き飛ばされ、即座にビームライフルの連射を喰らう！

「！！！！！！！！！！」

次々と身体中に穴が開くと、放電を起こしながら地面へと崩れ、爆散した…。

「ドオツ！ カアアアアアアンツ！！！」  
「死ねえ！」

フルパワーで撃った空気砲は、ジオングの口から放たれたメガ粒子砲とぶつかり合う！  
すぐに変化は現れた。  
放たれた空気が、徐々に押し返していく！

「な、なぬう！？」  
「吹っ飛べえええええつ！！！」

完全に押しかえしたと同時に、ジオングは壁まで吹き飛ばした。

「アチヨオツ！！」  
「オラア！！！」  
「アオオオオオオンツ！！！」

更に王ドラの蹴り、マタドーラの拳、ドラニコフの炎の追撃を喰らう。

瞬く間に爆発し、頭部だけのジオングは地面に転がっていった…。

「夏美！」

「ドラメッド！」

「スネ夫！」

三人の元に駆け寄ると、安否を確かめる。

「心配ないよ。ボクがお医者さんカバンを使って手当てしておいたよ」

「命に別条はないみたい」

カバンをしまいながらドラリーニヨと冬樹は言った。

全員がホッとしていると、キッツと何かが開く音が聞こえた。

牢屋の扉が開いたのだ。

「おっ！ 開いたぜ！」

「早くしんのすけ君を！」

牢屋にキッドが入ると、中で横になっているしんのすけを抱きかかえる。

「さあ、とつとと上に戻ろうぜ！」

「「「「「おお！」「」「」「」

マタドーラを先頭に階段を上がって行った。

小雪が夏美を、ドラリーニヨがドラメッドを背負いながら…。

「…ふ、ふふ…馬鹿め…！」

あの猛攻の中で放電しつつも、何とか無事だったジオングが笑いながら彼等を見つめていた。

「計画…通りだ…！ あ、とは…まか、せ…るぞ…！」

それだけ言い残すと、ジオングはとうとう爆発していった…。

「…了解」

キッドに抱えられているしんのすけが、とても小さな声で呟いた。  
そして顔を伏せたまま笑みを浮かべていた事を、階段を上っている  
彼等は知らない…。

**第十五話：真実が畏か！？ 隠されし間へ！（後書き）**

第十五話、いかがでしたでしょうか？  
期待を裏切っていないければいいのですが…。  
次回は牢屋から助けたしんのすけが…！？  
ご感想、ご意見もお待ちしております。

どうぞ、次回もお楽しみに！

**第十六話：アサシンの対決！？ 現れる助っ人は大怪盗！（前書き）**

地下に捕らえられていたしんのすけを救出した一同。  
しかし、しんのすけの様子が…！？

第十六話：アサシンの対決！？ 現れる助っ人は大怪盗！

くブリッジく

「はあはあ…！」

「ぐ…！」

「ぜえぜえ…！」

「はあ、はあ…しづとい…！」

下の戦いが終わった頃…。

上のブリッジでは、真ん中で対峙しているアクション仮面、その両隣にいるガルルとジャイアン。

三人の前で息切れをしているハイグレ魔王の姿。

「ひ、ひいい…！」

「……………」

台の上では、空気砲を突き付けた状態のドラえもと、大量の汗を身体中の中から出しているアチモフ。

「ゲ、ゲロオ…！」

「ガくラ、ガラガラッ…！ ぜえ、ぜえ…！」

同じく台の上で倒れているヴァイパーと、傷だらけになりつつも立っているケロロの姿があった。

「お、お前等は、いつの間に洗脳が解けていたんだッショ！」

突然、アチモフは二人に疑問をぶつけた。  
その疑問にドラえもんは口を開く。

「…のび太くんとあの子に、武器を突き付けた辺りだよ」

ドラえもんの言葉に、ケロロが続けて喋り出した。

「そして少ない時間で考えたであります。もし、しんのすけ殿を人質にされたら…」と

「ボク達は気付かれない様に話し合った。そして…」

「あの二人に頼んだ…」という訳だな？」

睨むヴァイパーに、二人は頷く。

「軍曹！」

「ドラえもん！」

「…さあ、もう君達の負けだよ」

勢いよく開いた扉から入って来た仲間達を見て、彼等は笑った。

「しんのすけ君は助けたよ！」

「おうよっ！ さあ、アチモフ！ 諦めろ！」

「貴様もだ！ ヴァイパー！」

「ハイグレ魔王！ 降参しろっ！」

勝利を確信した彼等の叫びに、三人は…。

「く、くっくっく…！」

「アハッハッハッハッ！！」  
「ガッラッガラガラッ！！」

笑った。

今までにない、大きな声で。

「な、何で笑うんだよ！」  
「馬鹿めツシヨ！ やれいっ！」

この言葉に、眠っていた筈のしんのすけがキッドを踏み台にして跳び上がった！

「なっ！？」  
「ええっ！？」

台に乗ったしんのすけは、ドラえもんを一瞬で蹴り落とす！  
残ったケロロに駆け出し、左腕から刃が飛び出る！  
呆然としているケロロを斬り、下に蹴り落とした。

「うわあっ！！！？」  
「ゲロオッ！！！？」

地面に激突すると同時に、駆け出して来た冬樹とのび太に抱きつかれた。

「軍曹！」  
「ドラえもん！」  
「し、しんのすけ殿…じゃ、な…い」  
「だ、誰…なん、だ…」

彼等を見下す様な眼で、しんのすけは見ていた。  
そして驚きの表情のままの彼等に言った。

「俺があのもた言葉で倒せたとも思うのか？ ゼロ口…！」  
「っ！？ ま、まさか…！」

しんのすけの変装をとった人物に、ドロ口は目を大きく見開いた。  
その人物は、ドロ口の一言で戦闘不能となった筈のゾルルだったからである。

「ど、ど…ゆ事…！？」

「つまり、あんた達の洗脳が解けるのは予想済みだったわけよ」

ニヤリと笑うハイグレ魔王の続きに、アチモフが喋り出した。

「洗脳が解けたら、必ずあの小僧を助ける事は予想済みだったッシヨ！」

「だからこつちも罫を仕掛けたって訳だ」

この言葉に彼等は理解した。

何故、あの言葉だけでゾルルを簡単に倒せたのか。  
そして牢屋に二機しか警備をつけなかったのかも。

「命令とはいえ、ワザと負けたのは辛かったぞ…！」

殺気を身体中から出しながら、ドロ口だけを睨む。

凄まじい殺気に、彼等はたじろぐしかなかった。

「ちょ、ちょっと待て！ それじゃ、本物のしんのすけ君は…！」  
「ガラガラッ…心配せずともいるさ。お前等が行った地下のさらに下にな！」

嫌味な笑みを浮かべると、怒り混じった声が聞こえた。

「話はそれまでにしろ…！！ さっさと奴とケリをつけさせろ…！！」

叫んだゾルルに驚きつつ、ヴァイパーは渋々と言った表情をとる。

「…仕方ねえ。好きにしろ！」  
「ああ…！」

返答すると、顔を扉の付近にたたずんでいるドロロに向ける。

「さあ、ゼロロ。決着をつけようぞ…！」  
「…相、分かった」  
「ドロロ！」

心配そうな顔をする小雪に、ドロロは優しく話しかける。

「大丈夫。必ず…勝つでござる」  
「ドロロ…うん」

甘ったるい空気が流れつつある中、ゾルルの咳払いで引き戻される。歩きだしたドロロは一定の距離で止まると、刀を構える。ゾルルも同様に機械化している左腕から、仕込まれた刀を構える。

この状態が数分続き、そして…。

「「はあっ!!」」

刃が交わった。

鐔迫り合いをあっさりと終え、ドロロは何本もの手裏剣を投げる！

「くだらん…」

滑る様に軽くかわすと、技の態勢をとる！  
それを確認すると、ドロロも技を放つ！

「「零次元斬っ!!!」」

繰り出された剣技は、同等の威力の為に相殺する！  
それによって生まれた衝撃は、両者を吹き飛ばす程だった。

「ちっ！ さすがだぜロロ…！」

「くっ！ 手強いでござる…！」

体勢を立て直し、再び激突する！

仕込んだ刀を振り下ろし、ドロロを連続で斬りつける！

「どうしたぜロロ!? この程度か!?!」

「くっ…！ はあああああっ…！！」

押し始めたゾルルから逃れる為、刀が振り下ろす直前に横に跳び、連撃から逃れる！

「むっ！？」

「もらった！」

お返しと言わんばかりに刀を構え直し、斬りかかる！  
あっさりと受け止められ、再び罅迫り合いが起こる。

「ぐぐっ…！」

「ぬぬっ…！」

どちらも一步も退かず、押し合い続ける。

埒が明かないと考えたのか、ドロ口は後ろに下がり、息を整える。

「はあ、はあ…！」

「さあ、行くぞ！」

またも斬撃の嵐が始まった。

両者は斬りかかる、受け流すを何度も繰り返す！

「くっ…！（長期戦は不利…ならば！）」

「死ねえっ…！」

振りかざす一瞬の隙を突き、斬撃から逃れる。

そして片手を上げ、神経を集中させる。

この一撃で決める為に。

「ドロロ忍法！ 究極秘奥義！」

「っ！？ 零…！」

気付いたゾルルも自身の最大の技を出す構えをとる。  
そして…放った。

「流星十字手裏剣っ！！！！！」

「次元斬っ！！！！！」

零次元斬によつてに切り開かれた次元に、光り輝く流星十字手裏剣は吸い込まれていった…。

「フンツ、残念だったな！ ゼロ…！？」

皮肉混じったゾルルの言葉は、続けて言われる事はなかった。  
何故なら…。

「…甘い」

ドロロの蹴りを受け、吹き飛んだ為である。

空中で一回転して着地し、蹴られた腹部を抑えつつドロロを睨んだ。

「あの技は…単なる罠だったか…」

「その通りでござる」

最大の技が次元に吸い込まれた瞬間、横から蹴り飛ばしたのだった。  
体制を立て直し、手の甲から仕込まれた刀を出して向ける。

「…決めるでござるっ！」

「こいつ！ゼロロオツ！！！」

両者は跳び上がる。

目の前の者を倒すために。

互いにぶつかり合い…小刀と刀が互いに交差、そして一閃した。

両者は同時に、地面へと着地した。

そのまま硬直状態が続き、倒れたのは…。

「…ゼ…ロ、ロ…！！！」

ゾルルだった。

憎しみが込もった言葉を残しながら、倒れていったのだった。

「峰打ちでござる…しかし、危なかった」

真ん中から折れた小刀を、寂しい目で鞘に戻した。

「くっっ！役立たずめ！」

地団太を踏むヴァイパーに、勝負を見ていた全員は視線を移す。

「だが！こつちにはガキが手中にあるって事を忘れるなよ！？」

「その通りッシヨ！おとなしくするッシヨ！」

変わらない事態に、絶望という言葉が彼等の頭に響き始めた。  
しかし、ある乱入者によって事態は大きく傾いた。

「それはこっちのセリフだ！ アチモフ！！」  
「っ！？ なにっ！？ 誰ッシヨ！？」

この空間に突如として響いた声に、全員が周りを見始めた。

「私だっ！」

台の上にある機材の上に、いつの間にかネコ型ロボットと同じ形の人物が立っていた。  
その人物を見て、ドラえもんズとアチモフは驚愕の表情を浮かべていた。

黒いシルクハット。

黒い服に黒いマント。

口元に生えた髭。

そして手に持つ黄金のステッキ。

彼の姿を知っている者は、こう叫んだ。

「『『『『『ドラパン！！！！』』』』』」  
「っ！？ ドラパン！！！？」

ドラパンという一言に、ドラメットは気絶から目覚め、ドラリーニヨの背から降りた。

「久しぶりだな！ ドラえもんズ！」

「な、何でお前がここにっ！？」

それに答える為にか、機材から一気に跳び、台を降りた。

「未来でアチモフが逃亡したと同時に、ドラえもんズであるお前達の姿が消えた…」

彼はドラえもんズに歩み寄りながら、話し出した。

「疑問を抱いた私は、ドラえもんがいるこの時代に来たんだ。何か知っていると思ってな」

近い距離になった為、歩みを止める。

「そして見つけたのさ。この巨大で悪趣味な戦艦を…」  
「悪趣味ゆうなッショー！！」

怒号が聞こえるが無視し、続けて話した…。

「さらに、この戦艦の中にいた少年を…な」  
「少年…！！ まさか！？」

その言葉と同時に、ドラパンの後ろから…。

「ほっほっ！ アクションかめっんっ！…！」  
「しんのすけ君…！」

ドラパンの背から跳び下りた。

そしてしんのすけはアクション仮面に近寄り、足にしがみついた。

「一体何処に…！」  
「この戦艦の一番下の層にいたんだ…」

〈回想〉

「…！ あれは…牢屋、か？」

とおりぬけフープで一番下から侵入した私は、見つけたのさ。  
この少年が牢屋の中で、お菓子を食べているのをな。

「おおっ？ 青いタヌキさん…じゃないね」  
「青いタヌキ…！ まさかっ！」

〈回想・終了〉

「この子に話を聞き、ドラえもんズに何があったのか見当はついた」

「それで、このタヌキさんにたすけてもらったんだゾ」

「そうだったのか…」

「タヌキじゃないぞ、私は…」

シヨンボリとするドラパンだが、すぐに顔を引き締めてアチモフに向く！

「何にしても形勢逆転だな！ アチモフ！！！」

「ぐ、ぐぐ…！！！」

顔を真っ赤にし、悔しそうに歯をギリギリッと鳴らすアチモフを尻目に、残りは冷静だった。

「ふ、ふふ…やっぱり、こうなる訳ね」

「仕方ねえか…」

「ぐっつ！！！」

台の上に乗ったハイグレ魔王は、機材についているスイッチを入れた。

「じゃあねっ」

「なにっ！？」

「えっ！？ ちょっ…！」

スイッチが押された瞬間、ケロロ小隊やドラえもんズ達の身体が、足から徐々に消えていき始めたのだ！

慌てふためくが、遂に顔までそれは起こり、全員が消えていった。敵の姿が消えたのを確認した三人は、一息つく。

「どうするッショ！？」

「この戦艦についたあの機能を使うしかねえだろ？」

「それで倒せなければ…終わりね」

怪しい笑みを浮かべながら、大きな赤い絵の描いてあるスイッチを押す。

決戦は…迫っていた。

**第十六話：アサシンの対決！？ 現れる助っ人は大怪盗！（後書き）**

第十六話、いかがでしたでしょうか？

最後の近くに助っ人：出すの遅っ！ とか自分で思う今日この頃です。

次回は、遂に決戦です…！

厳しいご意見、ご感想をお待ちしております。

## 第十七話：巨大ロボットとの大決戦！（前書き）

遂にアチモフ達を追い詰めたしんのすけ達。

しかし、装置によって光に包まれて消えていった彼等は…？

## 第十七話：巨大ロボットとの大決戦！

〈日向家〉

「冬樹君…やっぱり私も行けば良かった！」

「落ち着いて桃華ちゃん…」

「そうだよ…」

戦艦に乗り込まなかったメンバーは、ただひたすら彼等の無事を願う事しか出来なかった。

「だいじょうぶ。ぜったいに、しんちゃん達はもどってくる」

「そうだよ！」

「…だといいけどね」

マサオが小さな声で呟くが、ネネには聞こえていた。

「もう！ 信じなさいよ！ 男の子でしょ！？」

「いや、ネネちゃん、それは関係ないんじゃない？」

残りのメンバーが話している中、突然、光が部屋を包む！

「えっ！？」

「な、なんだあ！！？」

眩しさに耐えきれず、一斉に目を閉じた。

そして光が収まると同時に目を開けると、そこには…。

「おおっ!!!?　ここどこ!?!」

「ちっ!　俺達を転送したのか!」

「クソッ!　一気にケリをつけようとしたのに!」

戦艦に乗り込んだ筈のメンバーがいた。

「ど、どうしてみんながここにっ!?!」

「あれ!?　こ、ここっでもしかして…?」

「…どうやら家に帰って来たみたいね」

目が覚めたのか、小雪の背から降りた夏美が言った。

「夏美さん!」

「姉ちゃん!」

「大丈夫なのか?」

「うん。なんとかね…」

わき腹を抑えながら言つと、心配しないでと付け加えた。  
呆然としていた皆も、その一言に動き出した。

「み、みんな!?!」

「どうして…!?!」

「そ、それが…」

「やつほ、しよくん」

「…なんだ、しんのすけか」

しばし間が空き…。

「……しんのすけっ！…!？」

「しんのすけっ！…!？」

「……しんちゃん！…!」「……」

やっと気付いた春日部防衛隊が叫ぶ。

そしてすぐに野原一家が駆け寄り、抱きしめた。

「おおっ！！ と、とうちゃん、かあちゃん……ひまにシロ……」

「しんのすけ……!？」

「良かった……!？」

「たいたいっ!？」

「アンアンッ!？」

泣きながら抱きしめている彼等に、周囲がちよっとしんみりしつ…。

「ドラえもん！…!？」

「ドラちゃん！…!？」

「やあ、二人とも!？」

「ケロちゃん！…!？」

「クッくクックッ！ よお、たいちよお」

「ケロケロリ！ 心配をお掛けして申し訳ないであります!？」

他の皆も存在に気づき、叫び始めた頃に…。

『聞こえてるかあ!？ お前等あっ！…!！』

『外に出てきなさい！！！！』

『面白いものをみせてやるッショ！！！！』

まったく空気を読む気がない、大音量の音声の外から発せられた。それと同時に、彼等は外へと向かう。

そして、空に浮かぶ巨大な戦艦が徐々に変化していくのを目の当たりにした。

戦艦の両側の装甲が開くと、巨大な二つの腕が出現する。

さらに何もなかった頂上部から、二つの青い瞳を持つ顔が出現した。下の層には尖ったニードルが突き出た。

『これぞ究極のマシーンッショ！！！！』

「あれって……」

「私達が一番最初に戦ったアチモフのロボットとそっくりですね……」

「へっ、パターンな奴……」

「ホントだね……」

ドラえもんズの面々が口々に言った。

『ムツキ〜！ そんなこと言う奴はこうッショ！！』

何かを押す音がすると共に、装甲の一部が開く。

そこから大量のガンプラとネコ型ロボットが武装した状態で出撃した。

ガンプラは飛行ユニットを、ネコ型ロボットはタケコプターをつけて……。

「なっ!?!」

「まだあんなにあつたのか!?!」

「いや、かなりの数を作ったでありますからなあ……」

「そうだねえ……」

「んなふうと言ってる場合かつ!」

シミジミと言う二人にツツコミを入れ、接近する大量の敵を見る。

「まあ、いい。全部を破壊すればいいだけだ」

「で、でも、街の人達が……!」

「それなら大丈夫です! 先程ボールに連絡して、安全な場所に誘導しました」

桃華の一言で、その心配は消える。

安心したのか、全員の表情が和らいだ。

「手が早い! これなら安心して戦えるね!」

「簡単に言っなよ……ドラリーニヨ」

上空にいる大量の敵に対し、戦闘態勢をとろうとした瞬間。

「タルルジェノサイドGX!!!!!!」

「零次元斬!!!!!!」

突如、前方にいた多数の敵が撃墜されたのだ。

「隊長! 助太刀に来たツス!!!!」

「……………」

「お前達!？」

この突然の攻撃は、ガルル小隊の隊員である“タルル”、ゾルルがやったものだった。

「どうしてここに…!」

「隊長の帰りが遅かったもんで…皆でつい来ちゃったッス」

「ではゾルル。貴様は？」

「…ゼロ口がこんな所で死んでは、決着がつかない」

「いや、ついただろ…」

ツッコミを受けるが、関係なしといった表情でゾルルは続ける。

「あんな決着では俺は納得できん。だから今は助ける…それだけだ」

ざつくばらんに言うと、ゾルルは敵陣へと駆け出して行った。

「それじゃ! よく分かんないッスけど、幸運を祈るッス! 隊長!  
! 師匠!」

大慌てでタルルもビルを跳び、同様に敵陣へと行くのだった。  
直後にガルルは右耳に手を添えると、ボソボソと呟きだした。

ここに来ているであろう、ケロン軍の強襲用陸型宇宙艦に通信をしたのだ。

「“プルル”、“トロロ”新兵。聞こえるか？」

『プッププッ。久しぶりだねたいちよ』

『久しぶりね』

声を聞き、元気であることを確認すると、ガルルは命令を出す。

「トロロ新兵は敵位置などをタルル上等兵等に報告、プルルはそのサポートを頼む」

『りようかゝいゝ プププッゝ！』  
『了解したわ！』

通信が終わると、耳から手を離す。  
そして、おもむろに呟いた。

「…最後の援軍、か」

「最後ではありません」

いきなり聞こえた言葉に、全員が戸惑いながら後ろを見る。

そこには、白い戦闘機のようなものが大量に上空に出現していた。

「タイムパトロールかつ！」

「匿名で私が呼んだのだ」

かくれマントに身を潜ませながら、ドラパンは小さな声で呟いた。  
怪盗であるが故、見つかるのはいけないのである。

「目標はアチモフの巨大ロボット、および戦闘用ロボットだ！ 攻撃開始せよ！！」

タイムパトロールの隊長が声を上げた。

同時に全パトロール艦から一斉に二筋の電流が放たれる。

それは空中にいたロボット達を直撃すると、次々と空中で花火の様に爆発していった。

「おおー！ 数が多いだけの事はありますなあ！」

「しんのすけ、それは言っちゃダメだろ」

「それはともかく…ザコはタイムパトロールとかに任せて、俺達もいくぞ！」

「「「「「おおー！！」「」「」」」」

非戦闘員を残し、ケロン人は転送した飛行ユニットを点火させ、四本の羽を出す。

ドラえもんズやのび太達はタケコプターを装着する。  
空へと飛ばうとした瞬間。

「死ねい！！！」

直後、上空から数十機のガンプラがミサイル並みの速度で突撃してきた！

「小雪忍法！ ツララ手裏剣！！！」

しかし、次の瞬間に数十機が氷柱によって腕が、頭部が、腹部が切り刻まれる。

あっという間にバラバラとなると、ガンプラだった物は次々と爆発を起こしていった。

「ひるむなあ！！！」

続いて現れたネコ型ロボット達は、持っているひみつ道具を構える。

「キンキンステッキ！！！！！」

金のステッキから発せられた光を浴びる！

巻き起こった煙が晴れると、そこには金の像と化したネコ型ロボット達がいた。

まるで、本物の像の様に動かなくなっていた。

「何のお……！」

さらに接近してきた赤いガンブラを、ガルルは一撃で真つ二つに切り捨てる。

止めと言わんばかりに、転送したバズーカを連射し、着弾と同時に爆発した。

「ケロロ隊長！ 我々も雑魚の相手をする！」

「夏美さん達とこの街は、私達を守ります！」

「いけえ！ ドラえもんズ……！」

三人は、再び接近してきた敵に攻撃をし始めた。

「三人供……！ 行こう！」

決意を露わにしたドラえもんの一言に、全員が飛び立ち始める。

「わ、私も！」

「夏美！ あなたは怪我してるでしょ！ やめなさい！」

夏美も無理して行こうとしてが、凄まじい剣幕で秋が止める。それに渋々と言った表情で、夏美は動きを止めた。

戦闘メンバーが飛び立っていくのを皆が見ていた中…。周りを見て、疑問を持ったひろしが思わず呟いた。

「…あれ？ しんのすけは？」

「「「「「え？」「」「」「」」」」

この一言はハモると、辺り一面に響いた…。

く上空く

「しんのすけ殿！ 来ちゃだみだよーっ！…！」

「そうだよしんちゃん…！！」

「おかまいなくっ」

陽気な声でしんのすけは、心配そうな顔の二人に返した。実はこっそりとタケコプターを貰い、ちゃっかりと連いてきたのだ。

「おかまいなくって…お前なっ！」

「…！ 見えたよ！」

ドラえもんは目に映った巨大ロボットの存在を、声を上げて伝える。  
その場で停止すると、息をいっぱい吸って叫んだ。

「アチモフ！ これで終わりにしてやる！！！」

「ヴァイパー！ これまでであります！！！」

「ハイグレ魔王！ ケチャップをつけるんだゾ！！！」

最後の一言に、前のめりに全員がズッコけた。

「し、しんのすけ殿…ケチャップじゃなく…」

「決着だよ…」

「そうともいう…」

「決着としか言わんわ！！！」

半ば怒り状態でツッコミを入れるギロロを、やれやれといった表情でしんのすけは見る。

「んも、それよりはやくやろうよ！」

「そうだな…！ さあ、やろうぜ！」

『ゴチャゴチャうるさいッショ！！ これでも喰らうッショ！！！！』

巨大ロボットの装甲全体が開き、無数の穴が出ると共に無数のミサイルが飛び交う！

そして一斉に空中にいる彼等に向かう！

「させんっ！」

「僕も！」

「俺だつて！」

射撃組である三人の一斉射撃により、全てのミサイルが着弾することなくその場で爆発する！

全員は爆発の衝撃で吹き飛ぶのをこらえ、戦闘態勢を維持する。

『ちいつ！　これならどうだ！』

ヴァイパーの声が聞こえた瞬間、巨大ロボットの右腕が振り下ろされる！

「アチョーッ！！！」

「ハイパータママインパクトオッ！！！！！」

それを王ドラが足蹴りで弾き飛ばし、直後にタママが技を放つ！  
右腕の拳に着弾すると爆発し、拳の部分は破壊されていた。

『じゃあ、これよっ！』

今度はハイグレ魔王の声がすると共に、左腕から多数の銃口が装甲から出てくる。

標準が合わせられると、凄まじい音と共に大量の弾丸が放たれた！

「任せろ！　アクション……！」

両手を構え、力を溜める。

そして最大の力になった瞬間、放った！

「ビイイイイイイムッ！！！！！！！」

最大パワーによって、膨大なエネルギーの黄色い光線が弾丸を飲み込みだした！

次々と弾丸を飲み込んで消滅させ、遂には多数の銃口までに到達し、大爆発を起こした！

ムッキ!!! 何故だ何故だツシヨ!!!

爆発の影響で揺れている中、ムキになりながらアチモフは叫ぶ。

そしてスイッチを押すと、巨大ロボットの左腕が彼等に襲いかかる！

「アオオオオオッ！！！！」

しかしドラニコフの炎が迫りくる左腕を包む！

あつという間に炭と化した左腕は風が吹くと共に徐々に欠けていき、遂には崩れ去っていった。

クソがつ！！！！

今度は拳が破損した右腕で殴る為に再び振り上げる。

しかし次の瞬間、レンチやドライバーなどの工具によって、一瞬でバラバラに解体された。

「我輩の魔法道具の力、思い知ったかつ！！」

「さすがドラメツドオツ!!!」

「よっしゃあ！　今がチャンスだっ！！」

キッドの叫んだと同時に、攻撃が出来る者達が一斉に武器を構える。

「いっけええええええつ！！！！！」

王ドラの巨大ヌンチャクやドロ口の流星十字手裏剣、射撃や格闘が一斉に巨大ロボットに直撃する！

それらは瞬く間に大爆発を起こし、凄まじい衝撃が辺りに轟く！

「やった！」

「……！ まだだっ！」

巨大ロボットの漂っていた煙が晴れる。

だが装甲は、直撃した場所が黒くなり、凹んでいるだった。

『ガッラガラガラッ！！！　そう簡単に壊れるかよ！！！』

「ちっ！　腕以外は結構、頑丈だな！」

「どうするっ！？」

「……へっ！　決まってるだろ！　あいつらに見せてやるんだ！」

もったいぶる様に言うキッドに、ドラえもんズはそれぞれが構える。それをモニター越しに見ていたアチモフの顔が真っ青になる。

「俺達の！　友情伝説を！！！！　親友テレカをつ！！！！」

一斉に掲げられたカードは、ドラえもんズの持つ手の中で金色に輝きだす！

「おおっ！！！？」

「何だっ！？」

「なっ、なにっ！？」

「これがドラえもんズの……！？」

金色に輝く親友テレカは、味方も驚かせた。

「す、すげえ……！」

「嘘お……！」

「ドラえもん、あんな道具を…！」

それを初めて目の当たりにするのび太にジャイアン、スネ夫も驚きを隠せなかった。

黄金の輝きを放つ親友テレカは徐々に虹色の光へと変わり、球体と化した。

それは、巨大ロボットのブリッジにいる彼等を慌て立たせるには十分だった。

「何やってんのよっ！ 早く攻撃を…！！」

「な、何だか、攻撃しちやいけない気が…！！！！ 弟の気持ちが今、分かつちまつたぜ…！！！！」

「アワアワアワっ…！！！！！！」

ハイグレ魔王の叫びに耳も貸さない…いや、貸せなかった。

ヴァイパーは悪役がやらなくてはいけないという特撮ヒーロー魂が今、ついてしまった。

アチモフは親友テレカの恐ろしさを思い出して大量の汗を出し、歯をガチガチと鳴らしていた。

「しょうがないわねっ！ バリアを作動させて…！！？」

バリアを発生させるスイッチを押すが、何の反応も示さない。

スイッチのカバーが壊れるまで何度も押したが、やはり何の変化も起きない。

「ど、どうして…！！？」

驚いている間に、全てのモニターが“クルルズⅡラボ”のロゴと黄

色い貝が書かれた画面に変わる。

さらに驚きつつも、慌ててコンピュータの付属のキーボードを叩くが、モニターは変わる事はない。

『おゝい、聞こえるかあ？』

「！？ その声は…！ 黄色ガエル！」

艦内のスピーカーから流れる嫌味な声に、誰かすぐに気付いた。

『よお、オカマ野郎。その悪趣味なロボットのシステムは、俺様のウイルスが破壊しちまったぜえ』

「な、何ですって…！？」

いきなりの発言に、ハイグレ魔王は驚くしかなかった。

『もう武装もバリアも、それどころか動く事も出来ないぜえ』

「なになっ…！！！？」

『じゃあゝな…クククククツ！』

ブツンツという音と共に、スピーカーの電源が切れた。

呆気にとられたのか、ボー然とスピーカーを見ていた…。

「……………我らっ…！！ ドラえもんズっ…！！…！！」

「」

巨大ロボットの内部が完全に沈黙の中…。

球体と化した親友テレカは、巨大ロボットの胴体部へと突撃した！

！！

一斉攻撃をものもしなかった装甲を、まるで紙の様にやすやすと突き破っていく！

そして中枢部にあるエンジンルームで停止すると、光はさらに輝きを増す…。

輝きが増したと同時に、巨大ロボットの全部の隙間から光が漏れ出した！

「なななな、何だツショ！！？」

「や、やべえぞっ！！これは絶対にやべえぞ！！？」

「エンジンが凄い事になってるわよっ！！？」

ノイズが走るモニターと制御が効かなくなったコンピューターに、三人はただただ焦るばかりだった。

そうしている間にも、巨大ロボットの全体から光が漏れ、遂には…。

内部から爆発…いや、消滅したのだ。

残骸どころか、小さな破片一つも残らずに…。

唯一残ったのは、巨大ロボットのブリッジ部分が足場としてあるだけだった。

「おっ！　いたぞ！」

そしてブリッジに、立ったまま黒コゲとなって気絶しているアチモフを捕まえる。

「……………」

「気絶してるな、この野郎…」

「まあキッド…それじゃ、タイムパトロールに渡しましょう」

「おお…んっ？ もう二人は？」

戻ってきた親友テレカをしまい、辺りを見渡す。  
しかし、ヴァイパーとハイグレ魔王の姿はない。

「それは心配ないでアール！」

「もうケロロくんとしんのすけくん達がいったよ！」

「アウアウッ！」

「よしっ！ 俺達は残ったロボットを片付けようぜ！」

ジャイアンは叫ぶと勢いをつけて、ドラパン達のもとへと飛んで行った。

「ジャ、ジャイアン！」

「待つてよ！」

「しょうがないな…！ 行こう！」

キッドはアチモフを乱暴に担ぐと、ジャイアンの後を追う。  
それに続いて、ドラえもんズとのび太達も向かったのだった…。

「おおあああああっ…！！！！！」

運よく、かすり傷だけで脱出できたヴァイパーは地面へと転がり落ちた。

「あ、危なかった…い、今の内に逃げ…！」

「られると思うのか？」

背筋が凍る様な感じが、ヴァイパーを襲った。

ゆっくりと後ろを向くと、ケロロ小隊の面々が目線にいた。

「クゝクツクツ… たつぷりと…」

「キハドゥジキネ。」

獲物を仕留める様な目を光らせ、恐怖で動けなくなつたヴァイパーに歩み寄る。

ヴァイパーの叫び声が、木魂した…。

アチモフを盾にし、何とか無傷で脱出したハイグレ魔王は、マントを脱ぎ捨てる。

「決着をつけるぞ！  
ハイグレ魔王！」

「ふん…！ いいわっ！ 来なさい！」

両腕を構えて力を溜めると、黄色い光が出て、バチバチッと鳴り始める。

ハイグレ魔王は緑色の玉を取り出すと、それが光を発し始める。

「アクションオオオオオオッ！！！！ ビイイイイイムッ！！！！！！」

「死になさあああああいつ！！！！！！」

黄色い閃光が、稲妻の様に両腕から迸る。

それと同時に緑色の玉から青い稲妻が放たれる。

それらはぶつかり合うと、凄まじい光と衝撃を巻き起こす！

しんのすけは近くの電柱に掴まる事で、事なきを得た。

「ぐ…！ ぬぬ…！」

「な、何て力…！」

一歩も引かず、互いの光がぶつかり合う状態が維持されている中…。

「アクションかめーんっ！！！！ がんばれーっ！！！！」

「！！！！ おおおおおおおっ！！！！！！」

しんのすけの必死の応援が、アクション仮面に力の変化をもたらした。

黄色い光が徐々に、青い稲妻を押し始めているのだ。

「な、なにっ！？」

さらに力を込めると、遂には青い稲妻を押し退ける！  
そして呆然としているハイグレ魔王に直撃する！

「がああああああああっ！！！！？」

ハイグレ魔王の身体を黄色い光が包み、爆発する！  
爆風によつて煙が舞い、緊張が走る…。

そして遂に、煙が晴れる…。

全身を黒コゲにして、白目をむいたハイグレ魔王が倒れていた…。

「…やったか」

「アクション仮面！」

決着がついたと思ったのか、電柱から離れ、しんのすけが駆けて出て来た。

「おわったの？」

「ああ…終わったよ、しんのすけ君」

しんのすけに向けて、微笑みながらそう返した…。

く???く

暗い空間…。

そこに、この決戦を見ている三つの影があった。

「やられちゃったね…」

「だのお…」

「……………」

モニターで一部始終を見ていた三人の内の二人が呟く。  
電源を消すと、戦いを映していたモニターは、暗い画面へと変貌を  
遂げる。

「仕方ないなあ…全く、せっかく君と一緒に牢獄から出してあげ  
たのに…」

「とうとう、ワシらのじゃのお…」

「……………キル」

そう言うと、影は動き始めるのだった…。

## 第十七話：巨大ロボットとの大決戦！（後書き）

第十七話、いかがでしたでしょうか？

かなり遅くなったうえ、中途半端で終わらせて申し訳ありません…。  
次回は戦いが終わった頃からの予定です。

ご感想、ご意見などをお待ちしております♪

**第十八話：止まりし時！？ 現れる黒幕達！（前書き）**

遂にアチモフ達を敗った一同。  
しかし、その裏では不穏な影が…。

第十八話：止まりし時！？ 現れる黒幕達！

「これで……！」

「最後だ！」

腹部に穴が開いたガンブラが、空中を円を描くように吹き飛ぶ。そして爆発し、残骸が辺りに散らばった。

「ふう、何とか終わりましたね。あっちも終わつたみたいですし！」  
「ああ……しかし、あの巨大なロボットが一瞬にして消し去るとは……な」

あの威力を思い出したのか、ガルルは目を閉じた。

すると、空からドラえもんズとのび太達が来ている事に気づき、振り向いた。

「あれえ！？ もうおわつちまったのか！？」

「ああ、そつちもやったようだな」

ガルルの一言を返すと、ドラメッドが周りをキョロキョロと見ていた。

「ドラパンはどうしたでアールか？」

「……………」

質問に答えず、黙ったままガルルは持っていたカードを渡した。

「……？」

疑問に思いつつ受け取ると、カードの内容を読み始めた。

『～親愛なるドラえもんズへ～』

この手紙を読んだ頃には、私の姿はないだろう。

タイムパトロールに見つかる前に、退散しなくてはならないからな。しかし、お前達の友情の力、また見せてもらったぜ！

私が出るまでもなかったかもしれないが、俺は来て良かったよ。それじゃ、いつかまた会うその日まで…！

『～怪盗ドラパンより～』

震動が辺りに響く。

タイムパトロールの艦が、着陸しているのだった。それに構わず、ドラメッドはずっと手紙を見ていた。

「…ドラパン、礼も言えずに消えてしまったでアールか……」

「まっ、今度会ったときに言おうぜ！」

後ろから覗き込んで内容を見たキッドの言葉に、皆が頷いた。すると、タイムパトロールの隊長が部下を引き連れて駆け寄ってきた。

「ドラえもんズ、そしてこの時代の皆さん。あなた達に助けられてしまいましたな…」

脱獄させてしまった自分の不甲斐無さに情けないと思いつつ、隊長は敬礼をする。

「どうもありがとうございました！」

「えへへ…」

「な、何だかテレるなあ…！」

頭をかきながら、のび太とスネ夫は呟いた。

「いいって事よ！ それじゃ、アチモフをまた檻の中に入れて行くか！」

「それでは、こちらへ！」

隊長の指示で、ドラえもんズはタイムパトロールの艦に向かって歩き出した。

そして艦の入口を開けると、先に入った隊長達の後を追うように入っていく。

「おつとドラえもん！ お前はここに残れ！」

「えっ！？ どうして!?!」

いきなりの発言に、驚きながらドラえもんは聞いた。

分からないのか、と言った表情で王ドラが口を開いた。

「のび太君達に心配かけておいて、話もしないのですか？」

「あ…」

やっと分かったドラえもんは、手をポンと叩く。

「そついう事。だからお前はここに残れよ！」

「後の事は任せるでアール！」

「そうそう！」

「アウアウッ！」

「みんな……うん！」

笑いながらの返事を、ドラえもんズは笑って返す。

それを最後に自動の扉は閉まり、タイムパトロール艦は飛び始める。

「じゃあねっ！ みんなーっ……！」

ドラえもんの声を浴びながら、タイムパトロール艦は消えていった……。

「アクション仮面、どうするの？」

「……一旦、私は戻るよ。自分の世界にね」

日向家の近くでは、会話をしながら歩く二人がいた。

気絶したハイグレ魔王は、アクション仮面に担がれていた。

「お別れのあいさつもしないで？」

「すまない。もう準備が出来ているから、急がなくてはいけいないんだ」

「でも……」

「それに、こいつを解放してやらなきゃいけない。もう懲りたと思うからね」

そう、二人は前回と同様に、ハイグレ魔王を解放する気なのだ。  
お人好し…いや、ヒーローゆえの選択なのだろう。

「だから、しんのすけ君」

「うん。わかったゾ！」

「…ありがとう」

そう言い残すと、彼は平行世界に行ける装置がある場所へと向かう  
為に駆け出した。

「アクションかめーん！！ また来てねー！！！」

しんのすけは手を振り、それを見ていたのだった…。

「ゲエロゲロリ！ 我輩達の勝利であります！」

「ですう〜」

タイムパトロール艦が消えた同時に、日向家にケロロ小隊は到着し  
た。

因みにヴァイパーは気絶している為か、ギロロが片足を引っ張りな  
がら連れて来ていた。

「そつちも終わったか」

「ああ…では、ヴァイパーを渡してもらおう」

「ゲロ？ どうするの？」

「もちろん、宇宙警察に引き渡すのです」

成る程と思いながら、ケロロはギロロに目を移す。

それを感じ取ったギロロは、ヴァイパーの片足が無雑作に置いた。

「確かに、引き取った」

すると真上にいたガルル小隊の母艦から出た光に、ガルルは照らされる。

そしてゆつくりと、ヴァイパーと共に母艦へと浮いていく。

「それではケロロ隊長！これにて失礼します！」

「ガルル中尉！ありがとうございます！であります！」

敬礼をしながら、母艦に入って行くガルルをケロロ小隊で見送る。そして母艦は、目にも止まらぬ速さでこの場から去って行った…。

「お、終わったのか…？」

ガルル等と共に、人数分あったひみつ道具で戦っていたひろしが呟く。

「み、みたい…」

「ぼー…」

「ほんと…？」

「や、やったんだ…！」

歡喜の嵐が巻き起こる。

春日部防衛隊は泣いて喜び、ひろしとみさえも抱きしめ合う。  
秋と夏美も自然に笑顔が出ていた。

「やったー！」

「これで終わりなんですよね！」

「うん！」

冬樹も喜びの余り、桃華に抱きついた。

同時に桃華の顔がトマトの様に真っ赤になる。

「ええっ！？ ふ、ふふふ、冬樹君…／＼／」

「あ…！ ああああああ…！！？ ごめん…！！！」

慌てて離し、ペコペコ何度も頭を下げる冬樹を尻目に…。

（おい！ すかさずもう一回、抱きつくんだよ！）

（で、でもお…／＼／）

一方の桃華は、裏と激しい討論をしていた…。

残りの静香とモアは、外に通じる玄関へと駆け出す。

しかし、彼等は知らなかった。

すでに悪の手が忍び寄っているの…。

別れを済ませ、しんのすけはひたすら日向家へと走っていた。  
家族に早く会いたい…。  
心の何処がでそう思っていた。

「モア殿！ 冬樹殿！」  
「のび太くん！」

しかし、二人の叫びによってしんのすけの笑みは消えた。  
そして、目の前の光景に驚きが溢れた。

止まっていたのだ。  
何もかもが。

笑顔でバンザイをしている状態でのび太達は止まっていた。  
眼すらも動いていなかった。  
ケロロ小隊も小雪もモアも、止まっていた。

「…冬樹殿！」  
「家の中の人もか…！」

しんのすけは家の中からの声に、慌てて入る。  
そしてすぐに、中も同じ状況だと理解した。

「とーちゃん、かーちゃん、ひま…シロ…」  
ひろしもみさえも、ひまわりもシロも…。

春日部防衛隊も…。

冬樹も桃花も、秋も夏美も…。

止まっていたのだ…。

「おお！ しんのすけ殿！」

「無事だったんだね！」

「タヌキさん！ カエルさん！」

すぐさま駆け寄り、しんのすけは叫ぶ。

いつもはタヌキで怒るドラえもんも、今回はかりは気にしてられないようだ。

「何があつたの！？」

「わ、吾輩も、どういう事か、さっぱりなのであります！」

「誰かが、時間を止めたんだよ！」

ドラえもんの説明に二人は驚いた。

何故なら、敵はもういない筈なのだから…。

「で、でも、ヴァイパーもアチモフ殿も…！」

「ハイグレ魔王だって、つかまえたんだゾ！？」

「でも実際、誰も動いてないじゃないか…！」

その一言に、二人はグウの音も出ない。

「とにかく、何処かに元凶がいるはず…」

『聞こえるかい？』

「「「！？」」「」」

突然に頭に響く声に、驚きつつも周りを見渡す。

そして、気づいた。

出してもいない、どこでもドアが置いてあるのを。

『ひゃひゃひゃひゃ！ 周りには誰もおらんよ！』

『……キル』

『彼等に戻したいんなら、そこに置いといたドアで来るんだね…』

頭に響く声が消える直後、どこでもドアは自然に開く。

その先に広がる闇の空間に、三人は揃って喉を鳴らす。

「…いくゾ！」

「うん！」

「了解であります！」

不安は心にある。

しかし、それでも彼等は止まる事はない。

大切な人達を元に戻す為に…。

く????

暗い空間…。

潜った先に広がる闇は、どこでもドアから見た以上のものだった。

「ま、真っ暗でありますな…」

「そうだね…」

「やいっ！ とーちゃん達をもとにもどせえ！！！」

しんのすけの叫びは、空間に木魂した。

返答がない…と思った瞬間。

「…それは無理な相談だね」

そう聞こえた瞬間、空間を光が照らし出す！

隅々まで明るくなると、彼等は気付く。

目の前に三人の黒いローブを纏った者達がいるのを。

「いやあ…どうだい？ アチモフ達を倒した感想は？」

「お前等は…何者でありますかあ！？」

この言葉に、一人が笑う。

「何者か…じゃと？ ふふふ、そうじゃな…しいて言っなら…」

「君達にそれぞれ、恨みを持つ者…かな？」

「何だって…！？」

驚きを隠せず、ドラえもんは知らぬ間に呟いていた。

「お前達も、ヴァイパーの仲間なのでありますか!？」

「仲間? …くくくつ、違うよ。僕等は彼等を利用したにすぎない」  
「り、利用したですとお!？」

大げさなりアクションをとり、ケロロは叫んでいた。

「そう…彼等をうまく共闘させる様に仕組み、君達と戦わせるとい  
う…ね」

「まあ、予想通り、敗北したがの」

「…お前等は、一体、何者なんだ!!!」

それを聞いた一人が、黒いローブを投げ捨てた。  
そして、その姿を見たドラえもんは度肝を抜かされた。

「お、お前は…!!」

「ふふふつ、久しぶりだなあ。青ダヌキ」

悪趣味な仮面。

ボロボロな茶色のローブ。

そして手に持っている杖。

最後に、ギガアと言う高笑い…。

堪らずドラえもんは、その者の名を叫んだ…。

「お前は“ギガゾンビ”……!!!!」  
「ギガア！ その通りじゃ……!!」

ギガゾンビは高笑いを繰り返す。

同時に、背の低い者が黒いローブを投げ捨てる。  
今度は、ケロロが度肝を抜く事となる。

白を強調したケロン人だったのだ。  
額にある緑色のバツ印。  
腹部にある赤いバツ印。

見覚えのあるその姿に、ケロロは驚きながら叫んだ……。

「お、お前は……“キルル”……!!!!?」  
「……キル」

キルルは笑いもしなかった。  
だが、瞳から充分すぎるほどの憎しみが湧き出ていた。

「ぼくが最後か…よいしょと」

最後の一人も、黒いローブを脱ぐ。

骨の様に細く、長い身体。

悪趣味な一つ目と口、緑と赤が半々の服を着ていた。

「やあ、久しぶりだねえ…」

「あ…」

しんのすけは叫んだ。

「あんただれ…!!」

予想外の言葉にキルル以外の全員がズッコけた。  
頭を打ったが、男は立つと近寄る。

「忘れちゃったの？　しょうがない、もう一回これをあげよう」  
「あ、どうもどうも」

渡された名刺を見ると、名刺から音声が流れた。

『ヒストリートレンドクリエイター＆文化人　“ヒエール・ジヨコマン”』

「…おお!?　おもいだしたゾ！　未来のお姉さんを困らせてたおじさん！」

「ご明察！ やつと思い出してくれたんだね！」

どう見ても喜んでないその顔に、しんのすけは怯える。

「さあて、状況が分かんないだろうから、説明してあげよう」

ヒエールは話し始めた。

自分達の計画、そしてアチモフ達の事を…。

「君に負けて牢獄に入れられている間、ずっと君を憎んでいた…。そんな時、昔の事件ファイルっていう本を読んでいて知ったのさ。この二人の存在、そしてアチモフやハイグレ魔王、ヴァイパーの事を…」

そこで一旦に区切ると、またも喋り始めた。

「そして閃いた。

馬が合いそうな二人に僕の計画を知らせ、残りは利用する事をね！脱獄した僕は二十二世紀に飛ぶと、すぐに彼等を脱獄させた。もちろん、内密にギガゾンビには計画を知らせておいてね…」

ヒエールは後ろに下がると、ギガゾンビが前に出る。

そして、今度はギガゾンビが話し出す。

「三十世紀のキルルとミララは、様々なデータを取る為に封印を解かされていた。

そしてデータを取った後に機能停止させ、厳重に保管されていたのじゃ。

保管されていたキルルを強奪し、ワシ等は改造を施して強化した…。

後は、ハイグレ魔王とヴァイパー、アチモフをうまく会わせれば…完了じゃった」

ギガゾンビが話を終えた。

「じゃ、じゃあ、アチモフ達は利用されていたに過ぎないって事！？」

「そういう事。そして今度は…僕達の復讐タイムだよ」

ヒエールの後ろの床が静かに開く。

そこから、ピンクがかった赤い色をしたロボットが現れる。

右手は鋭く尖ったニードル。

左手は巨大な剣。

胴体は不気味な瞳な瞳が描かれていた。

頭の部分にある操縦席にヒエールが飛び乗ると、ロボットを操作し始める。

「さあて、始めようか？」

「そうじゃな」

「キルキルキル！！！！」

戦闘準備に入った三名に、慌ててドラえもんはポケットの中を探る。

「しんちゃん！ ケロロくん！ これを！」

中から取ったショックガン、ジャンボガンをケロロに。  
しんのすけに名刀・電光丸を投げ渡した。

「それを使って!」

「了解であります!」

「よおーしっ! やるゾお!」

武器を構え、それぞれが因縁の相手を睨む。

しんのすけ達にとっては、過去に倒し、今一度、倒さなくてはいいけない悪者…。

ヒエール等としては、最も憎く、そして復讐すべき善者…。

本当の決戦が今、幕を開くのだった…。

**第十八話：止まりし時！？ 現れる黒幕達！（後書き）**

第十八話、いかがでしたでしょうか？

何とか早めに出来上がりました。

黒幕達は私の好きなキャラで…。

次回は、遂に本当の決戦を書きたいと思います。

ご感想、ご意見をお待ちしております♪

**第十九話：これが最後！ 本当の決戦！（前書き）**

時が止まってしまった原因…それは本当の黒幕の仕業だった！  
そして、真の黒幕である者達との戦いが、今始まる…。

## 第十九話：これが最後！ 本当の決戦！

しんのすけ達は、それぞれの戦うべき相手と対峙することになった。何故こうなったのかは分からないが、自然になった。やはり因縁なのだろうか…。

「んじゃあ行くよ」

「いつでもこーい！」

突き出したロボットの右腕のニードルを、電光丸で右へと受け流す！

「おおっ！？ 腕は落ちてないねえ！」

「それほどでもお！」

そして体制を整えない内に斬りかかる…が、左手の大剣で阻まれる。再び迫るニードルを横に跳んでかわそうとするが、勝手に電光丸は受け止めてしまう。

これによって、しんのすけは浮かない顔をする羽目になる。

「…うん。このカタナ、かつてにうごくゾオ…使いにくい」

「おやおや？ どうしたんだい？」

そう、名刀・電光丸はセンサーが働く事で自動的に動く。

しかし、剣を扱い慣れているしんのすけにとっては、自動的に動く電光丸は使い難いのである。

それにより、悪戦苦闘のしんのすけを余所に…。

「死ねい！」

杖の先端から高圧の電流が発し、ドラえもんを狙う！

「ひらりマントォー！」

当たる直前に出したひらりマントで、あっさりと跳ね返される。  
今度は逆にギガゾンビを襲うが、必死で避けた為にはずれ、床を焦がした。

「ドッカーンッ！ー！！」

「おわっ！？」

攻撃の隙を与えない為、一息ついているギガゾンビに空気砲を放つ！  
容赦なく襲いかかる空気の弾丸は、ギガゾンビの持っていた杖を一撃でへし折った！

カランと杖の先端が落ちる音を聞きながら、ドラえもんを仮面の中でジッと睨む。

「どうだ！ 参ったか！」

「おのれえ、こしやくなあ…！」

しかし、武器が無くなったギガゾンビは余裕の笑みを仮面の中で浮かべていた。

ドラえもんの後ろに、忠実な土偶がいるのだから…。

「ギイイイガアアアアアッ！！！」  
「っ！？」

反射的にその場から一步分、跳び下がる。  
床に直撃すると、その部分のタイルがはがれ、吹き飛ぶ。

「はずしたギガッ…！」  
「お前は…“ツチダマ”！？」

ツチダマ。  
ギガゾンビの忠実な僕だった、壊しても再生する特殊合金で出来た土偶。

最後は基地の爆発で壊れた哀れな土偶…。

思い出すのをやめ、ドラえもんは冷静になる。  
もう一度作る事など、ギガゾンビにとっては簡単だろうから。

「だぁはっはっはっ！ どうじゃ？ 驚いたか！？」  
「まぁ、ね…でも、お前は一人じゃ何もできないのか！ ギガゾンビ！」

この言葉にギガゾンビはキレた。  
そしてすぐさま、ツチダマに命令を下す。

「ええい！ へらず口を！ ツチダマ！ やれい！」  
「ギイガア…！！！」

頭を開いた無数の穴から光が発する。

その光は凄まじい衝撃波となり、ドラえもんに襲いかかった！

「うわっ！！？」

「ひやはははっ！ どんどんやってしまええ！」

「分かりましたギガアアアアアアッ！！！」

地面に転がり込んだドラえもんは、無情にもさらに衝撃波は襲う！  
攻撃どころか、立ち上がる隙さえも与えず、連続で放ちまくる！

「ぐっ…！」

これにより、完全にと化したドラえもんを尻目に…。

「ゲロオッ！！！？」

「キルキルキルキル…！！！」

一方、ケロロは絶体絶命だった。

ジャンボガンもショックガンも、強化されたキルルには傷一つ付けられないのだ。

「こ、このお！」

ジャンボガンがキルルの腹部に直撃するが、痛がりも吹き飛びもしない。

何故なら、腹で弾を受け止めたからである。弾はゆっくりと、地面へ落ちていった。

「ゲ、ゲロオツ!! やっぱダメっすか!!!」

「キル!」

お返しと言わんばかりに、指先から七色の光を発する野球ボールサイズの球体を生み出す。

指をゆっくりとケロ口に向けたと同時に……。

勢いよく放たれた。

「ゲエロオオオオオオッ！！！！！」

泣きながら、その場を跳び上がる！

先程いた場所は、大爆発を起こし、辺りに煙が舞う。

「キルキルキルキル!!!」  
「助けてええええええええええ!!!!!!」

次々と両手の指先から放たれる七色の球体を、叫びながら避けまくる。

「あ、あんな武器はキルルに無かったはずであります…！」

改造されたからだと結論付けると、二丁の銃を力を入れて握る。

「ぐっ！ こうなったら撃ち落としてやるであります！」

立ち止まって勢い良く振り向き、交互に引き金を引く。  
迫る七色の球体を次々とかき消し始める！

全てかき消すと、今度はキルルに標準を合わせる。  
足止めにはなると踏んだケロロは、引き金を引く。

「…あれっ？」

弾も、光線も出なかった。

何度も引くが、両方とも反応がない。

「ま、まさか…エネルギー切れ？」

アハハハと愛想笑いをしながら、冷や汗を滝の様に流す。  
その間にも、キルルは再び指先から球体を生み出す。

「や、ヤバ…ゲッ!!？」

逃げる事ばかりに集中していた為に気付かなかった。  
自分の後ろが、壁である事に。

「キル…！」

「ゲ、ゲロゲロ…!!！」

まさに絶体絶命という言葉が相応しいこの状況。  
だが、やはり奇跡は起こるのである。

「面白くないよお！ ダメだな〜！！」

怒りの混じった言葉を言いながら、大剣を振り下ろす。  
また電光丸が勝手に動く…と思われた時だった。

「おっ？」

しんのすけは難なく、横に跳んでかわした。  
何故、電光丸は反応しなかったのか？

それは、電池が切れたからだ。

「…おっ？ カタナがかってに動かなくなったゾ〜！」  
「どうやら、電池切れみたいだねえ」

電池が切れた電光丸は、しんのすけにとって幸運であった。

「よおーしっ！ ぜんりよくでいくゾーッ！！！」  
「それは楽しみだ」

先程までとは動きが、剣さばきが違った。  
ヒエールの操縦するロボットの攻撃を全て受け止める、避けるの繰り返し。

隙についてはロボットにどんどんと傷をつけていく。

「やつ！ ほっ！ とおっ！」  
「すごい！ すごいねえ！」

先程よりをはるかに上回る剣さばきに、ヒエールはただ興奮するばかりだった。

ニードルで串刺しにしようとするが、足元を潜り抜けられてる！

外れてしまうと、壁に深々と突き刺さり、大きなヒビを入れる。

「たあっ！」

それを見逃すほど、しんのすけは甘くはなかった。

跳び上がると、電光丸をロボットの右肩に向け、思いっきり振り下ろす！

するとどうだろう。

右肩から切断された右腕は、ゴトンと地面へ落ちていった。

「おおっ！！ サイコーッ！！！」

放電する右肩のあった部分を見ながら、ヒエールは喜び叫ぶ。しんのすけは再び電光丸を構え直すと、走り出す。

それに伴い、ヒエールもロボットの左腕の大剣を構える。

「いっくゾォ！」

「止め！」

跳び上がったしんのすけに、勢いよく振り下ろされた大剣が迫った！

剣と剣がぶつかり合う音が響く！

互いに相手を通り過ぎると、そのまま止まる。

少しの間、この場に静寂が包み…そして。

ヒエールの大剣が真つ二つに斬れ、円を描きながら先端が地面に突き刺さる。

「おおっ！！！？」

「たあああああつ！！！」

驚いているヒエールの隙を突き、ロボットを後ろから斜めに胴体を斬り裂く！

深く斬れたのか、内部の回路が見える。

そのままロボットは、全身で放電を起こしながら硬直する。電光丸を軽く一振りしながら、しんのすけは言い捨てた。

「…みなうちダゾ。安心しろ…なんちゃってえ」

笑いながら頭をかくしんのすけの背後に、爆音が轟く。どう考えても峰打ちではないが、爆風で吹き飛んだヒエールは無事の様だった。

…身体は真つ黒だったが。

「やれや…うおっ！！？」

「ギガギガギアッ！！！！？」

一方こちらでは、巻き起こった爆風でギガゾンビ達の体制が崩れる！

それをチャンスと思い、一瞬で立ち上がる！

この隙に瞬間接着銃を四次元ポケットから取り出すと、衝撃で倒れたツチダマに撃つ。

「ギ、ギガアッ！！！？」

通常の攻撃では再生できるツチダマも、さすがに粘着弾はどうしようもなかった。

念の為にドラえもんは、ツチダマの全身が白い粘着弾で包まれるまで撃ち続ける。

そして動けない事を確認すると、瞬間接着銃をポケットにしまった。

「ギ、ギガア……！！」

何とかはがそうとするが、強力な接着剤に成す術もなく、もがくしかなかった。

そしてドラえもんは、地面に倒れ込んでいるギガゾンビに駆け寄る。

「ひつ、ひいつ！！ く、来るな！！！」

爆風で仮面がはずれ、汗をたらす年老いた顔。

見ただけでも恐怖がある事が分かる瞳、怯えて立てないのか、尻をついたまま後ろに下がろうとする。

「……………」

ドラえもんは、これを見て哀れとさえ思った。

そして無言のまま、空気砲をはめた手で頭を殴った。

「ぎゃあっ！！！！？」

悲鳴をあげ、白目をむく。

直後にカニの様に口から泡を出し、ギガゾンビは気絶をした。

「…終わった」

たった一言、そう呟いた…。

「！？」

「ゲロツ！？」

こちらも爆風によって体制を崩したキルルの隙を突き、横を通り抜ける！

「ケロロくん！ 大丈夫！？」

「ギによって助太刀するゾー！！」

戦闘を終了した二人は、ケロロを助けるべく駆け寄った。

「おお！ 助かるであります！」

ショックガンとジャンボガンを投げ捨て、ケロロは叫ぶ。

同時に体勢を立て直したキルルは、高速で接近する！

「ドッカーンッ！」

空気砲から放たれた空気の弾は、一直線に迫りくるキルルに当たる！  
しかし、仰け反っただけでダメージは与えられなかった。

「たぁー！」

今度はしんのすけが電光丸を構えながら駆けだす！  
そしてキルルに勢いづいた電光丸を振り下ろす！

「キル！」

だが、あっさりと片手で電光丸を受け止める！  
そのまま右へと強引に曲げられると、刃がへし折れる！

「おおっ！！？」

折れた電光丸の先端が、カシャンと音を出して地面に落ちる。  
そしてすぐに、呆然としているしんのすけに生み出した球体を投げる！

「おおっ！？」

「あぶなーいっ！ ひらーりっ！」

ひらりマントで跳ねかえ…。

「「うわぁぁあぁあっ！！！！？」」

せなかった。

何故か？

それはひらりマントでは跳ね返せない威力だったからである。

ひらりマントを一撃で貫通し、ドラえもんと後ろにいたしんのすけに直撃する！

「ド、ドラえもん殿！ しんのすけ殿お！」

爆発で生じた煙に向けて叫ぶが、返事は来ない。  
震えながら、ケロロは叫び続ける。

「しんのすけ殿！ ドラえもん殿お！」

何度も叫んでも、やはり煙からは返事一つ来ない。  
ケロロはギュッと拳を握ると、血管が浮き出る。

「キル……」

「……ゆ、許せんであります……！」

ケロロは小さな声で呟く。

そして、こつちにゆつくりと歩み寄ってくるキルルを睨む。  
その眼は、怒りで満ち溢れていた。

「ゲロオ……！」

足元を強く蹴り、キルルに跳びかかる！

「キル……！」

七色の球体を生み出すと、向かってくるケロロに放つ！

「んなもんがどうしたあああああつ！！！」

滑る様にひらりとかわし、近づいてキルルを殴り飛ばす！

「キルウツ！！！！？」

怒りによって力が上がっているケロロの拳。

それはジャンボガンを喰らわなかったキルルを、容易に吹き飛ばした！

「ゴラアアアアアツ！！！」

倒れるキルルに容赦なく蹴り飛ばす！

さらに高速で追いつくと、見えない速度の拳を連打する！

「オラオラオラア！！！！！」

最後の一撃を入れると、キルルは壁に激突する！

それは壁にめり込ませ、周りにヒビをも入れる。

「…キ、キルウ……！！！」

何とかめり込みから出ると、振動で周りから小さな瓦礫が落ちる。

その姿は埃まみれになっていたが、それを気にもせず両手を伸ばす。

「キイルウウウウウツ！！！！！」

全ての指先から、虹色の球体を生み出す！

「…ケロオツ！！！」

ケロロも両手を合わせる。

すると手の間に、徐々に黄色の球体が生み出される。

「キン！ キン…！」

サッカーボール程の大きさになると、ケロロは投げる構えを取る。  
キルルも投げる構えを取る。

「キイルウウウウウツ！！！」

「ケロン波！！！！！」

一斉に投げられた。

十個の七色の球体は、黄色の球体に当たり、そして…爆発。

それは衝撃と閃光をこの空間の端まで届いた…！

「…ロロくん！ ケロロくん！」  
「…ゲロ？」

目を開くと、心配そうな顔でケロロを見るドラえもんとしんのすけの姿があつた。

勢いよく起き上がると、二人を見る。

「ふ、二人共！ 大丈夫でありますか！！？」  
「大丈夫だよ！ 僕達には怪我一つないから」  
「そうだゾー！」

確かに二人は、埃で身体は汚れているが、怪我は一つも見当たらなかった。

「お二人とも…どうして怪我一つないのでありますか？」

これに不思議に思った為に、ケロロは聞いた。

「僕はこの、いなづまソックスを使ってあの場から離れたんだ」  
「オラはドラえもんにかつがれたんだゾー」

高速で走る事の出来る靴下、いなづまソックス。  
これによって、怪我一つ無く済んだのだ。

納得して、ふと周りを見渡すと、驚くべき光景があつた。

「い、一体、何があつたんですか？」

一点を見ながらケロロは呟く。

目線の先には、ボロボロとなつたキルルが地面に倒れていた。

よく見ると周りも爆発で吹き飛んだような状況になっていた。

「えっ？ ケロロくんが倒したんだよ？ 覚えてないの？」

「…我輩が？」

両腕を組んで考えるが、何も思い出せない。

怒り狂っていた事と、爆発の衝撃で吹き飛んで気絶した事。これによって、すっかり忘れてしまっているのだ。

「思い出せないでありますな…」

「まあまあ。オラ達、かつたんだからいいじゃない」

「…そうだね、覚えてなくてもいいんじゃないかな？」

「…それもそうでありますな！」

三人は笑い合う。

それはこの空間での戦いに終わりを告げるものとなった…。

**第十九話：これが最後！ 本当の決戦！（後書き）**

第十九話、いかがでしたでしょうか？

今回は戦闘があまりにも少ない三人に活躍させてみました。

そして次回は遂に、最終回です！

ご感想、ご意見をお待ちいたします！

**最終話：戻りし平和な日々…（前書き）**

遂に本当の黒幕を打ち破った三人。  
そして再び時は動き出す…。

## 最終話：戻りし平和な日々…

↓日向家↓

「やったやったあ……！」

「バンザイッ！」

戦いに決着がついた頃、日向家の時が動き出していた。

『はいはーいつ！ 皆さんっ！ ただちに地下基地にしゅっ！』

「軍曹？」

「あのボケガエル！ いきなり放送なんか流して何を……！」

また何か企んだのかと思い、夏美はすぐさま地下基地へと足を進める。

家の外にいた者達も、地下へ行く為に家の中に入ったのだった…。

↓地下基地・司令室↓

「コオラ！ ボケガエル！ 一体……！？」

「……ええっ……！？」

辿り着いた一同は驚く事となる。

広い司令室の真ん中には、どこでもドアである空間を出たしんのすけ達。

そして、真の黒幕の三人が地面に寝そべっていたのだから。

「ド、ドラえもん！ この人は一体…！？」

ギガゾンビの素顔を知らないのび太達は、ドラえもん聞いた。

「ギガゾンビ…アチモフ達を裏で操っていた、本当の黒幕の内の一人さ」

「ギ、ギガゾンビだと！？」

「そ、それに、本当の黒幕だって！？」

「どういう事…！？」

衝撃的な事実に、周りの全員は驚きを隠せなかった。

「し、しんのすけ！ こいつは確か…！」

「ヒエールだゾ！ 前にやつつけた悪いやつダゾ！」

「あつ！ あの時の！」

一方の冬樹達も、キルルの事をケロロに追求していた。

「お、おいっ！ ケロロ！ それじゃこいつも…！？」

「…そうであります」

「で、でも封印したはずですよ！」

「未来の世界の、キルルであります」

キルルの事を知っている者達は、驚きの表情を浮かべる。

「み、未来のキルルでござるか！？」

「そんな…！」

「成る程な…そこから連れて来たって訳か」

直後、みさえの悲鳴が響き渡る。

見るとそこには…。

「ふっふっふっふっ…やってくれたねえ」

ヒールがゆつくりと起き上がっているのだ。

服の埃を手で払いながら言うと、しんのすけ達を睨む。

「おお！？ おじさん、しつこいゾ！」

「まだ負けた訳じゃないからねえ」

笑いながらヒールは、持っていたとりよせバッグを開ける。

そして、大きい筒型の何かを取り出した。

「これ、なんだ？」

「…！ そ、それは…地球破壊爆弾…！！？」

驚きの表情でドラえもんは叫ぶ。

それを聞いた全員も驚きが走る。

地球破壊爆弾。

名前の通り、地球を欠片一つ残さずに破壊する事の出来る強力な爆弾。

「ち、地球破壊…！？ じよ、冗談でしょ…！」

「…ぼくの時代は、そういう物を作れるんだ……」

冷や汗を流しながら、慎重に言った。

「信じてもらえたようだね。それじゃ、ジツとしてもらおうか」

ゆっくりと後ずさりをヒエールは始める。

足取りは、後ろにあるどこでもドアだった。

「ク、クソッ！ 何とかなんのか！？」

「で、でも、作動したら死んじゃうですう……」

「……くっ！」

「状況は最悪ってか…んっ？」

何かを感じたクルルは、ヒエールの背後に目を移すと、薄い物が飛んできていた。

目を凝らしてよく見るとそれは…。

紙だった。

絵が描かれている紙が、ヒエールの背後から飛んできたいたのだ。

「紙…クックックッ。あいつか…」

不敵な笑いをしながら、クルルはずっと紙を見ていた。

そうして紙は円を描きながら飛び、地球破壊爆弾を持っているヒエールの右手に当たる！

「いたっ！！？」

痛みによって手を離してしまい、地面に落ちていく。

それと同時にだった。

春日部防衛隊のメンバー全員が駆け出すと、夏美と小雪が跳んで蹴りの態勢を。

さらにその横で、のび太がショックガンを、ジャイアンがパワー手袋を手にし駆け出す！

ほんの一瞬で、これらの行動が一斉に行われたのだ。

夏美と小雪の強力な蹴りが、綺麗にヒエールの顔に入ると、勢い良く吹き飛ぶ。

「のび太君！」

「お願いします！」

「はいっ！」

すぐに離れたと同時に、のび太のショックガンが火を噴く！  
追い打ちをかけられたヒエールは、さらにダメージを受ける。

「ジャイアンッ！」

「おうっ！　最後はオレ様に任せとけっ！」

止めと言わんばかりに、ジャイアンの拳が腹にめり込む！  
声もあげられずに、さらに吹き飛んだヒエールは壁に激突する！

「おまけ、よっ！」

「これも！」

さらにみさえのリアット、秋の回し蹴りも喰らう！

強力なコンボにそのまま崩れ落ち、ヒエールは地面へと倒れていった…。

一方の春日部防衛隊は…。

「とれたゾ！」

「あ、危なかった…！」

「やったあ…！」

「とれてよかったあ…！！！」

「やったわね！」

落下していた地球破壊爆弾を、五人共が重そうな表情で受け止めていた。

お陰で、地面に衝突するという最悪の事態を回避できたのだ。

「やった…！」

「な、何てコンビネーション…！」

「スゲエ…！」

後のメンバーは、一瞬の間に行われた行為に呆然としていた。

そして地面に落ちた紙を、近くにいたクルルとスネ夫が見ていた。

「こんな紙で、何で痛がったんだろう？」

「…いや、この紙は硬かったんだぜ…クッククック」

「???？」

分からないと言った表情のスネ夫は無視し、クルルは紙を拾い上げた。

その紙にはブーメランの絵が描かれ、隅に小さくこう書かれていた…。

326と…。

「最後に活躍できた…かな？」

笑いながらペンをしまうと、入口付近にいた彼は中へと歩き出す。クルルはその人物に近づく。

「よお…お前の出番はないと思ってたが…」

「少しは活躍できなくちゃね…」

ウインクしながら少年は言う、ほほ笑んだ。  
その人物を見た夏美は堪らず叫んだ。

「“サブロー”先輩!!？」

「なにっ!？ サブローだと!？」

嬉しそうな表情の夏美と反対に、ギロロは忌々しいと顔に出ていた。それもその筈、ギロロにとってはサブローはライバルなのだ。

…サブロー自身は何とも思っていないが。

「ちょっと遊びに来て、こうなってるなんてね…」

「サ、サブローせんぱ…」

夏美が話をしようとした瞬間、司令室に眩い光が包みこむ！

「えっ!？」

「うおっ!？」

「こ、今度は何だ!？」

突然の眩い光に、一斉に皆は目を閉じる。

光が収まった直後に目を開けるとそこには…。

橙色の三つの球体が逆三角形でくっついている乗り物が現れた。  
そして一番前の横は扉なのか、開きは始まる。

「…また敵かな？」

「ええっ!？ もうヤダよ！」

「うっせえスネ夫！」

警戒しながら扉が完全に開くのを待つと…人影が見えた。  
それは女の人だった。

彼女を見た瞬間、野原家の全員が反応した。

「おお！ おねえさんっ!！」

一番速く動いたしんのすけは、彼女に飛びついた。  
それを予測していたのか、彼女は簡単に受け止める。

「久しぶりね、しんちゃん」

「おひさしブリブリっ!!!！」

明らかに喜んでるしんのすけの顔に、ドラえもんやケロロ達は敵ではないと認識した。

「えーっと…しんちゃん、この女の人は？」

「彼女はタイムパトロールの人よ！」

「そうそう！」

ひろしとみさえが叫ぶと、女性はしんのすけを抱き抱えたまま自己紹介をした。

「三十世紀のタイムパトロール隊員、“リング・スノーストーム”です」

「さ、三十世紀のタイムパトロール！？ 二十二世紀の比べると全然違う！」

驚きっぱなしの一同に、リングは頭を下げ出した。

「この度は、あなた方にご迷惑をお掛けして、すいませんでした」  
「い、いえいえ、いいんですよ！」

「そうでありますよ！ だから頭を上げてくださいます！」

「…ありがとうございます」

顔を上げて礼を言うと、今度はしんのすけに顔を向ける。

そして抱き上げたまま、リングは謝りだした。

「ごめんなさいしんちゃん。またあなた達に迷惑をかけちゃって…」  
「いや／＼／＼ オラ、おねーさんのためならとーちゃんのくつしたの中でも…」

「何で俺の靴下が出てくんだよ！」

ひろしのツツコミが入るが、今のしんのすけには聞こえていない。

「まあ、確かにそれは勇気があるわよね…」

「アンアンッ！」

「たやゝ」

一方のみさえやシロは、納得したのか頷いている。

「お前らなあ…！」

「ふふふ…相変わらずですね」

楽しそうに笑いながら、完全に気絶しているヒエールに視線を移す。

「ヒエール・ジョコマン…脱獄および、時間犯罪法の違反により、逮捕します」

丁寧に言うと、リングはしんのすけを降ろしてヒエールを担ぐ。

それを見た皆も、タイムパトロールの船に入れるのを手伝い始める。

「…よしっ！ キルルは乗せたぞ」

「こっちもギガゾンビを入れたよ！」

「ヒエールも乗せました…手伝ってくれてありがとう」

「でも、ギガゾンビも乗せていいの？」

「はい。二十二世紀に行って事情を話し、引き取ってもらいます」

「キルルは…どうするの？」

「封印します…もう二度と目覚めない様に…」

そう言うとリングは、タイムパトロールの艦に乗り込んだ。

扉が閉まり始めると、リングは振り向いた。

「皆さん、本当にありがとうございました！」

扉が段々と閉まって行く中、お辞儀をする。そして、しんのすけを見て最後に言った。

「じゃあね、しんちゃん♪」

「また会おうね！ おねいさ〜ん！」

笑いながら返事をしたと同時に、船は消えていった。

「…終わっていませんか？」

しばらく呆然としていたケロロは、小さな声で呟く。

「これで……終わっただよ！」

ドラえもんがそれと同時に……。

「「「「「  
 …… やったあああああつ!!!!!!」  
 「「「「「

皆の喜びの笑顔と叫びが、この司令室いっぱいに広がった…。

く野原家く

「しんのすけく！ 早くしなさい！」  
「ほっほくいつ！」

あの戦いが終わって三日が過ぎた…。  
いつもの日常へと戻った彼等は、元の生活を過ごしていた。

「よしながせんせー！ おっはー！」  
「おはようしんちゃん」  
「コラ！ ちゃんと挨拶しなさい！」

気にせずにしんのすけは、幼稚園バスに乗り込む。

「あいつく…！」  
「いいんですよ」  
「すいません…」

頭を下げていると、バスの扉が閉まる。  
そして風の如く走り去って行った…。

「…よしっ！ あなた！」  
「おうつ！ ひまわりは任せとけ！」

有給を取って会社を休んだひろしは、ひまわりを抱いていた。

「それじゃ行ってくるわね！」

そして用意されているどこでもドアを開け、入って行った。  
果たして行き先は…？

（双葉幼稚園）

「コオラー！ しんちゃん！ お尻ふきなさい！」  
「めんどうだからこんど！」

走り去るしんのすけとよしなが先生…いつもの光景だった。  
それを見ていた春日部防衛隊の一同はため息をついた。

「はぁ…またか」

「いつものことよね…」

「ほんと…」

「…うん……」

そつは言っても、彼等は喜んでいた。  
平和な頃に戻れたのだから…。

あの戦いの後、風間達は両親と対面した。  
泣きながら彼等は親に抱きつき、再会を喜んだ。

次の日の幼稚園でも、先生や友達と久しぶりに会えた事を泣いて喜んでいた…。

それを思い出しながら、追いかけてこをするしんのすけとよしなが先生を見ていた。

「しんのすけ君達、元気に来てくれますね」

「でもあの子達、一体どうしてたんでしょうね？」

「確かにー…」

遠くから見ている園長先生とまつざか先生、上尾先生が話していた。

「いいじゃないですか。無事にまた来てくれたんですから」

「…そうですね」

「そ、それもそうですね…」

三人は元気に走っているしんのすけに、ほほ笑んでいた。

「ふっふっふっ…よしながせんせいもまだあまいぜ」

走りながら指を横に振っていると、苦手な人物の声が聞こえた。

「しん様〜！」

「ゲツ！？ あいちゃん…逃げよ」

「あっ！ 待ってしん様〜！」

「待ちなさ〜い！」

こうしてしんのすけは、あいとしなが先生に追いかけて回されるのだった…。

く 小学校く

「コラのびい！ また宿題忘れたな！ 廊下にたつとれえ！」  
「は、はい…」

一方、のび太達も前と同じ様な生活に戻っていた。  
いつも通り、宿題を忘れたのび太が廊下に立たされる。

「…ふふ」  
「？ どうしたのしずかちゃん？」

小さく笑った静香を不思議に思い、スネ夫は聞いた。

「いえ…平和になったって思ったの」  
「…確かにな」

返事をした直後、ジャイアンも会話に入った。

「もうあの戦いは終わったって、実感できるぜ」  
「…そうだね」

のび太達も、親に泣きながら抱きついたのだ。  
もっともその後、しっかりと怒られもしたが、彼等にはそれすらも

懐かしいと感じていた。

「コオラ！ お前達！ 何を話しておる！」

「あつ！？ ヤベッ！」

会話を聞いた先生はひどく怒った。

何故なら、授業中に話しているからである。

「お前達も廊下にたつとれ！！！」

「とほほ…平和になつたらこうだ……」

「いいじゃない…ふふっ」

「まっ、いつか！」

三人は笑いながら教室を出ると、廊下に立ったのだった…。

〈中学校〉

「夏美さん！ おはようございます！」

「おはよう小雪ちゃん」

旅行という理由で学校を休むようにしていた二人は、問題はなかった。

小雪と会話しながら夏美は、平和だと心の中で思っていた。

「…平和だな」

「ですねえ…」

いつもの教室で、冬樹と桃華も平和を感じ取っていた。  
これがずっと続けばいい…そう思っていた。

↓中学校・屋上↓

「いつものごとく、大変だったんだね」

「クツクツクツ…まあな」

屋上で事情を説明し終わったクルルに、サブローは言った。

三日間かかった訳は、クルルの遠回しで厭味な説明のお陰である。

「でも、解決できたんだから良かったね」

「クツ…簡単に言ってくれんぜ…」

寝転がりながら言うと、サブローは目を閉じる。  
クルルもそれに習い、寝転がる。

「あれ？ クルルも？」

「たまにやゝいいと思っただけ…」

それを最後に、クルルは眠りにつく。  
サブローは笑うと、目を閉じた…。

く地下基地・司令室く

「はやく！　そろそろしんちゃん達が来ちゃう！」

「ええー！？　まだ準備できてないですう！」

「ううーんっ！　困った困った困ったなあー！！！」

「“ジエドール”！　こんな時まで慌てないでよ！」

「い、急ぐであります！」

日が沈み、夕暮れとなった頃…。

ケロロ小隊やドラえもんズ、みさえや秋達が準備をしていた。その準備とは勿論、パーティーの準備である。

「な、何で俺まで…」

「ガタガタ言ってるねえで、手を動かせ！」

「ミニドラ達もがんばって！」

「くくくドラア！」「くくく」

「皆さん、頑張ってますね…てゆーか、一生懸命？」

飾り付けのメンバーは周りを飾り…。

「はいっ！　これ机に置いといてね」

「了解であります！」

「はいこれも！」

「心得た！」

「じゃあこれもお願いい！」

「いただきます「食べるなタママ！」」

料理係や運び係も必死で働き…ついに。

「で、出来た…」  
「『『『『』』』』』」

朝から作業を始め、遂に完成したパーティー会場。

パーティー会場と化した司令室は、見事に綺麗な飾り付けをされていた。

机の上には美味しそうな香りを出す三段重ねのケーキや、様々な料理が並べられていた。

「後はしんのすけ達が来れば…」  
「もう来たよ」

全員が目を動かすと、そこにはのび太達や春日部防衛隊、冬樹達が出た。

「うわ〜！ すごいっ！」  
「おお！ おいしそ〜！」  
「うわあ〜！」

パーティーがあると知っていた彼等は、ワクワクしながら来た。

「ごちそうさま〜！」  
「コラッ！ しんのすけ！」  
「もう、好き勝手に食べるぞ！」  
「ちよつとギロロ！」

皿に大きな骨付き肉をとったギロロが言うと、一目散に食べ始める。

「あ〜もう…まっ、いいか」

「よっしゃ！ 始めようぜ！」

そう言つてドラえもんズはどら焼きを目掛けて飛び込む。  
山のようにある大量にどら焼きを、ドラえもんズが凄まじい勢いで食べ漁っていた。

「うめえぜこれも！」

「食べながら話さないでよ！」

「意地汚いなあ…もう」

恥ずかしいといった表情で、のび太とスネ夫はジャイアンを見る。  
皿に積み上がった料理を、ジャイアンは次々と胃袋に入れていた。

「ボクも負けてられないですう！ このお菓子はいただくですう！」

「お、落ち着いてタママちゃん…」

三段重ねのケーキをタママが丸ごと食べようとする。  
慌ててそれを静香が押さえる。

「いやゝ、皆よく食べるなあゝ！」

「ジェドーラ！ おかわりいゝ！」

空になったどら焼きの皿に、コックのネコ型ロボットであるジェドーラは驚く。

「ええっ！？ 今すぐ何て…！ 困った困った困ったなあゝ…！！！」

「いや今すぐとは言つてないけど…」

暴走した機関車の様にジェドーラはその場を高速で回る。  
すかさずツツコミを入れるが、聞いていないようである。

「あれ？ ギロロ。お兄さんは？」

「奴は、来れない。報告があるからな」

アクション仮面やガルル小隊は、結局ここに来れなかった。  
様々な理由があるのだろう…。

「そういえば、西澤さん。あの時は…その…」

「？ どうしたんです？」

赤くなりながら話す冬樹に、桃華は疑問に思いながら聞いた。

「ま、前に、抱きついた事…」

「あ、あれは、その…べ、別にいつでも私は…」

「えっ？」

「あっ！？ いえっ！ えっと…！」

「楽しいね！ ドロロ！」

「そうでござるね。小雪殿」

「今までの中で一番楽しい！」

「拙者もでござるよ！ 小雪殿と一緒になら…」

「ドロロ…／＼／」

「はい、モア殿。あゝん」

「あゝん…あ、おいしいです！ それじゃおじさまも…」

「あゝん…おお！ これはおいしいであります！」

二人の世界になりつつあるこの三組を止める事など…誰にも出来なかった。

「…なんだろ、あれ」

「大人の世界ってやつなのかなあ…」

「よし！ あれであたらしいリアルおままごとの台本を作るわよ！」

「ええっ！？」

「そ、そんなあ…」

絶望的な一言に、風間やマサオはタメ息をつくのだった。

「ぼー…」

「楽しそうだね…みんな」

「クツクツクツ…」

少し離れた場所で料理を食べているこの三人は、仲良く食べていた。

「ほらあなた！ それ取って！」

「ごめんなさいね、ひろしさん…」

「いえいえ、何の何の…」

使いつ走りとなったひろしは、秋とみさえの料理を取っていた。  
秋の頼みでもある為、満更でもない様だが…。

「よおしっ！ 盛り上がって来た所で、オレ様が一曲！」

「…えっ…えっ…えっ…えっ…えっ…」

その宣言を聞いた瞬間、ジャイアンの音痴を知っている者達は硬直した。

クルルは硬直はしていないが、冷や汗はかいていた。

「や、やめてよジャイアン！」

「このパーティーを台無しにする気か!？」

慌ててジャイアンを押さえる。

『ほっほーいつ! 聞こえる?』

スピーカーから、しんのすけの声が聞こえる。

見ると、マイクを持ったケロロとドラえもん、そしてしんのすけがいた。

『今更でありますか?』

『乾杯をしたいと思いますんだ』

『みんな、グラスをもつんだゾー!』

それに答える様に、手身近にあったグラスを持つ。

『この長い戦いが終わった事を記念して...』

『乾杯であります!』

『カンパンダゾー!』

しんのすけの言葉にズッコケながらも、全員はグラスを上を持ち上げた...。

楽しそうに笑いながら...。

こうして、この長い戦いは終わりを告げた。  
再び戻った平和に、ただ彼等は喜びを実感するのだった...。



## 最終話：戻りし平和な日々…（後書き）

最終話、いかがでしたでしょうか？

ここまで長いクロスオーバー作品に仕上げた初めてです…。

好きなアニメキャラを会わせたく書いてこの様なお話になりました。皆様、楽しんでいただけたでしょうか？

楽しんでいただければ光栄です。

そして突然ですが、次回作を作りたいと思います！

今回の三作品と、さらに新たな三作品を追加する予定です！（無謀ですが…）

新たな三作品は、私の好きな作品です。

何かは、掲載されてからのお楽しみという事で♪

しかし残念ながら、ドラえもんズは出ません…。

好きな方はすいません！

多すぎるとまずい事になるんで…。

さらに、主役がメインとなる物語になる予定です。

…長々と書いてしまい、すいません。

ここまで読んで下さった方、ありがとうございます！

ご感想とご指摘をくださった方も、ありがとうございます！

次回作もよろしければご覧ください。

それでは！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2341e/>

---

嵐を呼ぶ園児&ネコ型ロボット&ケロン人 ~世界を揺るがす大決戦!~

2010年10月8日16時11分発行